void

az

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｖｏｉｄ

【Ｎコード】
Ｎ２０２６Ｊ

【作者名】
ａｚ

【あらすじ】
２０８８年９月、快楽の末死亡するドラッグプログラムの存在が噂されるようになった。主人公ヴァンは友人の頼みから、ドラッグプログラムについての調査をはじめる。が、なかなかに前途多難な上、ハッキングされたりモルモットにされたりとだんだん渦中へ巻き込まれてゆくことに。現実と仮想現実が交差した世界で繰り広げられる、幼女と凡庸少年の探偵ごっこ物語。ラノベ風。ＧＬ要素有とありますが、ほとんどないです。エロもなし！　ラストにふあっと唸ってくれたら本望です。

void

void

■［形］

1 《法》〈契約などが〉無効の，法的拘束力のない（⇔valid）．
2 （（形式））（…が）欠けた，ない（（of ...））
3 からの，空虚な，何もない．
4 （（詩））無益な，効果のない，むだな．
5 〈土地・家などが〉あいた；〈地位・職などが〉空席の，欠員の

■［名］

1 （（通例a ～））空虚感，喪失感，物足りなさ，心の空隙
2 （（通例the ～））空間，虚空，真空，空白状態
3 （（通例a ～））空所，空隙（げき），（壁などの）すきま，割れ
4 （地位などの）あき，空席，欠員．

■［動］（他）

1 《法》〈契約などを〉無効にする，取り消す．
2 （（形式））…の（中身を）あける，〈便を〉排泄（せつ）する，

…を放出する．

３　〈部屋・場所・容器などから〉（…を）取り除く，　からにする，　きれいにする（（ｏｆ　．．．））．

――（自）（手術前などに）排尿する，　排便する．

［アングロフランス語←ラテン語ｖａｃｕｕｓ（からの）．　△ＶＡＣＵＵＭ］

『グレッシブ英和中辞典　第４版』

２０８８年９月１０日（金）

２０８８年９月１０日（金）

オレはギアを手首につけた。捻る。カチ、と音がして、接続された。身構える。パルスが走った。わずかな快感、オレは身体を震わせた。

一瞬で景色が雑多な部屋から、雑多なビルが乱立している裏路地に変わる。いつものくせで、手を見た。少年のものだ。見渡す世界は、すっかり様変わりしていた。視界が違う、身体が普段よりも軽い。オレは手を握りしめた。

ＤＲ、偽装現実と言われている。言葉のまま、現実を偽装する技術だ。一昔前のネットの中にもう一つの世界を作る仮想現実とは違い、ここは、本物の「現実」だ。目の前にうつるビルも、現実に存在し、目の前を歩く人間たちも、現在この時間この場所にいる。ただ、オレの様なＡＲ――拡張現実、実態を持たないただの映像体ーも、人々の流れに混ざっていた。

ＡＲ自体の歴史は長い。ＡＲは２０１０年頃に開発された技術で、現実にないものを現実へ投影する。ＡＲが開発された当初は、ＷＥＢｃｏｍの前に紙を置くと、ディスプレイには紙の上に３Ｄフィギュアが表示され、踊るといった他愛のないものだったそうだ。今ではあちらこちらにＡＲの広告が溢れている。空を飛ぶ文字であったり、地面からにょきにょき生えた絵が踊っていたり。そのＡＲを発達させたものがＤＲだった。ＤＲは約十五年ほど前から急速に発達した技術で、人間自身を偽装し、ＡＲ化させることを言う。つまり、このオレの姿は本来のオレではなく、オレが望んで作り上げたものだ。だが、この偽装したオレでさえ、「現実」に存在した。

鏡にうつる偽装した姿、アバターは、ありふれた深緑のＴシャツ

に半ズボンのクソダサい服を着ていて、どこにでもいるクソガキの姿だった。茶髪に色素の薄い鳶色の目も、どこか生意気に見える。まさに、オレの精神そのものを体現していた。

オレは裏路地を出た。すでに深夜のはずなのに、チカチカしたネオンとＡＲで、昼間よりも明るく思える。雑多なビルの隙間には、ハングルやら簡体字、繁体字のごじゃごじゃした広告ＡＲが出ていた。日本語はない。広告ＡＲの区画は法律で定められているはずなのだが、この場所にはそんなもの通用しないようだった。大久保は百年前からこんな場所だと聞いたことがある。新宿からたった一駅、その距離で途端に異国と変わる。行き交う人も、東南アジアや韓国、中国系が多い。ただし、こちらはあくまでも実体だ。ＡＲ化された人間、ＤＲには、青色の髪や緑の肌など、国籍不明なやつらが多かった。中には人間ですらない姿も見える。ペンギンやらクマやらもいた。当然中身は人間だ。

「遅かったね」

声がした方を向いた。大通りを跨いで、人ごみの中に辛うじてお馴染みとなった姿が見えた。短髪、１７歳ぐらいの少年。他に２０歳前後の金髪碧眼に縁なしフレームの眼鏡をかけた青年、ふわふわした５歳程度の白欧系幼女が屯していた。

「そうか？」

ギアを見ると、２３：００と表示されていた。「いつも通りだろ」

「早くおいでよ」

促され、人波を避けながら道を横切る。実体の人間は、ＡＲを視ない人も多い。大久保の多くはギアやＡＲのパルスを視覚野に同調させるチューナーを持っていない人たちだが、ＡＲに煩わしさを感

じたくない人間も、意図的にＡＲとの同調をオフにする。そういったＡＲを視ない人たちは、当然オレたちＤＲを認知せず、歩く。ＡＲはただの映像だから、決して実体の人間とぶつかることはないが、自分の身体を通り抜けられるのは、決して気持ちいいことではない。だから、オレたちＤＲが実体を避けるというのが通常だった。人ごみだと、その避ける技術も高度なものが要求される。やっとの思いで対岸にたどりついたときには、軽い疲労感を感じた。

「ヴァン～、だっこ」

幼女が小さな両手をオレに差し出した。つぶらなピンク色の瞳がオレを見上げる。波打ったハニーブロンドにふっくらした頬という非常にかわいらしい外見の幼女だが、中身はオッサンだとオレは断定している。仕草がかわいいのはなりきっているからだろう。最近のガキよりもよっぽど愛らしいのが恐ろしい。オレの中で立派に変態の称号を与えている。それでもオレは、ルネの頭を撫でた。気持ちよさそうに目を細める。そうやって、抱きついてこようとするのを、頭を抑えて阻止した。

「で、こんなところに集まってどうしたんだ？」

「あのね、ルネたち賭けしてたんだよ。ヴァンがどこから出てくるかって。セインはこっちで、カインはあっち。ルネは今日はもう来ないって方にしたんだ。みんな外れだね」

「……」

あどけない口調で、さらりといった。人差し指を口元において、目線は斜め上だ。

「ルネはオレに来てほしくなかったのか」

「違うもん。最初から期待しないでいれば、ヴァンがこなくてもがっかりしないでしょ？　それに、来てくれたときはとてもうれしくなるよ」

とろけるような笑顔がよけいに胡散臭い。そうかそうか、と頭を撫でて、ふわふわした髪をくちゃくちゃにしてあげた。
「ごめん」
黒髪の少年が俯いてすまなそうにつぶやく。
「いいさ」オレはセインに向かって笑いかけた。大したことじゃない。どうせルネにうまくのせられてしまっただけだろう。
「カイン、何を賭けてたんだ？」青年は誤魔化すように眼鏡を調整した。
「さぁ？」
目が泳いでいる。ロクでもないことだ、とあたりをつける。が、お流れになった賭けだ、まぁいい。ぽんぽん、とルネの頭をやさしくたたいて、オレは賭けを忘れることにした。
オレたち四人は、こうやって夜の大久保でつるむ。別段約束をしているわけではない。なんとなく気がついたら暇つぶしに来ていた。大抵はみんなでゲームしたり、雑談したり、たまに散策という名の冒険をしたりする。ルネはオレをいじり、オレはいじられ、セインとカインは肩を寄せて苦笑する日々だ。
さて何するか、とカインとセインへ向いた。今日は金曜だ。学生の二人を気遣うことなく、とことん遊べる。
「ねぇ、ヴァン。ルネが」
「ルネ？」
オレは屈んでルネを覗き込んだ。ルネは絶えずはしゃぐ。そのルネが黙った。
焦点のあわない目。ゆっくり左腕を上げ、どこかを指で示した。その様子は何かに操られているみたいだ。
「こっち」
ピンクの瞳に光が戻った。この変な行動はわざとだろうか。ルネならば珍しくはない。一応訊いてみた。「何が？」
瞬間、オレの左手首に、ルネが抱きついた。ビックリして手を引こうとしたが、抜けない。

「こっちにヒマツブシがあるの！」
幼女にあるまじき怪力で、ルネはオレの腕を引っ張り、闊歩した。ルネの身長は低い。オレは傾きながら、バランスを崩さないように、とても情けない姿で連行された。

三回実体にオレの身体を通り抜かれた時、ルネの向かう先から悲鳴があがった。
「何だ？」
人が集まってどこかを見ていた。
カインが背伸びをして先を覗く。カインは背が高いのでこういうときは得だ。カインが息を飲んだ。ルネが「ルネもルネも」と先を急ぐのを抑え、オレが道を作る。ルネは外見だけはちびで幼女だ。こいつが先頭では、下手をすると人ごみに押しつぶされるかもしれない。どこから人がわいてくるのだろう。
人の壁が消えた、と思ったら最前列だった。飛び込んできた光景が一瞬理解できなかった。ルネが一歩遅れてオレの隣に顔を出し、セインがルネの後ろに立った。
目の前で繰り広げられる奇劇にオレは何も言えなかった。セインも呆然としていた。
「うわぁ」
ルネの無邪気な声が響く。

ＤＲのカップルが重なって路上に倒れている。血は流れていないが、唸り声が痛みを伝えていた。加害者だろう。ＤＲの男が口から涎を垂らしながら、鉄パイプを振り回していた。
ＡＲを視ていない女性が歩いている。男は女性をめがけて、鉄パイプを打ち込む。そして、女性の身体をすり抜ける。女性は男に気づかず、歩く。狂った光景だった。男は、女性と同じように、次々と通行人を襲う。ヒッヒッヒッと謎のうめき声をあげていた。

ＡＲを視ない人ならよかった。深夜残業をしていたような疲れたサラリーマンも、酔っ払ったオヤジも、汚らしい浮浪者も、男の鉄パイプをすり抜けていった。次に男が標的にしたのは、浅黒い肌のアジア系の子供だった。手にはカードを持っている。娼婦に手振り身振りで話していた。物売りなんだろう。ＡＲがしっかり視えるのに、商売に夢中で今までの喧騒に気づかなかったらしい。男の鉄パイプは娼婦の頭をすり抜け、一緒に少年まで切った。少年は急に押し黙り、目を見開いて男を視る。娼婦は少年の変化に眉を顰め、きびすを返した。男はもう一度鉄パイプを振る。子供は逃げようとして、足を縺れさせ、倒れ込んだ。

少年は震えていた。オレたちは遠巻きに見物する。ＤＲのオレたちにとって、あの狂った男も鉄パイプも実体だった。だから近寄れなかった。男は、少年に標的を定め、何度も鉄パイプを振り上げた。

「ひどい」

セインが顔を手で覆った。「そうだね」カインがセインに寄り添う。

幼女はオレの手を握りながら、子供ならではの無邪気さを装い、「ほおお」と奇行を凝視していた。

何度も何度も鉄パイプが少年の頭を通過する。虚ろな目で男を凝視していた。足元には商品が散らばっている。

「ドラッグだ」

ルネの澄んだ声が聞こえた。

「最近流行ってる、ドラッグプログラム」

オレは無意識にルネの手に力を込めた。

ＤＲたちがだんだん集まってくる。ＡＲの視える人間も、ＤＲの男には触れない。誰も男を止めることができない。少年の足元に、液体が流れでた。

多分、大人なら、たかが映像だと、鉄パイプを無視できたかもしれない。あるいは同調を切断するとか。だけど、また小学生ぐらい

の子供だった。目から涙を流し、男が鉄パイプを降り下ろす度に殺される。警察は来ない。気分が悪くなった。

「ヴァン？」

顔を背けたオレを、ルネが不思議そうに覗き込んだ。

「……確かに、見て楽しいものじゃないね」

幼いのに、変に老成した声だ。

男がまた鉄パイプを振り上げた。もう少年は反応しない。男の唾液はまだ口から溢れだし、周囲に散る。鉄パイプが、少年の頭を通過しようとした。

「あ」

瞬間、男が消えた。声を発したのはカインだったか、セインだったか。

自失呆然とした少年にやっと異変を感じたのか、ＡＲの視えない人々が少年を介抱しはじめた。

「終わったね」

セインが口を開いた。俯いている姿は女性的だ。

「残酷だった」

現場から離れたい一心で、大久保の雑居ビルに場所を移した。廃ビルで、浮浪者や不法滞在者の寝座になっている場所だ。一ヶ所だけ、実体では侵入不可能な場所、完全に埋め立てられてしまった地下に、ＤＲ専用の部屋がある。オレたちしか知らない特別な場所だ。カントリー風に部屋が統一されていて、パッチワークのカーペットが敷かれている。ルネは唐草色のソファにちょこんと座っていた。

「ルネ、さっきドラッグっていってたけど、何？」

「んー？」

ルネが小首を傾げる。視線は斜め上。カインは真剣にルネを見つめていた。オレは仏頂面でソファにもたれかかっていた。セインもあれから俯いたままだ。

「この前一人でここに来た時もああいうの見たんだ。あそこまで酷

くはなかったけど、虚ろな眼で、ブツブツとつぶやきながらどこかへ歩いてた。ＤＲだったよ」

カインが眼鏡を押し上げる。

「ぼくも……。気味が悪かった。梅田で見た」

「ヴァンは見たことある？」「ない」ルネの声に即答する。今日はおもしろくない。空気が重い。さっさと帰ってやろうと思った。帰っても何もすることがないが。

「最近ね、」

ルネが頬杖をついて、ＤＲ化されたジュースを啜った。

「ドラッグプログラム？　っていうのがあるんだって。ルネも見たことなかったんだけど」

「電子ドラッグ」

「んーちがうかなぁ」

ルネはカインの言葉を否定した。「電子ドラッグてのは、６０年ほど前に流行ったんだけど、あれって動画なんだ」のほほんとした台詞で、ルネはのんびり説明しはじめた。電子ドラッグが登場したのは１９９０年代の終わりからしい。チカチカした動画と独特なリズムの音楽で視聴者に酩酊感や多幸感、たまに幻覚をもたらすものだ。依存症も多少はあるが、睡眠薬よりも酷くはない。何度も電子ドラッグを視聴することで耐性が出来、そのうち「見たい」なんて欲求もなくなる。一時的に流行することはあるが、すぐに廃れる。このサイクルを今まで数度繰り返してきた。

「要は電子ドラッグに飽きちゃうってことなのかな」

あんなの、ドラッグですらないよ、とかわいい口が吐き捨てた。

オレは帰るタイミングを伺いつつ、ルネの説明に耳を傾けていた。

ルネはコンピュータやネット、いわゆるＩＴサービス系に強い。裏の情報は何でも知っているんじゃないかと思われるぐらいの博識だ。しかも今だけではなく、古いものまでよく知っていた。だからオレは勝手にルネの中身をＩＴ業界で働いているオッサンだと見ている。どう考えても１０代や２０代で得られる知識量ではないだろ

う。

「今日のは多分ドラッグプログラムってやつなんだけど、それはね」

ルネの小さな指が、ぼーっとしているオレの額をつつく。

「ここにね、直接作用するの」

「やめろよ、ルネ」

ルネの手を払おうとするのを見事によけて、さらにオレの頭を指した。

「セイン、カイン。人がどうやって快楽を感じるか知ってる？」

二人はオレの予想通り、首を横に振った。

「ここに、腹側被蓋野っていうのがあるんだ。生物で習ったかな？中脳にあるんだけど」

「確か、大脳への信号中継だっけ」

カインの台詞に、うんうん、とにこやかにルネが頷いた。

「ここからね、このへんの奥に大脳基底核っていうのがあるんだけど、ここに向かって、ドパミンが分泌されるんだ」

オレの頭をルネの指がなぞった。

「ドパミン？」

興味を引かれたのか、セインが顔を上げた。ルネは得意そうな顔をして、さらにオレの頭を触りまくる。

「快楽物質とか、脳内麻薬物質っていったほうが通りがいいかな。このドパミンが分泌されて、さらにドパミン受容体と結合すると、こう」ルネが謎のポーズをとった。「びびび～っと電流が走って気持ちよくなるんだ」

「なんだか難しいね」

「別に理解しなくてもいいけどね」

「ドラッグプログラム？　は……」「ドラッグプログラムはね、その快楽を感じるプロセスを、プログラムでなぞるものなんだよ」カインの後をルネが引き継ぐ。セインとカインの頭の上に、大きなクエッションマークが浮かんでいた。ルネは一息ついた。袖をたくって、自分の細い腕を見せた。細いのにふっくらして、大きいマシュ

マロのようだった。上腕に見覚えのあるギアがつけられている。オレのオンボロとは違い、最新版だ。水晶のようなアクセサリがギアに垂れ下がっていた。

「ギアがどういうものかは知っているよね。DRと実体の変換器。DRでも味覚、聴覚、触覚、痛覚、臭覚があるのはなんでかな？どうして、自分は「実体」じゃないのに、実体と同じように現実を感じられるのかな？」

ルネは別に答えを期待しているわけではなかった。ルネは自分のギアを撫でる。

「このギアが、ルネたちの感じるものをパルスに変換して、直接脳に流し込むんだよ」

桜色の小さな口が、ゆっくりと動いた。

「つまりね、ギアがルネたちの脳神経を制御してるの。こいつを狂わせたら、ドパミンも流し放題なんだよ」

静寂。

オレはだんだん疲れてきた。今日はこんなくだらない話をしにきたわけではない。単なる暇つぶしだとしても。だが、まだ話が終わらないことをオレは知っていた。誰かの口が開くのを待つ。

「でも、何でそれがあんなに狂ってしまうんだ？」

カインだ。ルネもその問いを待ち構えたように、にこやかに笑った。

「統合失調症と一緒なの。ドパミンは興奮を伝える神経伝達物質だから感情に作用するでしょ？　それを不自然に増やしたら、当然情緒不安定になるわけ。幻覚もね、それかな。それに、ドパミンが過剰に分泌されたままだと、ドパミンを受け取る場所、ドパミン受容体っていうんだけど、そこで受け取るドパミンの量が減っていっちゃうの。そしたら、ドパミンがたくさん脳にあっても、あまり快楽を感じなくなっちゃうでしょ。結果依存症になって、アウト」

ルネが人差し指で首を切る真似をした。

「麻薬と、同じだよ」

「……」

セインとカインの中身は学生だ。オレと同様に重い話かもしれない。一人嬉々としているルネだけが浮いていた。

「オレ、帰るわ」

一息ついてオレンジジュースを飲むルネの頭をぽんぽん、と軽く叩いた。

「じゃあな」

ルネが何かいう前に、セインとカインに挨拶し、ギアを捻る。パルスが流れ、その先は、相変わらず汚いオレの部屋だった。

２０８８年９月１３日（月）

２０８８年９月１３日（月）

セインからメールがあったのは、あれから３日後のことだった。どこかで会えないかというういたってシンプルな内容で、それ以外は何も書かれていない。オレはセインと格別親しいというわけでもなく、メールですらやりとりをしたことは数えるほどしかなかった。不思議に思いながら、オレはたどたどしく了承の返事をした。

あの日から、何となく大久保には行っていない。元々大久保へは毎日行くこともあれば、３ヶ月ほどまったく近寄らないこともある。今は気分が乗らなかった。だから、セインとは代々木で待ち合わせをした。しばらくあの少年の身体になる気にもならなかった。ガラスが写すオレの姿は、セインと同じような十代後半の身体だ。黒髪で中肉中背、かっこよくもなく、といって格別醜いわけでもない。グレーのパーカーにはき古したジーンズ。まず人々の記憶に残らない平々凡々の姿だ。

２２：３０。代々木駅西口の端でギアを確認する。約束の時間だが、まだセインの姿は見えなかった。代々木駅も、実体とＤＲが溢れている。東京は人が多い。やはり少年の姿でくればよかったかな、とため息をついてギアを弄る。セインにオレがわかるだろうか？オレのギアは驚くほど古いため、ろくな機能もなく、当たり前の映像付き通信すらできない。識別信号さえ発することもできないし、受信することもない。壁にもたれかかって、人ごみを見た。

モノレールを使うのは実体のみで、改札口と駅構内はＤＲ避けのバリアが張られている。見事に実体の人間のみの世界と、実体、ＤＲが混沌としてまじりあっている世界に、改札口という境界線が引かれている。意外におもしろい。まるでオレたちＤＲが異分子みたいに、改札口から先にいけない。ふざけたパンダのＤＲが改札口に

突進しては、見えない壁に弾かれている。ＤＲ初心者なのだろう。どうして先に進めないのか、わからないようだった。決められた物のみを通す機能は選択透過性っていうんだっけか、遥か昔に教わった記憶が頭を掠めた。

「ヴァン？」

振り向いたら、高校生ぐらいの少女がいた。ＤＲだ。黒のセミロングに黒のワンピース、少女らしい清楚感がある。表情が固いのは緊張しているからか。どことなく、雰囲気に覚えがあった。

「セイン？」

「あ、やっぱりヴァンだったんだ。そのギア、絶対そうだと思ったんだ」

彼女は頬を染めて破顔した。確かに、今時こんな旧式をつけているやつはいない。オレの複雑な表情に、セインは拗ねた顔をする。

「もう、これがないとわかんなかったんだからね」

「すまない」

オレだけが謝るのは違う気がしたが、セインが満足そうに微笑むので、まぁいいか、とオレも有耶無耶な笑みを返す。

「セイン、それで、用件はなんだ？」

「うん、あの、ここじゃなくて、どこか落ち着ける場所ないかな？なるべく人のいないところで……」

恥ずかしそうに俯く姿が、少女姿にはよく似合った。このセインの様子に、慣れてない男ならきっと勘違いをするだろう。オレは不安になってきた。セインの仕草は打算的な女性のものでもなく、男性が女性に扮した大げさなものでもなく、自然な少女らしさがある。

無言でセインを見ていると、急にはっとしたように彼女が顔を上げる。真っ赤だ。

「あのっ、べ、べつにそんな」

「わかってるよ」

セインが普段の少年姿をしているのは、恐らく知人に見られても

他人と認識させるように、という意味だろう。代々木は大久保から近いし、オレたちはよくこの辺で集まる。知人も多くはないが、いないわけではない。

「どこか、そういう場所に心当たりある？」

彼女は首を振った。オレはため息をついた。

「この辺だったら、一ヶ所だけ知ってるよ。後は……、一回リブートしないと行けないな。北海道とか、大阪とかだから」

「じゃあ、そこにいこう」

オレは曖昧に頷いた。

「ヴァン……、ここって……」

セインは引きつった笑みを浮かべながら、壁に向かって指さした。心なしか、顔色が悪い。

「ああ、そうなんだ」

オレは神妙な顔をした。

壁からうねうねと赤黒く気持ち悪いものが動いている。ぬらぬらと薄暗い照明を粘膜が反射していた。

「触手クラブなんだ」

観念したように告白した。セインは何とも言えない表情でオレを見上げる。その顔には、でかでかと「変態」と書いてあった。

「あのなぁ……」オレは触手を避けつつ、壁に近づく。ギアに手を当て、短い信号を壁の小さなアンテナに送った。触手が溶けて消える。

「オレはこんな趣味はないよ。大久保の地下ほどじゃないけど、穴場なんだ。極一部のマニアックなヤツしか知らない。しかもＤＲ専用で、個室。こんな店だから、セキュリティだけは充実してるだろ。秘密話にはもってこいだ」

「そうなんだ」
耳まで紅色に染めながら、無理矢理納得したようにセインがつぶやいた。学生にはまだ早い店だったかもしれない。
伝統的な悪徳の街、新宿歌舞伎町の裏路地にひっそりと構えている店で、すべてＡＲで作られている。そのくせカモフラージュされているので、一見するとただの壁だ。一ヶ所だけＤＲバリアが張られていない場所があって、そこの壁をすり抜けると、このいかにも如何わしい触手クラブなる場所に出る。オレのクレジットから幾許かのお金が引かれ、この気色悪い部屋に導かれた。
「まぁ、落ち着けよ」
気休め程度にセインを宥めた。触手が消えた後にソファとテーブルが出てきたので、オレは遠慮なく座る。
「う、うん」
恐る恐る、彼女はソファを触った。
「これ、あの変なの出てこないよね」
「大丈夫だよ、オフにしてるから」
「そ、そう」
意を決したように、思い切って腰かけるセインがかわいらしい。オレの隣、距離は６０ｃｍほど離れている。隅っこの隅っこだ。想像以上に初々しいぞ。大久保では見たことがない一面だったから、新鮮だった。

セインは一息ついて、ワンピースのポケットから、小さなチップを取り出した。どこにでもある量産品で、缶コーヒー一杯程度の値段で購入できる。
「これ」セインの目は真剣だった。「ドラッグプログラム……だと思うの」
「……」
チップを手にとった。ＤＲ化されているが、現物はセインの本体が持っているのだろう。裏を見ると、小さな文字で、２５６Ｍ、と

書いてある。２５６×８×１０の６乗ビット。だけど、実際はこれよりもはるかに小さいプログラムだろう。

「３日前あんなことがあって、ずっと怖くて……、それで」

セインの目が潤んでいる。必死に言葉を紡ごうとしては、言い淀んでいた。

「これ、みてみていい？」

小さく彼女は頷いた。

ギアにチップを当てる。チップとの接触部分が一瞬だけ青白く光った。オレの前にスクリーンが映し出され、文字が流れた。スクリーンをなぞって、中身を読み取ろうとした。

「だめだ、壊れてる」

スクリーンの文字は意味をなさない。オレの操作にも何も反応しなかった。ファイル構造さえわからない。

スクリーンを消して、チップをセインに返した。

「コピーガードか使用制限がついてたのかもな」

セインはびくっとしたように反応し、俯いた。

「どこで手に入れたんだ？」

その台詞が引き金となったのか、急にガタガタと震えだす。彼女は背を丸めて、必死に震えを抑えようとしていたが、その姿が余計に大げさに見せた。

握りしめた彼女の手に、雫がぽたぽたと落ちてきた。オレは肩をすくめる。「まぁ、いいんだけど」嗚咽がきこえた。

待った。彼女が落ち着くまで、オレはぼーっと天井を眺めた。セインはここが触手クラブってことすっかり忘れてんだろうな、なんて思いながら。

「それ、学校の先輩から、貰ったの」

ぽつん、とセインが言った。

「一週間ぐらい前に、先輩がおもしろいものあるからって。誰も言っちゃだめだよ、特別だからって」

オレは黙って聞いていた。セインの声は震えていた。

「私、大阪に住んでるんだ。3日前の、梅田で見たっていってた狂った人、先輩だったの。私、その時は実体で、何もできなかった」
ＤＲと実体は、触れ合うことができない。ＤＲはただの映像だから。
「駅の構内に座り込んで、シャープペンシルを自分の手に刺して嗤ってた。でも、血は飛ばなくて、みんな気づかなくて、私も怖くなって、逃げたの」
セインの手に力が入る。
「先輩、昨日死んじゃった」
「……」
「わ、私、ドラッグプログラムなんて知らなかったの！　麻薬なんて、そんな……、知ってたら、絶対使わなかった……！　あんな風に狂うなんて、私は！」
オレは、６０ｃｍの距離を詰めて、セインの頭を撫でた。さらさらとした髪の毛が指の隙間を流れる。小さな肩。
「ヴァン、助けて」
呟きにもならない、小さな声だった。幼い子をあやすように、撫でつづけた。セインの顔は見えない。
「なぁ、なんでオレ？」
素朴な疑問だ。格別コンピュータにも詳しくないし、コネもない。とても頼りになるとは思えない人間だ。
「ルネのほうが格段に詳しいだろ。カインも頼れるし」
「無理だよ。ルネ、怖いし」
嬉々としてドラッグを語るルネ、わかる気がする。
「それに、カインは、あの、学校の同級生なの」
関わらせるのはまずいな。セインも知られたくない、というように顔を背ける。
「それで、もう頼れるのって、ヴァンしかいなくて……」
消去法かよ。
申し訳なさそうにオレを見るセインに、思わず笑みがこぼれた。

普段ルネにやるように、ぽんぽん、と軽くセインの頭をたたく。
「いいよ、できる限りのことをやってみる」

２０８８年９月１４日（火）

２０８８年９月１４日（火）

「ただし期待するなよ」

そう逃げ場を作ったので結局何もしませんでした、じゃまずいよな？　オレは自問した。

現在、東京都新宿区大久保一丁目、築五十年の廃ビル。１Ｆからしかないビルで、オレは迷わずＢ１Ｆへのびる階段を降りた。例のルネの隠し部屋だ。ボロボロでひび割れた木のドアを開けると、スタイリッシュな部屋が現れる。透明なテーブルに黒色のソファ、ワインレッドの小物がアクセントになっていた。この部屋はすべてＡＲでできているので、模様替えに金銭はかからないし、手軽だ。ルネの気分によって簡単に家具や壁紙が変わる。金曜までは木がベースのカントリー調な空間だった。六畳ぐらいの大きさで、四人で入ると、ちょうどいいか狭いぐらいだった。今はひどく広い。

「ルネは、いないか……」

１８：０３、社会人ならまだ仕事中かもしれない。オレはソファに腰掛け、スクリーンを出した。数時間前に「ドラッグ」「プログラム」「ＤＲ」「麻薬」「チップ」等をキーワードとして情報を抽出するエージェントを流しておいたのだ。運がよければ有益なサイトがヒットしているかもしれない。ＡＲ、ＤＲが発達した現代であっても、情報の主流はテキスト・動画ベース、つまりインターネットから得られることは昔から変わりがない。エージェントは、これらインターネットを巡回し、有益な情報を収集する。

一覧のほとんどは巨大掲示板からの投稿だった。５１３０２件。一般サイトや動画はほとんどない。オレの予測通りだ。巨大掲示板は、ガセ・真実が混在した場所だ。一般ユーザが匿名と信じているからこそ、犯罪やそれに近しい情報が平気で投稿される。

オレはスクロールし、軽く一覧に目を通しはじめた。
「ふぅん。ドラッグプログラム」
思わず手が滑ってスクリーンが消えた。
「ルネ?!」
振り返えると、愛らしいピンク色の瞳とぶつかった。少々視線を下にずらすと、床に箱があって、さらにその上に小さな靴が見える。高さが足りなかったらしい。
「驚かすなよ」
オレがこの部屋に来てから、まだそんなに経っていない。
「いつからいたんだ?」
「ヴァンがおもむろにスクリーンを出した時からだよ」
ルネはトテトテと歩いて、向き合うようにオレの膝の上へちょこんと座る。
「はじめてだね。ヴァンがこの時間に、しかも一人でここにくるなんて。ルネに用事?」
ルネは小首を傾げた。この部屋はルネが作った場所で、「いつでも遊びにきてね」といわれていたが、ずうずうしく訪ねたことはなかった。ただ、確実にルネに会いたければ、ここしかない。オレと同じく、ルネもいつも大久保に現れるわけではないのだ。そして、オレはルネの連絡先を知らない。
「ああ。ルネ、ドラッグプログラムで知ってること全部教えてくれないか」
「ドラッグプログラム、興味あるの? この前のルネの話、耳を塞ぎたいって顔してたのに」
「色々あるんだよ」
ルネは上目遣いでオレを覗き込んだ。思わず目を逸らした。無垢そうな表情だが、それがただの錯覚だということをオレは知っている。
「ルネ、おすすめしないなぁ。好奇心だけで手を出すと危険だよ」
唇を尖らせてる幼女はなかなかかわいらしい。宥めるようにふわ

ふわの頭をなでなでしたら、幼女は気持ち良さそうに目を細めた。
「まぁ、いいか」
くるりとルネが回って、オレに抱きかかえられるように座り直した。
「さっきのスクリーンだしてみて」
スクリーンの光を細いルネの金髪が反射する。スクリーンには、エージェントが拾ってきたドラッグプログラムに関する情報の一覧が並んでいる。一瞬で目を通したのか、軽く頷いた。
「よく集めてるね。ヴァン、それじゃこれ、時系列順に並べてもらっていいかな」
一瞬で並び替えが終了した。一番古い情報は、２０７５年１２月だ。そこから、２０７７年６月、２０８３年９月と続く。年月も飛んでいて、キーワードで偶然引っかかったような内容だった。２０８５年から徐々にヒット件数が増える。９０７６件目、ルネが指さした。「ストップ」
２０８８年８月２０日。
「……」
ルネは何もいわない。オレはスクリーンを走らせた。２０８８年８月２０日、２０８８年８月２０日……２０８８年８月２１日……。
「ルネ、これは」
「うん、気づいたね。２０８８年８月２０日から急激に『ドラッグプログラム』の情報が増えてるの。２０８８年８月２０日前後は単なる噂話だったんだよ。ドラッグプログラムってのがあるらしいってぐらいの、他愛もないもの。ルネが存在を知ったのもこの頃」
ルネが指を走らせ、一点を指した。２０８８年８月２５日、ドラッグプログラム体験談のようだった。
「この日から、体験談が増えていくよ。そして、９月２日には……」
小さい手がスクリーンを操作する。オレが集めた情報ではない。どこかへアクセスしているようだった。パッとスクリーン一杯にでたのは、変死体の情報だった。死体の身元や、発見状況、解剖の記

録が綿々と綴られている。「外傷なし」「薬物反応なし」「ドパミン過多」の文字が目に飛び込んだ。オレは喉を鳴らした。
「多分、ドラッグプログラムの中毒者。体験談の登場から一週間ちょいってところかな」
オレは別のところで恐ろしくなった。震える指がスクリーンをさす。
「なぁ、ルネ、これって……、警察のマル秘情報じゃないか？」
「そうみたいだね」
「オレまた不正アクセス禁止法でしょっ引かれたくないんだけど」
「大丈夫。警視庁とか警察庁にアクセスしたわけじゃないよ。この手の情報は探せばネットに落ちているもの」
「でもなぁ……」
なんていいながら、しっかりオレはその情報を自分のサーバに保存した。
「それから、こういうのもあるよ」
ルネがオレの膝から飛びおりる。肩のギアを操作した。ガラスのテーブルの上に、小さな映像が浮き出た。
「これ……」
ミニチュアの男が鉄パイプを振り上げ、暴れていた。つい先日見た光景だ。
「あの人だかりの誰かが撮ってたみたい。それと」
映像が消えて、代わりに浮かびあがったのは、先ほどと同じような変死体の報告書だ。顔写真は、弱そうな黒縁眼鏡で七三の学生だ。死亡日時は9月11日午前3時だった。
「あのDRの実体だと思うんだ。ほら、この写真の手首にしっかりギアついてるでしょ？　あの動画の男と同じギアだよ。量産品の安物だけど、同一人物って可能性はあるよね」
オレはルネの情報収集に舌を巻いた。それと同時にルネが空恐ろしくなった。
「ルネが教えるのはここまで。ドラッグプログラムの販売経路？

とか、入手方法？　とか、そういった情報はほとんど出回ってないよ。何だか得体が知れなくて、気持ち悪いね。追って危険かどうかの判別もつけ難い。だから、ヴァンもあまり関わらないほうがいいよ」

ルネが言外にこれ以上の情報収集は安全を保証しない、と告げた。オレよりもよく知っているルネのことだから、そうなんだろう。頭には、セインのＤＲがちらついた。うつむいたときの小さな肩。震えた声。

「ありがとう」

改めてルネの頭をなでる。

セインはオレにどこまで求めているのだろうか？　どう助けて欲しいのだろうか？

「おかげで助かった。じゃぁ、行くよ」

オレはギアに手を当てる。ルネがじっとオレを見上げていた。

「ヴァン、あとね」

「何？」

「サイバー課が、ドラッグプログラムの件で動き始めたよ」

無表情でルネが告げた。

広大な北海道の草原に、ぽつんと一件の建物がある。ファンシーが外観で、きらびやかな赤、青、黄、ピンクのケバケバしいランプが点滅していた。夜、暗闇に浮かび出たその場違いな建物の正面には、曲がりくねった文字でこう書いてあった。

『アリスの国』

建物はＡＲでできているため、ＡＲのパルスを受信しなければ、当然見ることはできない。ＤＲでなければ入店は出来ない。いかに

もいかがわしそうなその建物のピンク色の扉を、勇気を出してギギギと開く。すると、かわいらしい幼稚園児や小学生ぐらいの少年少女が「おかえり」と歓迎する。一人だけタレ目の青年が、「今日はどの子とおねんねしますか」とにこやかに訪ねる。来訪者を一様に見つめるつぶらな瞳。

ここは、幼児や少年少女の姿をしたＤＲの、売春宿だった。

そんな売春宿の、子供部屋を模したおもちゃの散らばる部屋にいるのは、オレと、男。決して子供ではない。

「やっと遊びに来てくれたのかと思ったのに」

タレ目の男がボヤいた。残念ながら、オレにはペドだとかロリだとか、さらにはショタだとか、そんな趣味も性的指向もない。だから、この店のオキャクサマになることは、今後ともないだろう。それを、この男はいつまでたっても理解しようとしない。

オレの冷たい視線に気づいたのか、男が姿勢を正した。

「な、なんだよヴァン。別に法に背いているわけでもないし、お前に非難されるいわれはないぞ」

開き直った。この幼児趣味専用の売春婦・夫はＤＲこそ小学生までの少年少女の外見をしているが、中身は立派に成人した実体であるらしい。高額で雇っている。さらにはほとんどが男性であるそうだ。男のほうが男の扱い方を知っているから、とはタチバナの弁だ。ごもっともだ。だから一部では人気の店になっている。

このタレ目の男、タチバナは歴とした『アリスの国』の経営者である。

そして、幸か不幸か、オレの唯一の実体での知り合いだった。

「別に責めているわけじゃない。仕事中に突然来て悪かったな」

「いいさ、俺がいなくても店回るし。というか、いない方が店的には売上が高くなるんだよな。でも、あそこにいると保父さんになった気分になって楽しいんだよ」

「あっそ」

タチバナは子供に欲情する嗜好はない。だからこそ純粋にビジネスとして店が成立していた。オレにはどうでもいいことだが。
「で、どういった用件なんだ。ヴァンがここにくるなんてものすごーーい珍しいことなんだけど」
「ああ、あのな……」
洗いざらいにドラッグプログラムのことを話した。セインのこともだ。ルネからもらった情報もスクリーンに映して見せた。タチバナが唸る。
「もっかい見せてもらっていい？　さっきの変死体のやつ」
スクリーンにルネからいただいた調査書を表示した。
「すげぇ！　本物か！」
「何が？」
不思議そうに訊くオレに、「マジかよ」とタチバナが天を仰ぐ。
「これって、あれだろ。エマノン」
「はぁ？」
「天才ハッカー。しらねぇの？　すんごい騒ぎになってんのに」
「しらない」
タチバナが額に手を添えてため息をついた。こいつの動きはオーバーすぎる。
「お前、山篭りしてたの？　どこの情報弱者よ」
「……」
オレはハッカーなどに興味はない、そう言おうとしたら、タチバナが勝手に語り始めた。
「つい最近な、警視庁のサーバでルートキットが発見されたんだ。それな、置かれたの3年前なんだよ。3年前！　すごくないか、3年間も警視庁ハッキングされて気づかねぇの」
「何かのネタか？」
ルートキットは、ハッカーがシステムに侵入した後、2回め以降のアクセスを楽にするために置くツールだ。警視庁は防衛庁とともに、日本でもっともハッキングしにくいシステムとされていた。そ

の警視庁に3年もハッキングしてて警視庁が気づかないとは、作り話にもほどがある。オレはタチバナの顔を窺った。至極真面目だ。
「ヴァン、見てないのか？　今ちょうど警視庁が『ペネトレーションテスト実施しました』て慌てて公報したの、祭りになってるぞ。三年間もペネトレーションテストはないわな。ハッキングされたの誤魔化しすぎ。」
　警視庁にアクセスしたら、タチバナの言う通り、小さくハッキングをわざと行ってもらってセキュリティ強度テストしました、という旨の記事が載っていた。
「で、タチバナ、それとこれがどう関係あるんだ？」
　調査票を示した。
「大有りだろ。それ、多分エマノンがハックして流した情報だろ。じゃないとこんなもんネットにあるわけねぇよ。ほらみろ」
　スクリーンに「極秘」の文字が見えた。ルネがどこにでも落ちている、と言っていたので、すっかり忘れていた。
「へぇ」
「なんか感動だな。まさか現物見えるとは思わなかった。で、何の話だっけ」
　脱力した。
「お前なぁ。タチバナ。ドラッグプログラムだよ。さっきからずっと言ってるだろ」
「ああ、そうだった」
　タチバナがタレ目を細めた。タチバナはこんないかがわしい店を経営しているだけあって、セキュリティや法関係は専門家の域だ。警察のサイバー課の行動や世間の空気には敏感だ。タチバナはルネとは違う視点でこの世界をみていた。
「正直、俺は今までドラッグプログラムなんぞ聞いたことがなかった。俺の客にはこんなジャンキーみたいなやつがこなかったし、話題になるといっても、一部のアングラだけだ。俺の業界とはずれている部分だしな」

オレは頷く。
「でも、このドラッグプログラムですでに分かっていることもある」
「「合法」」
声が重なった。タチバナがニヤリと唇を歪める。
「わかってるじゃないか。そうだ、このプログラムは法の範囲内にある」
ドラッグプログラムは、薬物ではない。だから、各種薬物取締法には触れない。ドラッグプログラムはコンピュータウィルスではない。だから、サイバー系の法にも触れない。つまり、現時点では、ドラッグプログラムを大々的に販売することも可能だ。
「噂レベルではじまって、実際に被害も出始めているが、販売サイトはない。販売経路すら不明、ね」
カラカラとおもちゃのプロペラが回っていた。今はもうレトロになった飛行機の模型だ。この守られているような聖域で子供を犯すやつらは、一体どんな怪物だろう。
「ま、そういう販売方法もあるだろう。需要が高い分だけ、値段は釣り上がるもんだ。麻薬のような依存型なら、その売り方はどうかと思うけどな」
「そうか」
オレはタチバナの手に視線を移した。トントン、と机を叩く。
「まず、整理するか」

・噂　２０８８年８月２０日
・体験談　２０８８年８月２５日
・中毒者死亡？　２０８８年９月２日
・合法（サイバー課が動いている？）
・２５６ＭＢのチップ

スクリーンに出したオレに、タチバナが生ぬるい視線を送ってきた。

「おいおい、なんだこの微妙なまとめ方は。オレの話聞いてたのか？」

確かに5行で終わってしまっていた。だが、現状ではこれだけしか分かっていないのも確かだ、とオレは思っていた。タチバナがスクリーンに付け足す。

・販売者？
・販売経路？
・販売規模？
・作用？
・中毒者の摂取頻度と回数？

「まだパッとだしただけでも、わかっていないことがこれだけある。まずはこの表を埋めることだな」

さすが経営者だ。

「それから、ヒントだ。チップ、見たっていってたよな」

「ああ、DR化されているけど、元は実体だよ」

「だな、お前鈍すぎだ」

デコピンされる。

「よく考えろよ、ドラッグプログラムは実体で提供されてるんだ。そこから探れば、ある程度はわかってくるだろう」

「ああ、そうか」

打たれたところがジンジンと痛くなってくる。どれだけ力を込めたのだろうか。セインだな……、弱々しい彼女を思い浮かべて、オレは額を抑えた。

「俺の方でも何か調べてみるよ。裏の道は裏っていうしな」

「ありがとう、タチバナ」

「いいさ」

タチバナがにこやかに笑った。

「今度店を利用してぜひとも感想を聞かせてほしい。着飾らない意

見が欲しいからな」
「死ね」
「冗談だ」
真顔になった。
「まぁ、ドラッグプログラムのソースが手に入るようなら、欲しい」
「なんでだ？」
タチバナが、オレを見た。
「ドラッグプログラムを参考に性的快感を思いっきり高めるプログラムを作る。それを店で使うと……、大繁盛だな」
「つぶれろこんな店」
オレは立ち上がった。深夜0時近い。そろそろ店が忙しくなる時間帯だ。
「じゃあな」
「危なくなったら引けよ」
オレとタチバナは互いの拳を合わせる。これがオレたちの挨拶だ。

２０８８年９月１５日（水）

２０８８年９月１５日（水）

オレは、逃げた。一昔前の摩天楼のような建物、スラッと地面から伸びている。歴史構造物のエンパイア・ステート・ビルディングやクラスタービルディングのようなクラッシック要素を備えた超高層ビルが整然と並んでいた。誰が思うだろう。このビルの一つが学校だとは。

大久保が生ゴミのようなごじゃごじゃした饐えた臭いで、新宿は埃っぽい産業廃棄物の臭いがした。三宮は、ほんのりと清楚で甘い香りだ。走りながら、ぼんやりと思った。

久々にみる太陽がまぶしくて、オレは目を細める。地面は、無愛想なアスファルトではなく、茶色やクリーム色のレンガが敷き詰められている。歩行者用の柵にもレリーフが掘ってあった。６０階を越える高層ビルが乱立しているにもかかわらず、三宮はどこか乙女らしい雰囲気が漂うおしゃれな街だった。ＤＲバリアがあちこちに張り巡らされているためか、ＤＲの姿は少ない。そして、東京のような奇抜な姿のＤＲは皆無だった。街全体がオレには似合わないと非難しているように感じた。

「待ってよ、ヴァン」

清楚な女子校生が追いかけてくる。オレは逃げる。少女は走る。オレも走る。「すまん、帰る！」

「ちょっと、恥ずかしがることないじゃない！　ＤＲと追っかけっこしてる私のほうがッ、よっぽどだよ。待ってって！」

当然待たない。

一瞬、少女の気配が途絶えた。不思議に思って後ろを振り返って足を止めると、オレの進行方向で声がする。

「ヴァン～」

「セイン……？」
　にっこりと笑った黒髪でかわいらしい彼女に、引き攣った笑みを浮かべようとする。どことなく黒いオーラが漂って見えるのは、ギアの故障だろうか？　実体のセインはＤＲよりもちょっぴり怖いみたいだ。

「誰がどう考えたって逃げるだろ。セインが挨拶した途端、チューナーつけた警備員がオレに向かってくるんだぞ。しかも怖い顔で。オレは犯罪者か？　第一聞いてないぞ」
　お嬢様だとは。オレは精一杯怒った顔をしてセインを睨んだ。
　聖ベルナデッタ学院はこの地域では有名な学校らしい。その高い偏差値もさることながら、生徒の中身が。オレは三宮は初めてで、待ち合わせの学園を確認するために３０分ほど早く来た。学校というから、古くさいコンクリートの打ちっ放しに、定番の大きなセンスがない時計を建物につけて、正面には広大なグラウンド、という定番の土地を探した。当然ない。ここは天下の三宮で、オールドファッションな超高層建築物乱立地帯で、グラウンドみたいなダサい土地の使い方はしないのだ。三回目に通りかかってやっとみつけたセインの学校は、６９階建ての、てっぺんを見上げたら首が痛くなりそうなビルだったわけだ。ちょうど下校の時間で、ビルの入り口前にあるターミナルでは、黒光りするいかにもな高級車が列を連ねていた。と思ったら、空には何台ものヘリコプターが舞っていた。
「別に、一般人だよ。親がすこーっしお金持っているだけの」
「……」
　コーヒーが注がれたチャイナボーンのティーカップに、セインが口をつける。ブラックなのが少々意外だ。今は聖ベルナデッタ学園近くのビルの、最上階のカフェでのんびりティータイムだ。オレはＤＲなので、注文はしない。ルネのように、実体のオレンジジュースをこちらにも投影させて、実体で飲んでＤＲで飲む真似をするなんて器用なこともしない。ため息をついてセインを見た。

実体だ。この前の女姿のＤＲとよく似ていた。真っ白い肌にピンク色の唇で、化粧っ気がない分清楚に見える。艶のある髪が肩口でさらさらと揺れた。かわいらしい制服を着ている。昔のセーラー服を現代風に変えたようなデザインで、クリームと緑がベースになっていた。結ばれた赤いリボンがアクセントになっている。スカートは驚いたことに膝丈だった。それが、どことなくお嬢様の雰囲気を醸し出していた。セインだけでなく、あの学校の規程なのかもしれない。

「セイン」神妙な声を出してみた。

「うん？」

「あの学校てさ、どこに校庭とか体育館があるんだ？」

オレの出身校は東京だが、ちゃんと校庭と体育館があった。四階建ての学校の屋上という場所だが。

彼女はティーカップをソーサにおいて、改めてオレを見た。

「やっぱり変わってるかな、校庭、ビルの中にあるとか、体育館も、ビルの中にあるとか、ヘリポートで送迎されている生徒もいるとか」

「十分規程外」

見るからに肩を落とす。

「そっかー、だから私とカインってどこか浮いてたんだね。うん、浮いてるのはあの学校なんだけど……」

大久保で、どこか世間ズレしているセインとカインを見かねてオレが拾った。その時を思い出しているのかもしれない。

「ねぇ、そういえば、あのＤＲさっきからこっち見てなスクリーンに、セインから貰った先輩の情報を画面に表示したい？」

「気のせいだろ」

そういいながら、セインの指さした方へ向いた。雑誌を持って顔をかくしたＤＲがいた。女性のようだったが、ここからだとよく分からない。ものすごく不自然だ。雑誌を持ったＤＲなど、オレは今まで見たことがなかった。わざわざ雑誌をＡＲ化して読むなどと面倒臭いことをするよりも、スクリーンを開いた方が手間もないし便

利だ。しかも、目の前には実体のコーヒーが置かれていた。当然口はつけられてないし、コーヒーカップに触れることさえできないだろう。

「なんだろう？　初心者かな？」

「かもな？」

初めてＤＲになった人間で、たまにＡＲ、ＤＲのことをよく理解しておらず、実体と同じような行動をしてしまう人がいる。例えば、場所を移動しようとして、モノレールの改札口につっこんでみるとか、飲食店に入ってつい注文してしまうだとか。雑誌のＡＲ化も、その延長なんだろうか。

「それでね、ヴァン、これが頼まれてたものだけど……」

セインがカバンから緑色の小さな箱を取り出す。

「へぇ、ｔｕｚ社のＲＸ３００」

「うん。昨日買ったんだ」

小さくてかわいらしい箱にしか見えないそれは、カメラだった。取得した画像は必然的に設定を行ったサーバへ送られる。カバンにぶら下げておけば、アクセサリとしスクリーンに、セインから貰った先輩の情報を画面に表示したても違和感がない。最近人気が出てきた商品だった。

「じゃあ、サーバのアドレスを登録しよう」

オレの指示に合わせて、セインがカメラを操作する。オレは自分のサーバに接続し、カメラ用の通信ポートとＭＡＣアドレスを設定する。スクリーンを出して、接続確認をした。カメラを覗き込むセインの顔がうつった。

「ＯＫだよ。じゃあ、目立たない場所につけて」

「うん……」

セインがカバンにカメラを取り付けるのを眺めていた。どことなく手つきがぎこちない。

「あのさ、ヴァン」

「何」

「なんだか、探偵みたいだね」
頬をわずかに上気させたセインが、上目遣いでオレを見た。

そう、オレたちは今日、例のセンパイの家へ突撃するのだ。

２０８８年９月１５日が始まったばかりの新宿、セインはうつむいていた。さらさらとした黒髪が流れる。少女姿だ。オレも前回とあわせ、アバターは青年にした。タチバナとの話の後、「会えるようなら会いたい」とセインを呼び出した。
「すまないな、急に呼び出して」
彼女は左右に首を振る。心なしか、顔色が悪かった。視線を上げようとしない。何か、おぞましいものから目を逸らすように……。
相変わらずの触手クラブの一室だった。今日は深緑色の、茶色い疣がついた肉塊がうごめいていた。扉を開いたら、セインが悲鳴をあげて逃げた。オレは醜い触手を消して、セインを呼びにいったのだが、入り口の角で丸くなっていて、なかなかついてきてくれなかった。前回よりも精神的ダメージが大きいらしい。赤黒い触手よりも、緑の疣のほうが苦手なのか。今も精神が回復していないようだ。

「もうわかっていると思うけど、ドラッグプログラムに関することだ」
セインの肩が揺れた。
「少し調べたんだけど、ドラッグプログラムはいまのところ合法だよ。だから、安心していい」
サイバー課が動いているというのが気にかかったが、伝えない。
「そうなんだ」
ほっとしたのか、セインの肩の力が抜けた。
「ただ、副作用のほうなんだけど、正直にいうとよく分からない。セインがいったように、ドラッグプログラムの所為で死人が出てい

るのは確かだと思う。金曜日の男覚えているか」
「うん」
オレはセインの反応を窺った。「死んだらしい」顔をあげた。これまでに調べたことを簡単に纏めた。ネットでは噂になっているものの、ドラッグプログラムの販売経路や実体が不明なこと、ドラッグプログラムの中毒者らしき人が何人か死んでいること。金曜日に暴れたらしき人物の変死体が発見されたこと。
「たださ、麻薬ってのは何回か使ううちに身体がボロボロになる。一回のみの使用で死者が出るなら、セインもとっくに死んでいるだろうし、ネットでもこれだけの書き込みはないだろうとみている」
「うん」
「だから、セインは犯罪に手を染めたわけでもないし、ドラッグプログラムで死ぬこともないだろうってことだ」
あれから、ルネとタチバナからの情報と、手持ちのデータを見比べながら、3時間かけて導き出した結論だった。
「……」
彼女は神妙な表情で床を睨んだ。助けてと叫んだ彼女を、これで救ったことになるだろうか？　さて、タチバナにはどう話をつけようか。「解決した、ありがとう。ソース？　トンカツソースなら持っていってやるよ」とでも。オレは立ち上がって伸びをする。話は終わったという合図だ。
「あのね、ヴァン……」
「なんだ？」
彼女はオレを見上げた。
「こんな短期間に調べてくれてありがとう。安心できたよ」だが笑みはなかった。真剣な表情だ。「でもね、私真相が知りたくなった。何で先輩があんなものを持ってたのか。何で私にくれたのか。死んで、悔しい」
セインが顔を歪める。
「転入生だった私に優しくしてくれたのが先輩だったの。それから

ずっとお世話になってたんだ。それなのに。なんだか、自分だけ安全でしたっていうのは、ずるい。私、調べたいんだ」

「あのな」

「これ以上は迷惑なのわかるから、私が調べるよ。でも、どうすればいいのかよくわからないの。よ、よければ手伝ってほしい」

オレは自分の額に手を当て、わざとらしくため息をついた。オレがここの時点でドラッグプログラムにけりをつけたかったのには、それなりに理由があった。一つは、セインにある程度の安全が望めるだろいうということ。もう一点は……。

スクリーンに、セインから貰った先輩の情報を画面に表示した。

「分かってるのか？　これ以上は、セインの実体と関わる必要がでてくるんだ」

タチバナとも確認済みだった。ドラッグプログラムを追うには、セインの実体の近辺から洗っていくのが確実だ。必然的に、セインの実体がオレにバレる。ＤＲはハンドルネームで呼びあう。大昔のネット時代から続く風習だ。ＤＲはネットと同じく、匿名同士の付き合いだ。ほとんどのＤＲは自分の実体を他のＤＲに関わらせることはないし、自分の実体を詮索されるのを嫌うＤＲも多い。いくら信頼をされていたからといって、実体を晒すのは好ましいことではなかった。実体が女性の場合は、さらに実体とＤＲの切り分けについて気をつかう必要がある。数年前、実体が女性だとわかった途端、築き上げたＤＲ同士の友情が破綻し、友人だったＤＲがストーカー化して、実体の女性が自殺する事件があった。

彼女は話したことがないが、オレはセインの実体が女性であることを半ば確信していた。いくら男の格好をしていようが、仕草の一つ一つに女っぽさを感じるのだ。

「ここから先は、まずセインの先輩とやらを調べないといけないのはわかるだろう？　先輩の氏名、通っていた学校、交友関係……。セインの実体の学校名も当然オレに知られるだろうし、実体と接触することもあるかもしれない」

おすすめできない。そう締めくくった。
「別に私は構わないよ」
「おい」
オレはネットの常識とＤＲとしての意識、行動を語った。前から思っていたが、セインはどこかずれている。
「でもね、私、ヴァンのことは信用しているし」「そういう問題なのか」「だよ」
頭が痛くなってきた。
「大昔にはネットで知り合った人同士が集まって騒いでたってルネがいってたよ」
「廃れた文化だろう」
オフ会というらしい。ＤＲが広まってからは、そういうこともなくなった。
「とにかく、私は自分の実体がヴァンに知られてもかまわないよ。でも、ヴァンが迷惑なら」
両膝におかれたセインの手がぎゅっと握りしめられた。
「私だけでやるし」
「……」
乗りかかった船というやつだろうか。最初にルネから「ドラッグプログラム」という言葉をきいたときも、聞き流すつもりだった。セインが助けてと叫んだときも、必要以上に関わる気にならなかった。これも縁なのだろうか？
「わかったよ」
諦め混じりに吐き出す。やっと、セインが微笑った。

現在時刻、１６：５３。カフェにはオレ一人が座っている。スクリーンの左には、セインのカメラから送られてくる映像が流れていた。セイン曰く、三宮駅の北方面に例の先輩が住んでいたマンションがあるそうで、弔慰するのだそうだ。例の先輩は一人暮らしだっ

たが、急の訪問にも遺族が快く応じ、特別にマンションへ入る許可をもらった。セインと先輩との仲の良さが窺われた。ただし、高級なマンションに一人暮らしとは気にくわない。

オレはここでお留守番だ。住宅等のプライベート空間には、ＤＲバリアを張るのが普通になっている。もしオレが実体であったとしても、生前関わりのなかったオレが訪問し、死者を弔うのは変だし、セインとの関係を説明するのも労力だ。オレがついていけなくても、オレの目代わりになるように、と用意させたのが例のカメラだった。

セインはまだ移動中のようで、カメラにうつるのは、地面にしきつめられたお洒落なレンガだ。オレは自分のサーバにアクセスする。セインの実体に寄り添うボーイッシュな少女の写真がスクリーンに表示された。背が高く、美少年という言葉が似合う。聖ベルナデッタ学院高等部３年生、秋山このみだ。スポーツメーカＭＩＭＥの幹部秋山泰造の一人娘。陸上部、成績優秀で友人も多かった。典型的なお姉様と慕われるタイプに見えた。セインから貰った情報は、客観的な情報で丁寧にまとめられていた。校内新聞メーリングリストでランキング上位に入っていたこと、陸上部で応援にきた下級生の数、一日に貰うラブレターの平均等。少々マニアックすぎる情報まであった。

別のスクリーンを表示させ、サーバからドラックプログラムの被害者と思われる情報を引き出す。セインと今後の方針を決めた後、電子の海を彷徨って発掘した文書だ。ルネの言の通り、警察の機密文書は、ネットの至る所に落ちていた。夜は文書の発掘で時間がかかり、中身は吟味できていない。「秋山このみ」を探したが、オレが取得したデータにはなかった。秋山このみが死亡したのは２０８８年９月１２日（土）だ。文書が流出した時点で報告書が作成されていなかったか、あるいは、「変死」扱いではないのか。

後でセインに詳しい死亡状況を訊くか。

オレはルネが示した一番初めの被害者らしきファイルを開く。中

野佑介、１８歳。９月２日死亡。大阪、か。
カメラからの映像を見ると、セインがマンションの玄関に到着したようだった。
そろそろ本番だ。オレはファイルを閉じようとした。
「！」
飛び上がる。急に、肩に手を置かれたのだ。
「なっ」
振り返る。そこには、あの初心者らしきＤＲが鬼のような形相で、オレを睨んでいた。
「あの？」
咄嗟にスクリーンを消す。「なんですか？」
「お前ッ！　不正アクセス禁止法違反で逮捕するッ！」
「はぁ……？」
困惑しつつ、オレはじろじろとそのＤＲを見た。外見は東洋人なのに金髪に茶色の肌色でセーラー服を着ている少女だ。古典の漫画に出てきそうな格好だ。口紅は白色だった。
「お前今警視庁の機密ファイルを見ていただろう。エマノン、現行犯だ。言い逃れはできないぞ」
「あのさぁ」
閉じたスクリーンを再び表示する。昨日見つけた機密文書を保管しているサーバに接続する。
「ここで普通に見えるんだけど？」
「……」
そのＤＲは、勝手にオレの正面に座り、足を組んだ。スクリーンとサーバの情報を見比べ、唸る。自分のスクリーンをたちあげ、何やら入力しはじめた。どことなく武骨な仕草だ。成りきっていない。実体は男だ。
「エマノンめ」
外観に似合わず忌々しげに吐き捨てる。エマノン、としばし記憶を探ってみたら、世間を賑わす大ハッカー様だった。

「誰？」
はっとしたように、彼？　彼女？はオレを見た。
「あ、ああ」
カメラの映像が気になったが、画面を消した。
「す……、ごめんね～。ちょっと見間違いってかんじ？」
「……。別にいいけど」
挙動不審に照れた仕草をする。だけど、ガニ股だよ。
オレはイライラと指で机を叩く。彼？　彼女？　は立ち去る気配がなかった。
「な……、ねぇ。さっきの子、聖ベルナデッタ学院の生徒だろ？じゃなかった。だよね」
「それが？」
「最近死んだ生徒のこと知らないか、秋山このみっていう」
生徒手帳にありそうな彼女の写真を見せた。先ほどみたものより若干幼い。オレは目を細めた。ルネの情報源は確かだ。この間抜けで演技の下手くそな人物はサイバー課に違いなかった。
「知らないね。彼女がどうしたんだ？」
しらばっくれた。
「……」
彼？　彼女？　は目を細め、スクリーンを見た。
「ね、ねぇ。なんでこの情報を見てたんだ？」
変死体と秋山このみとのつながり、すなわちドラッグプログラム。冷汗がじんわりと感じられた。ＤＲはかかないはずなのに。
「おもしろい変死体だから気になったんだよ」
問い詰めようと口を開くサイバー課を、オレは押し止めた。
「もう行くよ」
間髪入れずギアをひねる。セッション終了。時代遅れの少女のぽかんとした顔にノイズが走って消えた。

少年姿のＤＲに変わって三宮に降り立つ。
三宮駅の前を闊歩しながら、通信に耳を傾けた。小さくスクリーンにカメラの映像を呼び出す。どうやら秋山このみのマンションには彼女の母親が来ているようだった。セインの慰問に感謝の言葉を投げていた。
「いえ、先輩にはお世話になりましたから」
涙声だ。
「わがままをきいていただいてありがとうございます。少しでも、先輩のこと忘れたくなくて。いえ、何も気づかなかったのも私ですから、悔しくて……」
穏やかにセインが切り出した。カメラが動き出す。揺れて、秋山このみの母親が一瞬うつった。若くて綺麗な女性だったが、真っ黒なワンピースで、化粧が涙で崩れていた。セインが動き出すとともに、カメラの視点も変わる。ドアが閉められ、スクリーンに部屋全体の映像が表示された。
「ヴァン、先輩の部屋」
「ああ」
ボーイッシュな少女だったが、部屋は意外にも女の子らしさで溢れていた。八畳ほどだろうか。明るいオレンジとピンクが混じり合ったカーテン、ベッドには大きなくまのぬいぐるみに、小さいうさぎのぬいぐるみが2個転がっている。ふわふわのカーペットの上には、ピンク色の小さなローテーブルがあった。窓に面して置かれている白い机には、ペンダント型のチューナーが置いてあった。
「セイン、ギアを見せてくれないか？」
この姿だと、下手に三宮を彷徨けばカインに見つかる。オレは東遊園地公園へ向かった。
「えっと……」
画面がアクセサリを映し出した。黒を基調としながらもワインレッドのラインがほどよいアクセントになっている。「ｔｕｚ社のＧ

Ｎ４０７。少し前に流行ったやつだ」セインがギアを手にとった。オレにも聞き覚えがあった。デザイナーズギアという触れ込みで、元来の機能面を重視した武骨なデザインではなく、多少性能を落としてよりスタイリッシュに仕上げたギアだ。半年前に発売され、女子高生を中心に、今までＤＲに関心のなかった若者たちを引き込んだアイテムだった。細く軽く、リストバンドというよりは少し太いブレスレットに見える。

「セイン、起動させてみてくれ」

「うん」

ギアのワインレッドのラインがピンク色に光った。「秋山このみのサーバにアクセスできるか？」セインの正面にスクリーンが表示された。文字が流れる。「大丈夫、先輩は機械オンチだったから、ログインは省略してると思ったんだ」

オレのサーバに膨大なデータが流れ込んできた。秋山このみのサーバに保存されていた全データの送信が始まったのだ。打ち合わせ通りだった。

残念ながら、オレもセインもインターネットには素人並だ。ハッキングやクラッキングという言葉を知っていても、具体的な手段は全く知らなかった。だから、秋山このみのギアからサーバに乗り込んでデータをいただく。真っ当な方法だから、特別なスキルなどは必要ない。入手するべきは、秋山このみのアクセス履歴であり、サーバ内に保存されているかもしれないドラッププログラムに関するデータだった。

「あとは……」

セインが白い机の引出しに手をかけた。

「どうした？」

「開かない。鍵がかかってる。机の上にも鍵らしいものはないし、チップもない」

「他の場所は？」

「ちょっとまって」

カメラの視点が回転した。画面の隅でドアが開き、ブランドのスリッパが写り込んだ。秋山このみの母親が入ってきたのだろう。

「ええ」「はい」セインの相槌がきこえる。

オレは一旦スクリーンを切った。ため息をついてまわりを見る。いつの間にか小さな公園にきていて、潮の香りがした。環状に公園を囲むように木々の植えられた道が何階層にも伸びていた。まわりの高層ビルとつながっているようで、サラリーマンの姿がちらほら見える。位置情報を呼び出すと、東遊園地公園、と出ていた。奥まった場所にひっそりと設置されていたベンチに腰かけた。セインと秋山このみの母との会話はまだ続いている。

夕暮れ時だ。東京のようなどこか埃っぽいものではなく、空は、鮮やかな赤色に染まっていた。

「？」

目の端にうつったものを確かめようとして、顔を向けたが見失ってしまった。

セインと同じ制服姿を見た気がしたのだが、気のせいだったのだろう。ここはセインの学校から近いので、いたとしても不思議ではないが。

オレは頭を振った。サイバー課が動いているという事実が気持ち悪かった。あの骨董品のような格好をした少女を思い浮かべる。秋山このみの捜査をしていたということは、秋山このみは何らかのサイバー犯罪に関わっていたと見ていいだろう。オレの見ていた変死体資料にもすぐに反応したことから、ドラッグプログラム関連か。警察はどこまで把握しているのだろうか。

セインにも、サイバー課のことは伝えるべきか？

彼女がこちらに手を振りながら走ってくる姿が見えた。オレは軽く手を挙げる。

彼岸花が風に揺れた。

２０８８年９月１６日（木）　その１

新宿に立った。埃っぽい空気が不思議と肌に馴染む。きっかり深夜０時、セインはもう来ているだろうか。秋山このみのギアからデータを入手した後、セインは塾ということで一旦お開きになった。１２時頃少しだけ会おうということになった。行き先は当然触手クラブの予定だが、さすがに三度目だとセインが激しく抵抗しそうだ。オレは無視することにする。

さて、と、喧騒の中へ足を繰り出した瞬間、手首を捕まれた。

「見つけた」

華奢な指だ。長い爪にはゴテゴテの飾りがしてある。振り向いて、オレは顔を顰めた。

「お前」サイバー課。

今日、いや、昨日みた奇抜な姿の少女がオレの手をしっかりと掴んでいる。

「なんだお前、ストーカーかよ」

「なっ」顔を赤めたのかもしれないが、何分褐色の肌だからよくわからない。

「違う！　お、俺はっ、たただの……」

手で制した。オレは一呼吸置く。

「何の用？　どうやってオレを探したわけ？」

「あ、ああ。そのギア、ｔｕｚ社のＤＲモデルだろ。そのサイズだし、独特のデザインだがら目立つ」確かに、ゴツいが……。

「しかも一番初期のもの。未だに使っているヤツなんてかなり少ないからな。ちょっと調べただけですぐに分かった。お前、有名人なんだな。『ルネのお守りヴァン』」

「……」

今、とても不名誉な二つ名を聞いた気がする。確かにセインもこのギアでオレを判別していたし、ＤＲを使い分けても意味がないこ

とは、たった今証明された。それはそれで考えものだが。なんだ、その『ルネのお守り』とは。

「ちょっと話がしたいんだ。付き合って欲しい。『ルネのお守りヴァン』」

「……」

脳裏にハニーフェイスの幼女が思い浮かんだ。愛らしい微笑みなのに、どこかしら黒さがにじみでている姿だ。確かめる必要がある。どこの誰がそんな二つ名をつけたのか。

「いいよ」

サイバー課の目に安堵が浮かんだのを見取って、オレは当初とは逆の方向へ歩き出した。サイバー課は奇抜な格好だ。これ以上変な噂を立てられても困る。

「で？」

さすがに触手クラブではなかった。大手チェーンのカラオケ屋の一室、鈴木エーナの歌が背後で流れている。ここは実体もＤＲも利用可能とあって、人気が出ていた。曲名を端末に送れば、音楽とともにイメージにあったＡＲが出る。歌う人を自動的に認識し、音声を増幅させる機能があった。カラオケは3年ぶりだが、あれからさらに進化しているのだろうか。

セインには遅れる旨の連絡をしたら、明日に変更ということになった。すまない。

「何の用なんだよ、サイバー課」

彼？　彼女？　の顔が強張った。

「なぜそれを……」バレバレだろうが。

「男、ガサツ、ＤＲの素人、ここまでは誰が見てもわかる」

「……。確かに、ＤＲ化したのは、一昨日が始めてだったが。ガサツ、なのか……」

「ガサツだろ。その姿にガニ股はどう見ても違和感がありすぎだろ」

「むむ」

「普通はそんなド素人がサイバー課であるはずがないと誰でも思う。だが、流出したファイルを見て『逮捕する』だ。疑念も木っ端微塵に吹き飛ぶ。発言だけでサイバー課だ」

違うか？　とサイバー課を睨みつけると、完全に沈黙した。バレバレすぎて哀れに思えてくる。

「俺……、覆面捜査官なのに」

「ぶ」

吹き出してしまった。まじまじとサイバー課を見ると、顔を伏せて肩を落としている。不謹慎だと思いながらも、声が震えて、腹筋が震えて、肩が震えた。

「っくくく……ふっ」

せめて、口から笑い声が漏れないように、苦心する。ああ、腹が痛い。明日は筋肉痛だ。

「ははは、くッハハ」

我慢できない。ポップな曲に合せて肩が震えた。覆面捜査官はいくらなんでもない。恰好がひどい。素人っぷりがひどい。よっぽど親切な人ならば相手にするかもしれないが、普通の人はまず避けるに違いない。

すぅっと息が吸い込まれる音が微かに聞こえたような気がした。

「笑うな！！」

大音量が耳を突き抜けて、オレの笑いは止まった。

ＢＧＭには鈴木エーナの、「トワイライト」。変調のどこか寂寥感の漂うメロディに鈴木エーナの澄んだ声が乗る。６月にリリースされて、未だにトップを譲らないヒット作だった。

「俺は、本当に苦手なんだ。コンピュータなんてさっぱり分からないし、ギアの使い方もよく把握していない」

ぽつぽつとサイバー課が勝手に語り始めた。要旨はこうだ。

当初彼は捜査三課の下っ端だった。あまりに使えないので交番課に行くことになった。たまたま同期で名前も同じ優秀な人物も出世

という形でサイバー課に異動になるはずだった。が、職員番号の登録ミスで、見事入れ替わってしまった。公的な処置なので、今のところどうにもできない。

あまり同情できないよな、と思いつつオレは耳を傾けた。出世のはずだったのに交通課に飛ばされてしまった同姓同名の警察官のほうが悲惨だ。南無三。

サイバー課は一部に犯罪者崩れのハッカーやクラッカー、それからコンピュータ犯罪に強い職員で構成されている。目の前の間抜けな人物には不相当に思われた。

「まぁ……」

オレは小さい肩にぽんと手のひらを乗せる。

「諦めろ？」

彼女の潤んだ瞳がオレを直撃した。ガシッと逆にオレの両肩を掴まれる。驚異的な握力で、尖った爪が肩に食い込んだ。

「イッ」「頼む！！！」

痛い、ものすごく痛い。ＤＲにも痛覚がある。痛い。

「俺を一人前の調査官にしてくれえええええええええ！」

「イテェっつってんだろ」

これはセクハラか？　否。実体は男だ、問題ない。オレはサイバー課の股間を蹴り上げた。サイバー課の動きは早くて、オレの脚を両手で抑えた。オレは瞬時に距離をとった。肩がジンジンと痛みを持っていた。この男は……。

「一人前に、なりたいんだよ」

男はしょんぼりとつぶやく。

オレはため息をついた。

「サイバー課、条件次第だ」

ぱぁっとした顔で、サイバー課がオレを見た。

「そっちではドラッグプログラムについて調べているんだろ？　その情報がオレはほしい」

「なぜそれを」

「その情報が出せるなら、一人前のＤＲにしてやるよ」
ごくり、と彼女の喉が鳴った。

「よく見て？　私の言ってることちゃんと理解してるの？　こうよ。脚ががに股になってたら駄目。寄せて」
タチバナは容赦なくハルカを蹴り上げた。
「いい？　大切なのはいかになりきるか、ということよ。そのものになるの、心も」
「は、はい」
「もう一度やるよ」
大きな鏡の前で、サイバー課は強く頷いた。タチバナは「こう」とお手本を見せる。オレは、傍観していた。

サイバー課は姿をすっかりと改めた。どうしてそんなアバターを使っていたのかと聞けば、サイバー課のハッカーが作ってくれたらしい。同時にサイバー課の彼に対する評価もよくわかった。バカにされている。彼はハンドルネームという概念もなく、オレは一瞬天を仰いだ。「ハンドルネーム？」キョトンとした顔で聞くので、思わず「源氏名だ」と答えてしまった。サイバー課の名前はハルヒコらしいので、安直にハルカと名づける。姿も、一般人と変わらないようにオレが作り替えた。
胸まで伸びたサラサラの黒髪で、姫カットにする。白い肌、ピンク色の爪で顔の造作はいじらない。かわいいというよりは綺麗な少女が出来た。服も白いワンピースにチェックのジャケット、黒のブーツを用意する。正直に言って、アバターにしたらかなり素晴らしい出来だ。姿恰好を作るのはかなり難しく、技量がないとオレみたいな平々凡々の姿になる。ハルカは、元々ハッカーが作った造作が良すぎる出来で、オレのコーディネートも素敵だ。街に出ると確実に声をかけられるだろうなと思う。

中身がいなければ。
スゲースゲーとガニ股で鏡を見る姿に、オレは軽く眩暈がした。
気を取り直して、タチバナに電話する。
「どうした？」
タチバナはすぐに出た。
「頼みたいことがある。一人、演技指導をしてほしいんだが……」
「へぇ、報酬は？」
「ドラッグプログラムに関する情報」
「俺には利点がないな」
「サイバー課とのコネクション」
「どこに行けばいい？」
そして、タチバナは妙齢の女性の姿で、カラオケ屋に降り立った。
タチバナはプロだ。店は内容上、高い演技力が求められる。外見は子供でも、中身は大人であることを悟らせてはいけない。『アリスの国』は子供たち好きへの楽園なのだ。例えアノ最中でさえ、子供であることを貫き通す。そういったプロフェッショナルな子供にするために、従業員へ演技を教えるのもまたタチバナの仕事だった。

「ねぇ、ハルカちゃん。あなたはとっても綺麗よ。この大きなお目々も、小さな唇も」
タチバナはハルカの唇に人差し指で触れる。何をやっているのか。
ＢＧＭはいつの間にかバラードになっていた。
「さらさらの黒髪、淡雪のような肌。私、そういうの好きよ。今にも押し倒しちゃいたいぐらい」
ハルカは呆然とタチバナを見ていた。実体も奥手そうだ。
「でもね、それだけでは駄目なのよ。もう一度言うわね。人はどこでその人物を見ると思う？　外見だけかしら。それだけだったらハルカちゃんはもう完成よ。だけど、誰から見ても、ハルカちゃんは女の子だとは思われないわ。ガサツで無愛想な男にしか見えない」
タチバナはハルカの太股に手を這わせた。

「こことか」
もう片方の手で、ハルカの華奢な手のひらを持つ。唇で指先を舐めた。
「ここもね」
「ッ」
ハルカは頬を紅色に染めて、目をぎゅっと閉じた。
「全部出来てないんだって何度言ったらわかるんだよ！」
あ、タチバナが切れた。
「よく見ろ！　これがお前だ」
タチバナは妖艶な脚をガニ股にして、ゴリラみたいな肩を作る。ハルカとそっくりだ。
「これがどうやったら女に見えるんだ？　あ？　誰がそんなやつと親しくなりたいと思うんだ？　言ってみろよ」
かれこれ6時間もやっていたら、切れたくもなるだろう。空はもうすっかり明るくなっているはずだ。ガニマタの修正と武骨な手の仕草改善だけでこれだ。まだ歩き方、食べ方、言葉遣い……ｅｔｃが残っている。二人の演技稽古が熱心すぎて、とてもドラッグプログラムについて聞けそうになかった。
「寝るか」
オレは今更ながら、今のハルヒコで違和感のないアバターを用意した方がよかったんじゃないか、と思う。が、言わないことにする。そっとギアを捻ってオレは立ち去った。

2088年9月16日（木）　その2

あまり認めたくないことがある。だからあっさり目を逸らしてしまえばいい。ほら、世界は平和は途端に平和になる。

「ヴァン～。逃亡阻止！」

脚に絡みつく小さな腕。オレは空を仰いだ。嗚呼、今日もネオンが綺麗だ。

「ディスっても駄目。ヴァンがヴァンなの、ルネはちゃんと知ってるよ。今更隠しても無駄だと思うけどな」

「え、ええと……、お嬢ちゃん、人違いじゃないかな」

オレは戸惑いながら、金髪をふわふわと靡かせた幼女に向かって答えた。若干口元が引きつっている気がする。今のオレは普段の少年姿ではなく、立派な青年だ。このアバターでルネと接触したことはなかった。

「ヴァン、この旧型のギアってかなり目立つよ。今のギアと違ってゴツいから一目瞭然。さらに、小型ギア一号機だったりするから、マニアにとっては涎が出ちゃうぐらいにレアなんだよ。未だに可動してるのって、もうヴァンのものぐらいしかないんじゃないかな。そんでもって、旧型を一目見ようって人、結構多かったりするんだよね。ルネの言いたいこと、わかるかな?」

「あの」

「ルネ傷ついたなぁ。ルネに隠れてこそこそセインとデートしてるの。ルネから情報聞くだけ聞いて後はしらんぷりって、ひどいよね。これでバレてないって思ってるんだったら、頭のお花畑、満開過ぎて花粉で涙が出てきちゃう」

薄々と嫌な予感がしていた。セインにもサイバー課にも、ギアのおかげであっさりとオレが見破られた。アバターを変えることがいかに無意味かということは、昨日、いや、今日の深夜証明された。オレがどこで何をしようが、一部のマニアには筒抜けだってことだ。

『ルネのお守りヴァン』だしな……。そして、目ざといルネが、ルネを避けて行動するオレに気づかないはずがなかった。

ここは一つ。

「ごめんなさい！」

４５度の完璧なお辞儀で、ルネのきらきらと輝く目とあった。ルネはにっこりと笑って、両腕をオレに差し出した。

「だっこ」

結局、お馴染みの大久保だ。ダークブラウンとワインレッドに統一されてたルネの部屋で、オレはがっくりとソファに沈んでいた。向かいでは、ルネとセインがはしゃいでいる。女の子のセインをルネはすっかり気に入ってしまったらしく、ペタペタとセインを触ったり着せ替えを楽しんだりしている。オレは、力尽きた……。

新宿でルネを抱っこしているオレに、セインは驚いたらしいが、「ヴァンがいるなら大丈夫」と謎の言葉を吐き出した。ルネの底知れない怖さは、すべてオレに向かうらしい。こうなることも予想していたようで、うまく踊らされていたことにやっとオレは気がついた。女は、計算高い。清純系に見えてこれだ。オレは頭の中の要注意人物リストにセインの名前も追加しておいた。

「それで、ヴァンとセインはどこまで調べたのかな」

セインとの着せ替えごっこにも飽きたようだった。とてとてとルネが側に寄ってきた。セインといえば、いわゆるゴシックロリータという恰好で、恥ずかしそうにもじもじとしている。黒と赤のレースにボーダーのソックスで、一部には受けそうだった。

オレは簡単にこれまでの出来事を話した。セインの先輩が死んだこと、セインがドラッグプログラムを一回だけ使用したこと、セインの先輩のデータをいただいてきたこと。

「ヴァンがんばったんだね」

いいこいいこ、とオレの頭を撫でようとするのを、さりげなくかわした。ルネはさして気にするわけでもなく、オレに手を差し出し

た。
「じゃあ」
そのデータ、さっさと出しちゃってよ、とルネは軽やかに言った。
セインが軽く頷いたので、オレはサーバにアクセスする。呼び出したデータをスクリーンに投影して、ルネに主導権を渡した。
ルネは上唇をチロリと舐めた。つぶらなピンクの瞳に、猛禽の鋭さが宿る。
「秋山このみ、聞いてあげる。何を残したのか」
ルネの指が恐ろしいスピードで動き出した。瞬きすらせずに流れる情報を目で追う。
「うわぁ」
セインが感嘆の声をあげた。普段ぼけーっと戯れているだけのオレたちなので、ルネが本格的にコンピュータをいじる姿を目にするのははじめてだった。五多重にスクリーンを開いて同時に操作する。圧巻の一言につきた。スクリーンは次々に表示を変えて、オレはさっぱりついていけない。ルネ、さすが、ＩＴ系だ。
と、唐突にルネが指を止めた。オレとセインを見て、にやりと唇を歪める。
「セイン、ヴァン、残念なお知らせがありまーす」
ルネは勢いよく右手をあげた。まるで「先生、質問です」というかのようだ。
「なんと、お二人が苦労して手に入れたデータに、ドラッグプログラム関連の情報はありませんでした」
「はぁ？」
「メールも、サイトの履歴も、消去跡のデータも、他様々なものを見たけど、全然入ってないよ。全然カスタマイズされていないライトユーザのサーバだったから、ルネ、本当にこの人ドラッグプログラムに関わってたのかなぁって不思議に思っちゃう。アングラなものも全然ないし」
ルネは柔らかそうな唇に指をあてて小首を傾げた。

「でも、先輩は確かに……」
セインは秋山このみが狂った姿を見ている。幼女はかわいげにうんうん、と首を振って、邪悪な笑みを浮かべた。
「じゃーん」
眼前に巨大化されたスクリーンが浮かんだ。「きゃぁ」といってセインは両手で顔を覆う。ルネはにたにたとそんなセインの様子を満足げに見た。
「だから、交友関係から責めてみるよ」

『聖ちゃん&自分&甲斐ちゃん（ハート）』
少女三人が写っていた。真ん中のボーイッシュな少女が両脇の少女たちの首に手を回している。右はセミロングのどこか清潔さを感じさせる少女で、ぎこちない笑みを浮かべていた。先日見たときよりもどこか幼い。左の少女は細い眼鏡を掛けていて、鋭利そうな視線を向けていた。三つ編みおさげで、あんな目つきをしていなければ、思わず委員長に推薦しているだろう。
「秋山このみのアルバムだよ。これ、文化祭の時の写真フォルダみたい」
頬を赤らめるセインに、楽しそうなルネ。幼女の姿をしたおっさん（？）は、すっかり分かっているみたいだった。オレは死者を暴いているようでなんだか落ち着かない。セインも、「いいのかな」と小さくつぶやいている。ルネはそんなオレたちに頓着なしだ。
「聖だからセインかぁ。なるほど。実物はこのアバターよりもかわいいね」
ぎゅーっとセインにハグをしてルネが言った。ターゲットはオレからセインに変更されたらしい。オレは安心してスクリーンを見つめた。
甲斐というのがおそらくカインなのだろう。金髪眼鏡のクールそうな姿が浮かぶ。纏う雰囲気がそのままだった。そして秋山このみだ。彼女は二人を抱きかかえてにっこりと笑っていた。八重歯がの

ぞいていて、どこか愛嬌がある。スカートを履いていなければ、美少年がハーレムを楽しんでいるようにしか見えない憎たらしい構造だ。写真の端に幾人もの女生徒が三人に視線を飛ばしていることからも、大体当時の様子が想像できた。

「素晴らしき青春の一頁だね。次いくよ。『自分&甲斐ちゃん（ハート）』」

どうやらスライドショーが始まったらしい。セインは自分が写ってないことをいいことに、途端にのめり込みはじめた。

写真は家族のものと学校のものとで大半を占められていた。一枚一枚ルネもオレもセインも見入る。時折セインは写真を見て、涙を零した。見ていて気づいたのが、学校生活での写真は必ずといっていいほどカインが写っていた。同級生らしきものとのショットもあるが、カインと比べると驚くほど少ない。秋山このみが高校2年生になったころから、セインも入るようになった。オレの記憶では、秋山このみはセインとカインの一個上だ。そしてセインとカインは同級生だった。さすがにこの頻度では、不自然に思う。

「なぁ、セインとカイン、秋山このみってどういう関係だったんだ？」

「ルネも聞きたいな」

幼女はスライドを操作する手をとめて、小首を傾げた。動作が一々核心的だ。中身を知らなければこ憎たらしいほどかわいらしい。

スクリーンには、もうすぐ行われるのだろう体育会の練習風景が表示されていた。二人三脚をしているセインとカイン、シャッターを切ったのはおそらく秋山このみだ。『甲斐と聖二人三脚風景』

「うん、少しだけ待って」

セインは涙を拭って、三回深呼吸をした。思いを馳せるように、そっと目を伏せる。

「もうバレちゃってるけど、カインこと甲斐綾乃は業界最大手のスポーツジム、カイスポーツの社長の娘なんだ。秋山先輩はスポーツ用品の社長のご令嬢で、昔から仲が良かったんだって。聖ベナルデ

ッタ学院は幼稚園から大学までのエスカレータ式で、幼年期からの知り合いなんじゃないかな。同じ弓道部で、いつも行動を共にしていたの」

カインが秋山このみと親しいのは予想外だった。

「私、二宮聖が高校1年の夏に転校してきて、同じクラスの綾乃ちゃんと仲よくなって、それで自然と先輩とも親しくなったの」

「そうか」

「先輩があたしのことどう思っていたのかは、よくわからないけど……、でも色々と親切にしてくれたよ。女生徒たちから呼び出されたときに、一緒に行ってくれたり、食堂で躓いて昼食を落としてしまったとき、綾乃ちゃんと先輩がわけてくれたり……。ドラッグプログラムも、親切心からくれたと思う」

また涙があふれてきたようで、セインは両手を顔にあてた。ゴシックロリータの涙すがたもそそるな、と不謹慎な感想が頭を掠める。オレは健全な男だ。

「秋山このみは、カインとセインの他に仲いい人いなかったのかな？」

「私が知ってる限りでは……。先輩が言ってたの。みんな自分が話しかけてもよそよそしくて、まともに会話が成立しないって」

「……」

ルネと目が合って、お互い考えていることがわかった。天然麗人もセインも、とてもとても鈍いらしい。

「まぁいいや。ルネ、もう一つだけ、不思議に思ってるんだけど、ルネたち、秋山このみに会ったことないよね」

セインは頷いた。

「先輩、ものすごい機械オンチだったの」

ルネが大いに同意する。秋山このみのデータから素人さが滲み出てたまらないみたいだ。

「私と綾乃ちゃんがDRデビューしたのが、昨年の2月ぐらいで」

「ルネたちと出会ったころだね」

「うん。鈴木エーナのファンになって、私たちもやってみようってことになったの。すぐにヴァンに拾われて……」

２０８６年から２０８７年にかけて、ギアの急激な値下がりとＤＲのアイドル歌手鈴木エーナブームでＤＲ人口が急激に増えた。ギアの操作が簡単になり、コンピュータに詳しくない人でも簡単にＤＲ化できるようになったことも要因の一つだ。今まではよっぽどのコンピュータ道楽かその道の専門でないと敷居が高かった世界が、一般人に開かれ、さらに鈴木エーナの知名度も手伝ったことで、一気にＤＲが広まっていった。

「なるほどね」

「先輩はずっとＤＲに興味があったらしいけど、夏におしゃれなギアを見つけて、やってみることを決心したって言ってた」

ｔｕｚ社のＧＮ４０７が頭に浮かんだ。アクセサリー要素が強くて、女性に人気のギアだ。

「それで何度か私と綾乃ちゃんで、先輩を教えたり、色々な観光地に遊びに行ったりしたの。だけど、そうだね。ここには来たことがなかったね。綾乃ちゃんも全然行こうなんて言わなかったし」

それはオレかルネが信用されてないってことに他ならないだろうか？　断然ルネが怪しいわけだが。

「それでセイン、そのＤＲで遊んだ時の写真っていうのがこれかな？」

ルネがスクリーンに新たな画像を表示させた。自由の女神をバックに、三人が写っている。『聖＆自分＆甲斐ｉｎ　ＮｅｗＹｏｒｋ』

「うん。私帰国子女で、少しだけ英語が出来るの。それで、ちょっとだけ観光に行ったんだ」

ＤＲは降りられるポイントが開放されていればいいので、距離はあまり問題ではなかった。それこそ、南極でも月でも環境さえ整っていれば一瞬で行くことが可能だ。しかし、オレは日本語しかできないため、今まで国内から出ようとしたことがなかった。今度セインを引き連れようと決心する。

「で、秋山このみはこの真ん中でいいのかな？」
ルネが写真を指さした。性別不詳、黒髪でオレと同じあまり特徴のない顔つきなのに、どこか気品を感じさせるアバターだった。
「そう。それで、こっちが綾乃ちゃん」
意外だったのが、カインがかわいらしい少女姿だったってことだ。実体の写真でも、オレの知っている金髪眼鏡の青年でも、クールな雰囲気を漂わせている。セインの示した彼女は、茶色の髪のツインテールで、ウェーブがかっていた。服も女の子という言葉がよく似合う、レースのブラウスに花柄のスカートだった。目つきだけがカインだ。
「へぇ……」
「まだ他にも画像あるよ」
写真が変わって、カインと秋山このみのツーショットが出てきた。『甲斐＆自分』夜の東遊園地公園らしい。
「あ、私に秘密で遊んでる。カインずるいなぁ」
目を細めて微笑むセイン。ルネは一通り満足したのか、オレに操作の主導権を返した。
「全部セインとカインとの幸せな記録だったね」
「うん……」
ルネがオレに目配せをした。「これ以上叩いても何も出てこないから、この辺で切り上げよう」と言っている。瞬時にルネの思考が読み取れて、オレは多大な疲労を感じた。ルネのお守り。
２３：３０に近かった。セインに時計を示すと、多少慌てたようだ。明日は数学のミニテストがあると言っていた。
「ヴァン、ルネ、ありがとう。そろそろ帰るね」
睫毛が涙で塗れていたが、セインの顔に浮かんだのは憂いのない笑みだった。
「ああ」「またね」
セインの姿が消える。部屋にはルネとオレだけが残った。ルネはソファに腰かけて、足を組んだ。幼女のくせに堂々とした恰好で、

謎な威圧感がある。葉巻を吸っていても、決して違和感を覚えないだろう。

「ヴァン」

「ああ、キーパーソンはカインだな」

ルネが満足そうに唇を釣り上げた。

２０８８年９月１７日（金）

２０８８年９月１７日（金）

ところで、忘れていることがあるのではないだろうか。そう、サイバー課だ。オレのメールボックスには大量の、タチバナからの苦情が送りつけられていた。ボイスメールを開いて、すぐさま後悔する。ひどい怒鳴り声で、内容はオレがさっさと帰ってしまったことに対する文句と、ハルカの飲み込みの悪さに対する愚痴で占められていた。一朝一夕で演技力がついたら、誰でも役者になれるに違いないと呆れたが、タチバナの店の子供たちを思い出して、オレは首を振った。タチバナなら誰でも一日で役者にできる。オレは最後の一通のみ残して、タチバナからのすべてのメールを削除する。苦情に違いないからだ。最後の一通、２００９／９／１７　１２：０３：５６に送られてきたメールを開こうと思ったのは、苦情メールよりもデータ量が非常に小さかったからだった。早速内容を聞く。

「立った……。クララが立った！」

タチバナからの遺言だ。一日中指導していたということだろうか。オレは静かに合掌した。

いつもの少年姿で汚い壁に寄りかかり、オレは顎に手をあてた。高層ビルのガラスが鱗雲の浮かぶ空を映し出していた。人通りはまばらで、ＤＲも少ない。誰もオレを気に留めなかった。

「さて、これからどうするか」

カインと会う前に、ある程度の情報は仕入れておきたい。昨日は徹夜だったと思われるサイバー課ハルカに連絡してみたが、予想通り反応が返ってこなかった。「公務、大丈夫なんだろうな……」オレのつぶやきは虚しく虚空にこだまする。こちらも合掌。

オレはスクリーンを出して、サーバから秋山このみの情報を呼び

出した。結局昨日は全てをルネ任せにし、オレ自身で目を通していなかった。暇つぶしにはちょうどいいだろう。

データ量は多くなかった。それも八割は画像動画だ。サーバにデフォルトで付属しているソフトウェア以外はインストールされていない。特別操作しやすいようにカスタマイズしているわけでもなかった。ルネがものたりないと感じるのもわかる気がする。

ずっと変な違和感がオレの中で燻っていた。

オレは昨日見た写真をスクリーンに写した。写真はどれもカイン、セイン、そして秋山このみのものばかりだ。秋山このみはずっとボーイッシュなベリーショートの髪で、私服はどれもカジュアルな、一見男とも見間違えそうな服装だ。スカート姿は一枚もなかった。

もう一つのスクリーンに、秋山このみの部屋を撮った動画、三枚目のスクリーンにＤＲ姿の写真を出した。オレは三面を見比べて首を捻る。秋山このみの部屋はやはりファンシーで、女の子という言葉がよく似合う。オレのような乱雑で無秩序なコーディネートでもないし、秋山このみの外見から想像できるような少年っぽいものでもない。そのくせ、秋山このみのアバターは現実世界そっくりで、性別だけが不詳な外見だ。

「ああ、これだ」

オレは違和感を突き止めた。秋山このみの『中身』とアバターが合ってないのだ。

不可抗力で女になっているハルカは例外として、ＤＲは一種、人の変身願望を実現させるものだった。アバター作りには技術がいるが、自分の希望するアバターが手に入れば、人はそのアバター自身になれる。つまり、外見に自信のない人が美男美女になることも、パンダに憧れる人がパンダになることも可能になる。アバター職人と呼ばれる人々にお金を払ってまでして、自分の希望するアバターを作ってもらう人も多い。そして、大抵は実体とかけ離れた外観のアバターを使う傾向にあった。

秋山このみの部屋は女の子らしさで溢れていた。そういう少女が、わざわざ男性とも見紛うアバターを選ぶだろうか。カインの少女姿のほうがよっぽどらしかった。

スライドさせ、別のＤＲ姿の写真を写す。カインと秋山このみのツーショットで、手を握り合っていた。斜め上からのアングルで、解像度が荒い。街中に設置された街頭カメラから取ってきたものだろう。街には犯罪抑止のためカメラが所々設置されているが、一般市民も自由に使用できるように開放されていた。

次の写真は、先ほどの写真をズームしたもののようだった。次。オレはどんどん写真を進める。昨日抱いた、プライベートを赤裸々に覗く気持ちはなくなっていた。秋山このみのチグハグ感が、オレを急き立てていた。次、次、これも次。

セインが混ざっているものを除いて、カインと秋山このみの写真はほとんどが街頭カメラで撮影されたものだということに気づいた。だんだん頭が混乱してくる。どういうことだ。

オレが次に出した写真は、カインと秋山このみが手をつないで街中を歩いているものだった。実体と派手な恰好をしたＤＲが多く、オレ自身も見覚えのある建物から、その場所が原宿だとわかる。正面からの撮られたもので、カインは今までみたことがないような満面の笑みを浮かべていた。

「こんな顔もするんだ」

カインはクールとばかり思っていたので、オレは珍しくてスクリーンを操作する手を止めた。カインはツインテールを風で揺らしながら、街頭カメラに向かって笑いかける。秋山このみはカメラに気づかないのか、迷惑そうに顔を背けていた。

「あれ？」

カインを中心に画像を拡大する。女の子らしい少女の笑顔に、八重歯が覗いていた。

ボーイッシュな少女の笑顔が、この写真とダブった。実体の写真を見ると、女の子と同じ笑顔が張り付いていた。外見は違う。だが、

癖までは抜けない。
オレは生唾を飲み込んだ。
ここ数日、アバターが違っていても実体を見破られることを、身をもって体験した。ツインテールの少女の手首を大きく拡大する。ｔｕｚ社のＧＮ４０７。ワインレッドの、ブレスレットらしいギア。

「まさか」

オレは驚きの気持ちを抑え、次の写真にスライドさせた。
絶句。
この一枚にカインと秋山このみの全てが集約されていた。

「ルネ！　ルネいるか？！」
大久保のルネの隠れ家に駆け込んだ。扉を開くと畳にちゃぶ台、座布団があり、床の間の再現までばっちりだ。だが、肝心の主がいない。
「あ……」
ちょうど１５時を回ったところだ。ギアが今日は平日だということを主張していた。仕事中かもしれない。オレはへらへらとその場に崩れ落ちた。
「忘れてた」
「何忘れてたの？」
「ルネ」
空間からルネが現れた。セインの着せ替えに触発されたのか、ビクトール人形のようなゴシックロリータ衣装だ。黒と白のレースを重ねてふわふわ感を出している。シルバーの細いチェーンが腰に巻かれていて、ほどよいアクセントになっていた。手には綿のはみ出

たうさぎのぬいぐるみを抱えている。その姿はダークで愛らしいお人形さんだが、さすがに畳なだけあって、靴は履いていなかった。
「ルネ、大好きなヴァンのためならいつだって駆けつけるよ」
「あ、ああ。ありがとう」
靴はいらないので消す。畳に倒れこんだ。イグサの香りが鼻孔から入ってくる。これぞ日本人だ。
「ヴァン、ものすごく慌ててたけど」
うつ伏せのオレの頭をペシペシと叩きながらルネが言った。
「急ぎでお願いがあるんだが、いいか？」
「何？」
「数日前の街頭カメラから画像を取ってくることってできるか？」
クスクスとルネが笑った。
「楽勝だよ。時間とポイントさえあれば、すぐにでもできるよ。街頭カメラの画像、奇特な団体が採取してるんだよね。リアルタイムじゃなくて１０分おきに１枚で、解像度もそんなに高くないけど」
「そんなところあるのか」
「うん」
オレは口を開いた。「９月８日１９時から２０時、梅田」
「わかった」
ルネが立ち上がって、偶然スカートの中が見えた。真っ白のズロースだ。ロリータファッションの再現度に、思わず親指を立てる。すぐさまルネに踏まれた。

街中、オレは写真を凝視しながら、何度もセインに電話を掛けた。休憩時間に入ったところで捕まえた。簡単に質問する。
・狂った秋山このみを見たのはいつか。
・今日カインは来ているか。
セインは不思議そうな口調で教えてくれた。カインについては昨日から休んでいるということだった。

写真を見たときから、ぞくぞくとした悪寒が離れない。
オレがはじめてドラッグプログラムの存在を知ったとき、セインは秋山このみの狂った姿を見たのだと言っていた。すなわち、あの凡庸な顔立ちのＤＲだ。

「ヴァン、とれた。うつすよ」
オレは胡座を組んで座り、ルネの出したスクリーンを見る。ポイントをずらした写真が何枚も表示されていた。
「ルネ、この中からこのＤＲ見つけられるか？」
「ああ、秋山このみのアバターだよね」
ルネがさっとピンクの瞳を走らせて、一点を指差す。
「ここ」
壁に座り込んで、手を抑えていた。赤黒い血がわずかにのぞく。
オレはＤＲの手首をアップした。
「確かに解像度が低いな」
「うん」
それでも十分だった。オレはこのＤＲがつけているギアをよく知っている。ｔｕｚ社のＧＨ３０１、２０８７年に発売され、ＤＲブームの火付け役となった廉価モデルで、セインとカインの愛用品だった。

ずずず、とルネが日本茶を啜る。
「やっぱりほうじ茶は落ち着くね」などと幼女らしからぬことをつぶやく。ゴシックロリータに畳だ。これほど奇抜な光景もなかった。
「それで、ヴァンは、カインと秋山このみがアバターを入れ替えて遊ぶことがあったって言うんだよね」
「ああ。ほら、これが証拠だ」
スクリーンに写真を表示させた。
「うん」
ルネがスクリーンに目をやりながら、指を素早く動かした。

「納得。アバターってユニークだよね。ＵＵＩＤから元を作ってるから、偶然だと誰一人同じアバターには絶対ならないの。で、この二人、ぱっぱって解析したらまったく同じアバターって結果が出るよ。だから、アバター交換して使ってたっていうのは、数値的にも裏が取れたよ」

「それで」

「それで、カインもドラッグプログラムを使ってた可能性はあるんだよね。むしろ、秋山このみみたいな素人はカイン経由でドラッグプログラムを手に入れたって言われたほうがすっきりするかな」

「ああ」

「あるいは、カインと秋山このみが会っている時に入手したか。カインが教えてくれればいいけどねぇ」

のんびりとしたルネの口調に、オレは大分落ち着いてきた。

さすがに、オレが見た最後の一枚については、ルネに言うことができなかった。軽々しく暴露することではない。オレはため息をついた。

「カイン、死んでないといいね」

「そうだな」

セインには放課後カインの様子を見てきてもらうようにメールで頼んである。連絡のない時間が重かった。時計は１８：００を指そうとしていた。冷たい汗が何度も背中を伝う。遮断しきれていない実体の不快さに、オレは眉を顰めた。

「ヴァン、ヴァン～！」

ドタドタと慌しい足音と共に扉が開いた。セインは久々の少年すがたで、ぜーはーぜーはーと息をする。

「無事だったか？！」

「死んじゃってた？！」ルネ、不謹慎だ。

荒い呼吸を繰り返しながら、セインは激しく首を振った。どっちだ。

「た、た……」

セインと目があった。
「ただの風邪」
オレはどっと疲れを感じた。

2088年9月18日（土）　その1

2088年9月18日（土）

「ただの風邪、なんてことないんだけどね」
三つ編みが揺れた。薄い眼鏡が月光を反射させてキラキラと光る。
レンズの奥には、鋭利な目があった。
「カイン」
彼女は唇を釣り上げた。
「この姿でははじめまして、といったところかな」
深夜0時を回ったところだ。オレは東遊園地公園にいた。高層ビルはわずかに光を灯すのみだ。波の音がよくきこえた。
「呼び出して悪かったね」
「いや」
カインこと甲斐綾乃はオレと対峙した。背は少年姿のオレより少し低いぐらいで、白のハイネックに紺のジーンズ、イメージどおりのシンプルな恰好をしている。
「先日、ヴァンと聖がここにいるのを見たときから、半ば予想はしていたんだ。聖が今日訪ねてきて、決心した」
この公園でセインと同じ制服姿を見た気がしたのを思い出した。
カインだったのか。
「調べてるんだろう。秋山このみとドラッグプログラムの関係を。それとも、私--と言うべきかな」
クスクスとカインは笑った。
「聖、あの子のことだから、『先輩の仇が取りたい』などとバカなことを言って巻き込まれたんだろう。大体の経緯は予想がつく。ヴァンは、どこまで知っている?」
「ほとんど何も知らない状態だよ」

「そうか」
カインはオレの前にスクリーンを出した。
「！」
映し出された写真には、秋山このみとカインとの関係がはっきりと示されていた。
「不思議だね。ヴァンには知ってもらいたい気もするんだ。私たちのこと」
街頭カメラから取られたのだろうその写真に、ＤＲ姿のカインと秋山このみがいた。カインの頭を両手で抑え、舌を絡ませている。カインの口から唾液が伝っていた。カインの顔は快楽というよりはむしろ苦痛で、歪んでいた。
まさに、ルネに伝えることができなかった一枚だ。オレは眉を顰めた。
「このみがうれしそうに送ってきた。他にもあるよ。もっと激しいのも」
ほら、とカインの細い指が動く。
「いや、見せなくていい」
「照れなくてもいい。欲望に忠実に生きるのも、いいことだよ」
「間に合っている」
楽しそうに、カインが目を細めた。
「間に合っている……」「復唱するな！」

秋風が冷たかった。カインはベンチにゆっくりと腰かけた。「話は長くなる」オレも倣う。
半月が甲斐綾乃の顔を照らし、半面影を作っていた。
「このみとの関係を一言で表すなら、元恋人同士ってところだ。ならされた、というべきかな」
オレの想像は半分当たり、半分外れだった。
「元？」
「そう、元」

カインは月よりも遠いどこかを見つめた。
「私とこのみは同じスポーツ関連の業界に君臨する人物の娘で、幼少のころからの知り合いだった。それこそ幼馴染みとも言える間柄だったよ、小学生までは。私がこのみの恋人にさせられたのは、中学一年生の時だった。圧力だ。当時このみの会社ＭＩＭＥが特許を取っていたシステム、ｏＡＲＴ導入に私が引き合いに出された。父から直々に言われた。このみの言うことを何でもきけと」
カインは淡々と語る。ｏＡＲＴは有酸素運動の革新的な技術で、数年前に連日メディアを賑わせていた記憶がある。詳細は知らない。だが、スポーツ業界にとって、大きな出来事だというのは理解できた。
「父は媚びろという意味でいったのだろうけれど、このみの要求は違ったよ。あの頃から、このみは私に執着していた。私は気づかなかったけれど。だんだんこのみの要求はエスカレートしていった。最初は休日に付き合え。次にキスしろ。最終的にホテルだ」
カインの口元は微かに震えていた。
「このみは自分の立ち位置を理解していた。カイスポーツが業界最大手になれたのも、ｏＡＲＴが独占できたおかげだしね。そうして、私は恋人という名の奴隷に成り下がった。」
嗤う。
「私とこのみとの関係は、初めから歪んでいた。このみの執着が私を搦め捕って、ずっと身動きできないでいたんだ」
クスクスとカインの口から声が漏れた。
「彼女、非常に女々しかったんだ。文字通りね。レースが好きだし、かわいらしいぬいぐるみには目がなかった。好きな色はピンクで、小学生になってもリカちゃん人形が手放せないでいた。それこそ、少女マンガが愛読書でね。私もよくレースの服を着せられたよ。ゴテゴテの趣味が悪いひらひらしたやつだ」
オレは甲斐綾乃のロリータ衣装を想像しようとしたが、できなかった。彼女の強い眼が、少女らしさを打ち消していた。

「ヴァン」
カインがオレを見た。微笑んでいるのに、泣いているようにしか見えなかった。
「そんなこのみが麗人みたいな恰好をしていたのは何でだと思う？」
「……女の子らしいとおかまみたいに見えるから」
「それもある」
彼女は笑顔を深めた。
「正解は、他の女が私に注目しないように、だよ。私に誰も近づかないように、他の女の視線を自分に向けるように仕向けた。友人になろうとした人は、全てこのみが奪い取った。滑稽だ。このみ以外は誰もそんな目で私を見ないのに。おかげで私は友人が一人もいなかった」
このみが睨みをきかせたせいでいじめもなかったけどね、とカインは付け加えた。
文字通り、カインは秋山このみに拘束されていた。聖ベルナデッタ学院はエスカレータ式で、人間関係もそのまま持ち上がる。もちろん、カインこと甲斐綾乃は友人がいないままだった。
転機が訪れたのは、２０８６年の夏、セインが転校してきてからだ。天然でにぶいセインは、カインと秋山このみの関係に気づかず、カインと友情を育みはじめる。
「当時の事情を少しだけ言うと、ｏＡＲＴに変わる技術、ｍｏｎｏｌｉｔｈが生まれた。もうこっちの方が有名になっているからわかると思う。秋山このみのＭＩＭＥ社ではなくＨｅｌｅｎｅ社だ。カイスポーツもｏＡＲＴから乗り換えることになって、私はこのみとの関係を解消した。タイミングが悪かった所為もあった。聖が私を奪ったと思い込んだこのみは、聖にまとわりつくようになった」
それが秋山このみのデータにあった写真の山だ。
「堪らなかったね。以前は私が一人でいれさえすれば、学校ではそっとしておいてくれたんだ。『あんまり関係が知られるのは恥ずかしい』って目薬で潤ませた目でお願いしたことも関係あるのかもし

れないが。聖が来てから、いや、別れてからかな。休み時間も教室を訪れて、四六時中私を監視しはじめた。聖はバカだから、単純に『親切にしてくれた』とでも言ってたんだろう。あれは、聖の懐柔も兼ねてたから」

写真で関係も強要された。秋山このみの束縛に限界を感じていた時、ＤＲを知った。廉価版ギアが発売され、大々的にＤＲのアイドル歌手鈴木エーナが売り出された頃だ。カインは秋山このみが機械音痴だということを良く知っていたから、手を出さないと見込んで、「拡張現実へ逃げた」

ぽろり、とカインの目から雫がこぼれた。

「はじめてだった。あんなに楽しかったのは。甲斐綾乃ではない誰かになれた気がした。自由を感じた。ルネやヴァンにも会えた。下らない遊びが好きだった。ヴァン、あの時間だけが私の救いだったんだ」

カインはすっと涙を拭った。涙とともに、表情も消え去った。

彼女の口から流れ出たのは抑揚のない声で、オレは身体を震わせた。

「アレは偶然手に入れた。強烈な快感、悦感。はじめて使って、私はこれだと感じた。このみにギアを買わせたのも私だ。すぐさまこのみにアレを使わせた」

アレがドラッグプログラムを指していることはすぐにわかった。

「単純に、私以外のものに依存してくれればいいと思ったんだ。そうして、私から離れていってくれたらいい。このみは予想通り溺れたよ。アレの数も限られていたから、私の使う分は減っていったけど、使えない辛さよりもこのみの粘着のほうが苦痛だったから耐えられた。それでも、半分成功で、半分失敗だったが」

結果的に、ＤＲでも追いかけられるようになった。

「まぁ、アレを使いつづけると死ぬなんて思わなかったけどね。このみは、私が殺したようなものだよ」

清々したけどね。カインはすっと立ち上がった。
三つ編みが揺れる。
「私はこのみが使うようになってからは使用していない。だけど、アレは一回使ったらアウトだと思う。多分、使用頻度が高いほど……」
「カイン？」
「時間切れ。最近、何度も何度も来る……。急に」
彼女が振り返ったが、逆光で表情がわからなかった。
「ヴァン。今から言うことを覚えておいて」
少女は膝をつく。波の音が耳障りだった。
「新大久保」
手を己れの首に絡めた。
「私書箱」
屈み込む。
「に、まる……、さ、ん」
「カイン！」

オレはカインに駆け寄って、彼女に手を伸ばした。虚しく彼女の身体を突き抜ける。オレは唯の映像だった。彼女の指はしっかりと食い込んでいて、剥がれようとしない。
「しっかりしろ」
カインは地面に倒れこんだ。カシャンと軽い音がして、彼女の眼鏡が外れる。レンズにはひびが入っていた。カインの口は引きつったように釣り上がり、唾液が伝っていた。
「カイン」
意識がない。オレはギアに目を走らせた。夢中で操作する。電話の呼び出し音はたった3コールなのに、やけに長く聞こえた。カインの顔がだんだん青くなっていくのがわかる。
『なんだ、ルネのお守りヴァン』
耳に入った声は爽やかだったが、オレは気にもとめなかった。

「サイバー課！　神戸の東遊園地公園にすぐ来てくれ。実体を引き連れて！」
『はぁ？』
「ドラッグプログラムの使用者が倒れている。自分で首を締め、動かなくなった。頼む」
『すぐ行く！』
オレは通話を切った。
ひびの入ったカインの眼鏡が、キラキラと月光を反射させていた。

2088年9月18日（土）　その2

病院にはARバリアがはってあって、入ることができない。オレは病院の前をうろうろと歩いた。大学病院で、十分に一台は救急車が入ってくる。夜だというのに賑やかだった。カインとサイバー課が病院に向かう姿を見届けて、オレはセインにボイスメールを送った。だが、セインから連絡がない。もう就寝しているのだろう。サイバー課は病院に入ったきりで、出てくる気配がなかった。オレは落ち着かなくて、歩く足が止まらなかった。

すでに午前1時を過ぎていた。

サイバー課は5分も掛からずに駆けつけてきた。まだ二十代の男性で私服だった。怒り肩でガニ股が特徴だった。オレはそれが誰だかすぐに分かった。

オレは厳つい顔を想像していたのだが、意外なことに彼は童顔で、それなりに端正だった。

「ハルヒコ」

ハルカことハルコヒはカインの横に屈み込んで呼吸を確認する。彼女はぐたっとしていて、何の抵抗もしなかった。

「大丈夫、息はしている」

ハルヒコはカインの指をゆっくりと外した。首筋に手のひらの跡がくっきりと浮かんでいる。彼女の呼吸は非常に浅くて、オレには死んでいるようにしかみえなかった。

「救急車がすぐに来るはずだ。連絡ありがとう、ヴァン」

「ああ」

ハルヒコが立ち上がった。

「今更だけど俺は」

「ハルヒコだろ」

宮島晴彦、落ちこぼれの素人サイバー課警部補だ。なぜそれを、

とハルヒコは目を見開いたが、やっぱりバレバレだ。
「そのガニ股、直した方がいいぞ」そうしたらそれなりにモテそうだ。
オレのため息まじりに吐いた言葉に重なって、救急車のサイレンが聞こえてきた。

半月が西の空に浮かんでいる。高層ビルにその間を繋ぐ通路やモノレールの線路が、空を狭めていた。ビルを繋ぐ線が点滅していて、大きな遊園地のようにも思える。大学病院は郊外にあったので、神戸の高層ビル群がよく見えた。一回帰ろうかと考えながらも、ギアを捻られずにいた頃、やっとハルヒコが玄関に現れた。
「どうだった」
ハルヒコの目の下にひどいくまができていて、憔悴しているのがわかった。タチバナの特訓が効いたのかもしれない。
「ああ、ヴァン。少し話すか」
大学病院から三分程度歩いたところにある、赤と黄色のMマークが特徴のファーストフードレストランに入った。深夜であるにも関わらず、まばらに人がいる。ハルヒコはコーラとポテトを席料代わりに注文した。四人席に向かい合わせに座る。目の前に置かれたポテトの油っぽい匂いが、オレに空腹を教えた。
ハルヒコはポテトをごそっとつまみ、口の中に放る。おいしそうに咀嚼する姿に、オレは悔しくなった。シャクシャクとした音、このポテトは好物だ。ハルヒコはゆっくりと嚥下した。
そして、オレを見る。
「甲斐綾乃は意識不明で入院した。少なくとも重体ではないそうだが、ドラッグプログラムがどんな影響を与えているのか分からないので、当分の間は検査することになるだろう」
「ああ」
オレはほっと息をついた。まだカインは死んでいない。それが重要なことだ。

「ヴァン、君がドラッグプログラムに関わっているのはよくわかった。秋山このみ、甲斐綾乃……。色々教えてくれないか」
ハルヒコが偉そうな口調なのは、こいつが警察官だからだ。オレは両手で頬杖をついた。
「なぁ、ハルヒコ。その前に一つだけ確認したいことがあるんだが」
「何だ」
オレはハルヒコを見返した。
「サイバー課は一体何の容疑で捜査しているんだ？　現行法では、ドラッグプログラムに違法性はないはずだ」
これがわかるまでは、オレは口を割るつもりはなかった。カインとセインはオレにとって数すくないＤＲの友だ。
ハルヒコはため息をついた。日本人にしては茶色の髪を撫でつける。
「ああ。現状、使用者を逮捕することはできない。麻薬でもないし、ウィルスでもないからな」
「そうだろうな」
タチバナの予想したとおりだった。
「だが、ドラッグプログラムをばら撒いているやつらは、捕まえる」
「どうやって」
「『業務上過失致死』」
殺人の意図なしに人が死亡した場合、監督不届きで裁くことができる罪状だった。一般的に、人身事故を起こした場合に、刑事上の罪で問われる。過去に毒物の混ざった牛乳を販売していた会社のトップが、この罪状で逮捕されたことを思い出した。
「人が死ぬプログラムを配布しているんだ。摘要は可能だ」
オレはポテトを見つめた。ボックスから溢れた小さいポテトが一本だけ焦げていた。
「ドラッグプログラムと死因が関連付けられるのか？」
業務上過失致死は因果関係を証明する必要があった。
「それを調査中だ。俺はドラッグプログラムの死亡者をずっと追っ

ていたんだ。他のチームもサイバー課の中でドラッグプログラムの大元を探しているが、現状、判明していない。生きている使用者すら見つかっていなかったんだ」

だから、甲斐綾乃は貴重な証言者になる。

「そうか」

サイバー課もほとんどドラッグプログラムの情報をつかんでいなかった。ドラッグプログラムの使用者が死亡することがある、というだけだ。

オレは甲斐綾乃と秋山このみの関係を暈して、大まかにこれまでの経緯を説明した。セインこと二宮聖の名前も出したのは、カインの言葉が気にかかっていたからだ。「アレは一回使ったらアウト」、そう言っていた。

ハルヒコはオレの言葉をレコーダに採った。

「つまり、その二宮聖という子も使ったことがあると」

「一回だけな。オレが知っているのはそこまでだ」

オレの持っている情報は出尽くした。サイバー課も手詰まりだ。後はカインの証言が頼りだった。

「ああ、そうだ。ハルヒコ。やけに駆けつけるの早かったよな」

何気なく口にした。サイバー課の本拠地がどこにあるのかは知らないが、東遊園地公園まで五分というのは早すぎる気がする。

「捜査でこっちに来ていたんだ。どうも、ドラッグプログラム関連の死亡者が西よりで」

「は？」

「あれ、言ってなかったか」

明らかに初耳だ。

「今まで使用者と思われる死体が１４人いるんだが、現住所がほとんど京都、大阪、兵庫なんだ。それで、サイバー課で地域性があるのではないかという話になって、俺が実体で来ることにした」

ＤＲは苦手だしな、とはにかんだ顔で付け加える。

「なんだそれ」
脳裏に警察の秘密資料が浮かぶ。オレが持っているのは何通だったか。
「おい、ハルヒコ」
オレはハルヒコの童顔に向かってにっこりと笑った。
「一人前のＤＲにする代償、何だったか覚えてるか」
「あ」
ハルヒコの顔が引きつった。そのくせ、すぐさまレコーダのスイッチを切る周到さだ。
「確か、ドラッグプログラムの情報だよな」
オレはにたりと唇を釣り上げる。
「それは調書も含まれているんだが」
ハルヒコの目の前に手を差し出した。くいっと指を折り曲げる。
「出せ」
何だか自分が悪人になった気がしないでもないが、これは正当な取引だ。このことがバレたらハルヒコが懲戒処分になるとても、だ。ハルヒコはサイバー課の落ちこぼれになるよりも、キャリアをとったのだ。リスクが生じるのは当然だ。そう心の中でつぶやきながら、ハルヒコからせしめたデータをオレのサーバに格納した。
「暗号化しておけよ。パスワードもつけろよ。誰にも見せるなよ」
オレにだって良心はある。多分。
すっかり冷たくなったポテトを、ハルヒコは一本ずついじけながら口に入れていた。オレは萎びたポテトは大嫌いだから、いい気味だと思う。
「で、出張はいいにしても、何で三宮なんだ？」
ハルヒコが顔を上げた。
「あの辺いいホテルが集まってるだろ。せっかく公費で泊まれるなら高いところがいいな、と……。憧れだったんだよな、神戸」
駄目だこいつ。いずれ不正かなにかで免職になるだろう。保証する。

空が明るんできていた。ハルヒコと別れ、オレは東遊園地公園に戻ってきていた。夜明け前だというのに、犬の散歩をしている人もいて、だんだん街が目覚めるのがわかる。小鳥の鳴き声が心地いい。

「さて」

オレは伸びをした。

サイバー課の最新の情報はオレの手のひらの中にある。ルネにこそっと渡すか、永久に閉まっておくか。どちらにしても、これ以上ドラッグプログラムに関わろうという気にはなれなかった。

カインと秋山このみの関係についてはあえて省いて、セインに簡単な顛末を改めてメールで送った。

セインの頼みは、『秋山このみがドラッグプログラムを使用し死亡した』真相を知ることだった。カイン関係は、彼女が生きているから直接聞けばいい。サイバー課も訪ねてくるだろうから、セインの問題も彼らが引き取ってくれるだろう。

ひとまず、調査は終わったことになる。

全てが解決し、清々しいはずの朝だった。だが、オレには何かが引っかかっていて、どことなく気持ち悪かった。何かを忘れているような気がして、それが何かを思い出せなかった。

突然、ぐぅ〜っと間抜けな音が響く。

「そういえば、お腹減ってたな……」

ハルヒコが食べていた熱々のポテトを思い浮かべた。やり残したと思っていたものは、これだ。

すっきりしたところで、オレは思案する。

寝る前のポテトはいかがなものか。いや、今日までオレはよくがんばった。そのご褒美だ。よし。

「喰うぞ！」

オレの宣言は、高らかに朝の空へ響いた。

２０８８年９月１８日（土）　その３

漂ってくる焼肉の香りに胸やけがした。さすがに寝る前にポテトＬＬはないんじゃないか、と正常な脳で考える。調子にのって注文したのがまずかった。いや、味はよかったが、ＬＬサイズを甘くみたのがいけなかった。甘くはない、塩辛かったって、そういう問題でもない。とにかく、量が多かった。

オレは重い胃を擦った。チカチカと光るネオンが目に痛い。今日は土曜日なだけあって、普段よりもＤＲが多い気がした。すっかりマスコットになっているパンダもいる。

「遅いな……」

オレはギアを確認した。２２：１０。セインが遅れてくることは珍しい。もしかしたらルネに拉致されたのかもしれない。伸びをして、ルネの隠れ家へ歩きだした。

起きたら、セインから鬼のようなメールが届いていた。内容は予想がつくから見ていない。ボイスメールは聞くのに時間がかかるし、寝起きで文字を見る元気もなかったから、シンプルに大久保で会おうと約束を取り付けた。ハルヒコからは連絡なし、だ。セインが何か知っているだろう。もう事情徴収も受けているかもしれない。

まぁ、全部終わったしな。

埃のかぶった階段を一段一段下りる。気分を反映してか、オレの足取りは軽かった。

「おーい！　セイン、ルネ、いるか？」

勢いよく部屋へ突入する。あの黒さを滲ませた幼女と、清楚な少女がオレを出迎えた。

「え？」

わけではなく、扉の先は、何もない空間が広がっていた。真っ白

だ。壁も、何もない。床すら存在していなかった。透明なガラスの上を立っているようだ。トントンと足元を確かめると、確かに地面がある。だが、見えない。オレが慌てて振り向くと、入り口がすうっと消えていった。

「なんだ？」

明らかにおかしい。何もない空間に、ポツンとオレだけがいた。

「ここはルネの部屋か？」

異常だ。出口すらなくなった。オレだけがこの白い空間に浮いている。

ギアを確認する。現在の座標は、０００００．０００００００００、０００００．０００００００００……。

「ＮＵＬＬ？！」

「そう、ようこそ仮想世界へ」

顔をあげた。目の前には、よく見知った少年が立っている。

「はじめまして」

そう、馴染みすぎている姿だった。

「ｎｏ　ｎａｍｅ」

眼の前に立つ少年は、今のオレと同じ姿形をしていた。寸分違わない。くすんだ茶色い髪、さして特徴もない凡庸な顔立ち。唯一の違いは、眼の前の少年はギアをしていなかったことだ。ＤＲならば、現実につけているギアはアバターにも投影され、これだけは偽装ができない。オレの瞬時の思考を、少年の一言が吹き飛ばした。

「エマノンだよ」

ドクンと心臓が跳ねた。

「エマノン……」

まじまじと「オレ」を見る。

アバターはユニークだ。どんなに似た外見にしようとしても、必ず違いが出る。天文学的な数字でしか衝突が起こらないＵＵＩＤをベースに作られているからだ。逆に、同じ姿ということは、アバターのデータを共有していることになる。

「君のドラッグプログラムが欲しいんだよ。持っているよね？」
つまり、その意味は。
「ごまかしても無駄だよ、柳楽誠。２５歳、無職。全部知っている」
強制的にギアのスイッチを切った。急激なパルスが脳内を駆けめぐる。戻ってきたオレの薄汚い部屋、オレの身体。ギアをとる。ズキズキと頭痛がし、吐き気がこみ上げてきた。ぎこちない動きで口元を抑え、トイレに駆け込む。便器に手を置き、吐いた。喉が灼けるように痛くなり、口からは黄色い液が流れ落ちた。苦しい。咳き込んだら、めまいがした。ぐったりと便器にもたれかかる。
自分の身体なのに、強烈な違和感があった。
当然だ。オレは自分の手を抑えた。ちゃんとした変換もなしに戻ると、急激な感覚の変化に脳がついていけない。旧型のギアは、反作用もひどかった。
ふらつく身体を支えながら、オレは立ち上がろうとした。ルーターを切らないと。サーバも、それから、初期化……。やるべきことは分かっていた。エマノンがオレのアバターで現れた意味も。
ハッキングされたのだ。エマノンに。

２０８８年９月１９日（日）　その１

訂正しよう。オレは決して無職ではない。

税金も年金もきっちり納めている。辛うじて生活できるぐらいには稼いでいる。たとえ通帳の預金残高が常に一桁と四桁の間をさまよっているとしても、だ。

オレはＡＲ造型技師とか、ＡＲ構築師とかいったものを生業としている。非常にマイナーな職業なので決まった名称は定まっていない。単純に言ってしまえばＡＲを作る仕事だが、これがなかなかに奥が深い。

現実に存在する物体は様々な情報を持っている。外観、食感、触感、音、匂い、重さ、大きさ……、これらすべての情報が物体にはつまっている。ＡＲ化とはこれらの情報をすべて電子化することだ。現実に存在するものならば、スキャンニングでＡＲに転化できる。しかし、現実に存在しないものは、情報転化ができない。作るしかないのだ。そこで、オレの出番になるわけだ。

顧客の要望に合わせ、ないものを造る。例えば、触手を造るとしよう。触手で一番大切なのは触感で、固いのか、柔らかいのかだけではなく、細部のイボの出っ張り具合や引っかかり具合が重要となる。取り巻く粘液の年度、匂い、味もそれらしく加味しなければならない。オレが一番こだわったのは、粘液の分泌量で……って。

つまり、存在しないＡＲを作成するのは、技量と根性が必要ってことだ。２０８０年後半になってすら未だにアニメやマンがで登場するような大規模な「仮想世界」がないのも、すべて現実に存在しないＡＲを作成する労力の大きさにあった。

そして、一つだけ白状するならば、マニアックすぎる「触手クラブ」、触手の部分はオレが造った。食うに困って渋々受けた仕事だ。決してオレが触手に絡まれる趣味はないことが、お分かりいただけただろうか。とりあえず、仕事の出来を言うならば、消したい過去

だ。何故か、あの仕事以来わけのわからない依頼が多くなったわけだが……。

最初は小遣い稼ぎにやっていたものが、気づいたら本業になっていた。昼夜逆転の生活が抜けきれず、立派なフリーランス。仕事には波があって、今は抱えている仕事がない。一つもない。一ヶ月前からない。だが、決して無職でないことは強く主張しておく。

それにしてもエマノン、どうせハックするのなら、ちゃんとオレの収入まで見てほしかった……。いや、惨めになるから見られないほうがよかったのか？

オレは自問しながらせっせと手を動かした。

現在、サーバの初期化を行っている。警察すら騙くらかしたエマノンのことだ。オレのサーバにも正体不明のルートキットを置いている可能性があった。ウィルススキャンぐらいでは出てこないだろう。これが一番手っ取り早いのだ。時間はかかるが。

「なぁ、誠。あのマシンもやっちまうのか？」

隣で作業をしている青年が振り向いた。美丈夫すぎて眩しい。黒髪眼鏡の秀才そうな外観で、今みたいなラフな恰好よりもパリッとしたスーツのほうが似合いそうだ。

橘伸吾、タチバナ。

実体でもＤＲでも交流のある唯一の友人だ。

同じ黒髪黒目の日本人なのに、どうしてここまで違うのかと世の中に絶望したくなる容姿をしている。若干背がオレより高かったとしても、わけの分からない敗北感は拭えない。

伸吾は友人だが、あまり実体で会いたくない人物でもあった。特に外出した場合、引きこもりのダサなオレと伸吾の組み合わせはよっぽど奇異に見えるらしく、通行人にちらちらと観察される。非常

に居心地の悪い思いをするのだ。たとえ部屋の中であっても、ジクジクとオレのコンプレックスを刺激する素敵な存在である。

が、今日は別だ。サーバ二台の初期化及び環境のリストアは思っていたより大作業になったので、ちゃっかり呼び出して手伝わせていたりする。

「いや、あれはどこにも繋げてないからいいよ」

「そうか」

部屋の隅に置いてある２０年もののマシンがブーンと音を立てていた。今の情報処理には耐えられない低スペック、ネットワークにも繋いでおらず、滅多に触ることもないため、本当に電力を消費するだけの存在だ。だけど、なぜかオレは捨てられないままでいた。このファンの音が馴染んでしまっているのかもしれない。

「しかし、エマノンにハックされるとはな。冗談だよな」

「何度目だよこの会話」

オレはうんざりしながらも、スクリーンに向かって手を動かす。インストール前の設定が面倒くさい。

「それにさ、エマノンなら初期化しても無駄じゃね？　どうせまた入られるだろうし」

「うるさい」

やるのとやらないのとでは、心情的にまったく違う。

「エマノンなら、案外ファームまで汚染されてるかもな」

ピタっとオレの動作が止まる。それを横目に、伸吾がケラケラと笑い出した。完全に状況を楽しんでいる。ひくっとオレの唇が引きつった。

ファームとは、サーバのハードとＯＳをつなぐコアな部分だ。ＢＩＯＳといったほうがわかりやすいかもしれない。サーバの電源を入れたときに最初に動くプログラム。通常ＯＳからアクセスされることはない。大丈夫だ、大丈夫……。

「やっぱ無駄すぎる。やめよーぜ」

「口より手を動かせよ」

オレは一旦スクリーンを消した。設定が終わり、インストールに入った。終わるのは大体３０分後だ。それからが大変なんだが。
「で、伸吾はどこまでできたんだよ」
伸吾のスクリーンを覗いて、オレは思わず頭を殴った。
「いて」
「何見てんだよ」
伸吾がスクリーンをすり抜けて膝をつく。画面に表示されていたのは、生々しい秋山このみと甲斐綾乃のキスシーンだった。
「まさか、誠にこんな趣味があるとはね」
「ねーよ！」
頭をさすりながら立ち上がる姿も十分様になる。
「人のプライバシー何探ってんだよ！」
「普通やるだろ？　エロ画像エロ動画エロゲーム。いくつ隠し持っているのか気になる」
「持ってないよ……」
頭を抱える。伸吾の頭の構造がさっぱり理解できない。ロリショタペド御用達のいかがわしい風俗店『アリスの国』を経営しているのだ。ぶっ飛んでいるのは最初から分かっていたが。
「これはなーんだ？」
でかでかと表示された写真に、オレは吹き出した。秋山このみと甲斐綾乃のさらに濃厚なシーンがスクリーンに映し出されている。
「百合好きなら言ってくれたらよかったのに。紹介するよ、ソレ系の店」
「結構です」
深く深く深く、ため息をつく。
「この写真は、オレのＤＲ仲間とドラッグプログラム被害者だよ」
「どういうことだ？」
「カインってやつと、カインに関係を強要していた少女だよ」
そういえば、まだ伸吾には話していなかったなと思い出す。簡単にことの顛末を説明した。

「へぇ。俺が眠っている間にそんなことが、ね」
半目でオレを見る伸吾。微妙に笑っているところに寒気を感じる。
ひとまず作業を中断し、オレの狭っくるしい部屋に無理やり置かれたボロボロのソファに座っていた。伸吾の堂々とした寛ぎ方は、勝手知ったるなんとやら状態だ。
「ハルカの指導でくったくたに疲れてダウンした俺へ全く連絡もなく、起きてみたらすべてが終わっていました。もちろん報告はなし。ふ〜ん」
「ははは……」
オレにはもう、苦笑いしかでない。
「でも解せないな。エマノンがなぜ誠のサーバに侵入したか」
「だよなぁ。オレ秋山このみと甲斐綾乃の情報しか持ってないし」
「しか、持っていないんだ?」
ぱっと、オレの正面にスクリーンが映し出された。
「しか、ねぇ」
オレは目を逸らした。完全に忘れていた。
目の前のスクリーンには、ハルヒコから頂戴した警察の機密資料が盛りだくさんに表示されている。
きっとエマノンも見ただろうな。セキュリティ事故だ。懲戒処分だ。ハルヒコ、すまん!
心の中でハルヒコに陳謝しつつ、微妙に伸吾から距離をとっていく。なぜ美形の笑顔はこんなにも怖いのだろうか。
「で、これ、何?」
「ドラッグプログラムの被害者と思われる人たちの資料だよ。どうやら被害者は関西圏に多いそうだ。正直、もう手を引こうと思っていたから、ルネにでもあげるつもりだったんだけど」
「へぇ」
ちらっと伸吾を盗み見ると、興味が機密資料に移ったようだった。
実はそれもタチバナを引き合いにだして手にいれた情報なんだけど

な。
「すごいな。これ。良かったじゃないか、エマノンの目的が分かって」
「は？」
オレはよっぽど変な顔をしていたんだと思う。伸吾が整った眉をしかめ、眼鏡をぐいっと押した。
「この資料がほしかったんだろ、エマノンは」
「……」
反芻する。エマノンはものすごく見当外れのことを言っていた。
「確か……、『君のドラッグプログラムが欲しいんだよ』とか何とか」
「持っているのか」
「なわけない」
「だよな」
伸吾が黙り込んだので、オレはゆっくりとカフェオレをいただく。ブラックコーヒー派だが、カフェオレは別だ。牛乳：コーヒー＝２：１にして、生クリームを少しだけ滴らすのがコツだ。砂糖は多めに。
「なぁ」
伸吾はシリアスな顔をしている。
「なんだ？」
「どうしてエマノンは誠がドラッグプログラムを持っていると思ったんだ？　昨日の今日ってタイミングで、だ」　深夜０時を越えているが、寝るまでが９月１８日だ。オレは頷いた。
「そうすると、甲斐綾乃との邂逅で、誠が思っている以上のことがあったんじゃないか？」

脳裏にカインの姿を思い描く。強い意志を持った眼、揺れる三つ編み、時間切れだと言った小さな唇、華奢な肩、ゆっくりと倒れゆく姿。

オレははっと立ち上がった。カフェオレが零れて手にかかるが、気にしてはいられなかった。

「新大久保、私書箱、２０３、そう言っていた」

「それだ！」

お前マヌケすぎるよ、と伸吾に頭を叩かれた。痛い……。

「私書箱、なぁ」

頭をさすりながら、オレは一人ごちた。

「郵便局はたしか１０時からだったか」

時計は午前2時１０分前を指していた。

「受け取りに何がいるんだっけ？」

オレはスクリーンに郵便局の地図を映し出し、経路を指で追っていた。大久保駅から徒歩5分といったところか。ふいに、奇妙に生ぬるい視線に気づいて、伸吾へ顔を向けた。

「何？」

伸吾は半眼でオレを見ていた。わずかに唇を歪めていて、明らかに嘲った顔だ。

「何だよ」

はぁ～、と盛大なため息。伸吾の一挙一動が大げさだと感じるのはオレだけだろうか。

「なぁ、誠。お前それが郵便局の私書箱だと思っているのか？」

「それ以外ないだろ」

「……誠は変なところで世間知らずだよな」

「どこがだよ」

ロリショタペド専用の風俗店をやっている人間に世間を問われるとは。いや、あの変態な店こそが、裏の世間なのだろうか。はっきりと分かるほどに顔を顰めると、伸吾は困ったように笑った。

「あのな、誠、私書箱ってのは何だと思う？」
「バカにしてるのか？」
「そう、箱だよ、箱」
「答えてねぇよ」
「その箱の中にはプライバシー満載の手紙なんかが入っているわけだ。もちろん不特定多数の人間に勝手に見られるのはまずい。だから鍵がついているのだよ」
「それぐらい知ってるよ」
「では質問だ。その私書箱の鍵は、誰が持っている？」
伸吾は得意気に眼鏡を押し上げた。
「簡単なことだよ、ワトソン君。それは、郵便局の私書箱ではないというわけさ」
「……」
伸吾は優雅にコーヒーを飲んで一息ついた。オレも合わせてぬるくなったカフェオレを口に含む。たかが私書箱ながら、わけの分からない敗北感を感じる。私書箱どころか、家のポストすら不要だと思っている寂しいオレの実状を知っているわけでもあるまいに。
「なんてな」
にやり、と伸吾が唇を歪めた。
「は？」
伸吾がオレの目の前にスクリーンを出した。どこかの業者のサイトらしい。でかでかと「私書箱２０３」と書かれてある。
「俺もよく利用するんだよな。におさん。ほら、子供たちにプレゼント送る常連さんとかいるんだけどな」
「へぇ」
「おかしみたいな愛らしいのから、アレな道具まで色々あるし。俺は自宅に絶対送りつけてほしくないから、使ってるんだ」
「アレな道具って」
「いるか？」
「いらん！」

残念そうな顔はしないでほしい。オレは触手だけでお腹いっぱいなんだ。

オレはサイトにざっと目を通した。具体的な写真はなく、ポップなメイド姿のイラストがある。「２０３ってなぁに？」という文字に触れてみたら、くるくるとメイドが動き始めた。

「へぇ、ギアを鍵にしているんだ？」

「おもしろいだろ」

私書箱２０３はＤＲ間のやりとりに特化したサービスらしい。実体を知らなくても、相手のギアのシリアルさえ分かれば、手紙や荷物の送付が可能になる。ギアを持って受取は近所の２０３へ行き、手続きを踏めば良い。ギアのシリアルは、ギアごとにユニークな数字を振られているので、実質ＤＲの身分証明書みたいなものだ。

「まぁ、におさんは転送サービスも行ってくれるし、結構有名だよ」

ＤＲの普及とともに急速に広まったサービスで、登場してここ１年ぐらいなのだそうだ。オレが知らなくても無理ない話、のはずだ……。

オレは軽く伸びをして、ソファから立ち上がった。

「２４時間営業でも、この時間だと交通がないしな」

「朝までのんびりゲームするか」

「いや、サーバの作業に戻るぞ。戻ってください」

伸吾を促し、やっとのことでサーバの前まで移動させる。

「仕方ないな。ほら」

伸吾がでかでかとサーバの操作ターミナルをスクリーンに映し出したところで、彼の手首がぴこぴこ光っていることに気づいた。

「なぁ、それ光ってない？」

「え？」

シルバーのブレスレッド型チューナーだ。

「悪い、電話だ」

「うん」

伸吾がチューナーに触れ、通話回線を開く。オレは伸吾に変わっ

てサーバのスクリーンに触れた。まったく何も終わっていない状態だ。軽くため息が出た。

「なんだって？　ああ。わかった。……。すぐにいく」

伸吾は声を抑えていたが、それでも漏れ聞こえてきた。短いやりとりだった。

「悪い、誠。店の方で急用だ。帰るよ」

秀麗な伸吾の顔が歪んでいて、焦りが浮かんでいた。いつも伸吾が飄々とした姿しか知らなかったで、オレは単純に驚いた。

「ああ。助かった。ありがとう」

実際は何も助かっていないのだが。

「どうなったか、連絡はちゃんと入れろよな」

伸吾が拳を差し出したので、オレも自分の拳を合わせた。

去り際に、伸吾がぼそっと耳打ちした。

「そうそう、におさんな、大久保のはすごいぞ」

「は？」

２０８８年９月１９日（日）　その２

「は？」

オレは今、大久保にいる。におさんこと私書箱２０３は意外にも駅に隣接していた。一歩店内に踏み入れて、伸吾の言葉がやっと脳内に染み込んだ。――大久保のはすごいぞ。

うん、すごい。

「は～い、いらっしゃい」

出迎えたのは、見事な巨乳だ。豊満で、服からはち切れんばかりの大きさだ。視線が胸に直撃だ。ギギギと無理矢理頭を押し上げて、やっと店員を見た。オレは顔に熱が集まるのを感じた。妖艶という言葉がピッタリの女性だった。にっこりと微笑んだ紅色の唇の側にほくろがある。ダークブラウンの豊かな髪が胸元でカールしていた。彼女は、サイトと同じメイドの恰好だった。

「あ、あの」

「どうなさいました？」

少し上目遣いでオレを覗き込む。

一気に熱が加速する。オレは慌てて視線を逸らせた。

「はじめてなんですけど」

「使い方は簡単ですよ。ギアをこちらのパネルにかざしてみてくださいな。かぱって隣の扉が開いて、お客様のお品がでてきます」

メイド、もとい店員が示した先に、ギア読み取り用のパネルがあった。私書箱はオレが想像していたような、郵便局にずらっと並べられている箱の山ではなく、５０センチ四方の扉が一つ。品物をどこからか選択して持ってくる仕組みらしい。

「ああ」

オレはショルダーバッグを漁った。健全な男子なんだ、うつむき加減に胸を盗み見るのは仕方がない。手探りでゴツイ馴染みの物体を掴み出す。世間様よりもかなりデカイものは、言わずもがなのオ

レのギアだ。
「まぁ」
彼女は口に手をあて、驚愕のポーズをとる。そして、すっと目が細くなった。
確かにオレのギアは旧型でボロボロだが、そこまで驚かれても困る。すぐにギアをパネルにかざし、仕舞おうとしたところで、彼女にギアを撫でられた。
「？！」
危うくギアを落としかけた。
「な、なんですか？」
「ずいぶん珍しいギアですね」
「ま、まぁ」
顔が熱くなる。なんだこれは。フラグか、フラグなのか。だったらジーンズにパーカーなんてイケテナイ格好でなくて、伸吾にコーディネーション頼むんだった。
店員の目がキラッと輝いた。
「まさか、これはッ。今は無きｔｏｄｏｒｏ社製ＧＲ００１Ｂ！２０７５年１月販売、同年５月ｔｏｄｏｒｏ社の買収により販売中止。世界で３００台も売れなかったという伝説の！」
「え」
ギアオタクかよ。ギアを奪い取ろうとする手を必死にかわし、ギアをバッグへ入れた。バッグはオレの背へ避難だ。
「初めて実体見た。感激！」
右手を両手でぎゅうっと握られた。やわらかいというより、爪が食い込んで痛い。痛い……？
「ななな生身！」
「ええ、実体ですよ。改めまして、店長のニオです」
「ニオ……、さん？」
彼女は満面の笑みを浮かべた。
「よろしくお願いいたしますね、『ルネのおもりヴァン』」

「……」
「だって、このギアを現役で使ってるって、『ルネのおもりヴァン』しか思い当たりませんもん。化石級のギアですよ。そして生『ルネのおもりヴァン』！　もちろん、これはルネちゃんにも内緒です。ヴァンの実体見たって言ったら、あの子嫉妬でうちのサーバ全部こわしてしまうわ」
「はぁ……」
脱力した。あんなに火照っていた顔も、今は平温に逆戻りだ。
「ルネの知り合いですか」
「彼女、お得意さんなので」
ああ、そうですか。大体ニオさんがわかった。ルネの知り合いってだけで、濃い。どろどろのヘドロのような濃度だ。あまり深く関わらない方がいいと、本能がささやいた。
タイミングよく私書箱の扉が開く。
「お荷物ですよ」
箱の中には、どこにもありそうな白地の封筒が一つ。軽かった。なぞると、指先に僅かな凹凸があって硬かった。あて先にはバーコードがついている。おそらくこれがアバターの何らかの情報なんだろう。裏を見ると、筆記体で「Ｃａｉｎ」だ。
オレは何か悪いものでも見つかってしまったかのように、そさくさとそれをバッグに入れる。
アバター情報で荷物が送れるのはいいな、と思う。ただ、送る相手がいないわけだが……。
「ありがとう」
ニオさんはにこやかに笑った。オレは手を上げて、入り口へ向かう。
「いえ～。またご利用をお待ちしていますよ、『ルネのお守りヴァン』」
手を振るニオさんの動作に合わせて乳がぷるんと揺れた。

さて、オレの手のひらにあるのは、間違いなく面倒ごとだ。

新宿駅南口にある、人魚がロゴマークのコーヒーショップで、エスプレッソ、チョコチップをトッピングした抹茶フラペチーノを一口啜った。ほんのりとした抹茶とエスプレッソの苦さがない交ぜになって、独特の風味がある。チョコチップの微かな触感がいい。普段は絶対に近寄らないこの店で、豪華にトッピングまで追加したのは、後でその料金をカツアゲ、もとい、払っていただこうという魂胆があったからだ。

朝5時という時間だからか、店内は疎らだ。おしゃれなオークのテーブルには封筒の残骸がある。そして、右手にチップだ。

封筒を手にとった時点で、半ば中身は予想していた。数日前にセインに見せられたあの量産型チップと外観が同じものが1枚、ギアから中身にアクセスしてみれば、何かのバイナリが入っていた。

「何でオレに送るかな」

ドラッグプログラムだった。円満ハッピーエンドで終わったドラマなのに、泥沼のトンデモ展開第2シーズン開幕、そんな気分になる。

15分ばかり大久保から新宿まで歩きつつ、このチップの処分方法を考えていたが、結局サイバー課を呼び出した。ルネに渡すと喜びそうだが、今回はセインとカインの命がかかっている。さっさと解析してもらって、副作用をどうにかしてもらいたいという気持ちが強かった。

「そろそろかな」

抹茶フラペチーノ・トールは約半分消費、時間にして10分弱。

「いらっしゃいませ」

ドアが開かれるとともに、明るい女性の声が店内に響いた。

２０８８年９月１９日（日）　その３

入店したのは奇妙な二人組みだった。店内すべての視線が扉に集中する。店員すらマニュアルのスマイルを忘れ、呆然と見入っていた。

まず視線がいったのは、最初に入ってきた男だった。一言でいうと、ダサい。ガリガリの身体にぶかぶかのＴシャツを着ている。アニメ『ぷんすかぷりんせす』のやえちゃん（？）がプリントされたものだ。その下は着古したジーンズ。リュック、瓶底眼鏡、鉢巻、襟下まで無造作に伸びた髪。どこぞの古典漫画に描かれるオタクルックスそのままだった。

しかし、それだけならこれほどまでに注目されなかっただろう。正確に言えば、視線は男の隣に注がれていた。

彼女は、すっと細長い脚を差し出した。歩く姿はモデルのように優雅で、生きている芸術そのものだ。わずかに頬にかかった髪を流れる動作で振り払う。さらさらとした姫カットが彼女の頬を掠めた。美眉、長い睫、紅の唇は艶やかだった。ピンクのジャケットに白のワンピースが、彼女の艶やかな髪と白雪のような肌を映えさせていた。黒のブーツがよいアクセントになっている。オレはストローから抹茶フラペチーノを垂らしながら呆然としていた。

「あの、ＡＲと普通のエスプレッソ一つずつ」

鈴のような声が店内に響いた。

「は、はいッ！」

我に返った店員は勢いよく返事し、エスプレッソ用のカップを震える手で用意した。

彼女は見事なアルカイックスマイルを店員に向けた後、店内を見回した。オレもやっと正気になり、慌てて目を逸らす。今日はこんなことばかりだ。橘と違って女性に縁がないからな。手持ち無沙汰にストローを回した。

「あの」
オレの前に影ができる。顔を上げると、先ほどの美人が立っていた。
「え……？」
「ここ、よろしいですか？」
彼女は小首を傾げた。両手には湯気の立っているエスプレッソがある。店は空席がほとんどだった。オレは顔に熱が集まるのを感じながら、必死に頭を回した。
「ま、ま、ま」
吃るな、オレ。
「待ち合わせをしているので」
直視できなくて、思わず顔を逸らす。
彼女はくすっと笑った。その瞬間空気に花が咲いたような錯覚がする。
「初心なんですね。ヴァン、でよろしかったですか？」
「え、あ、はい」
彼女とオタクは、オレの向かいの赤いソファに座った。ハルヒコにはこの店の赤いソファに座っていると伝えていたから、おそらくこのものすごい美人とオタクがサイバー課の仲間なのだろう。今更ながら、彼女の細い手首に巻かれているギアから、彼女がＤＲなのだと知る。隣のオタクは実体だった。
「は、はじめまして」
どうしても俯いてしまうのは仕方がない。半分に減った抹茶フラペチーノを見ることで、暴走している心臓を落ち着けようとする。
「ふふ、まだわからないんですか？」
「え？」
わかるもなにも。
「どちらさまでしたっけ」
オレはこんな極上の美人とお知り合いになったことがない。
「実体のヴァンはかわいらしいですね。私、ハルカですよ」

「は？」
思わず彼女を見た。ハルカ、ハルカ……。ハルカ＝ハルヒコ。
「ハルヒコぉ？！」
指をさして叫んでしまった。衝撃のあまり、ソファからも立ち上がっている。ありえない。ありえないだろう。確かに、言われてみるとハルカと同じアバターだ。オレのコーディネートした姿格好だ。だが、あのゴリラみたいな雰囲気をかもし出していた人物と中が同じだとは到底思えない。ハルヒコが入ったハルカと目の前の彼女を並べると、美女と野獣という言葉がそっくり当てはまるだろう。それぐらいに違う。詐欺だ。中の人は嘘をついているに違いない。
一瞬で駆け巡った思考に追い討ちをかけるように、指さした右手をオタクにぎゅっとつかまれた。
「ぼかぁ感動しました！　あのガサツな上司を1日でここまで仕上げることができるなんて」
「え、あの」
瓶底眼鏡の奥から、キラキラしたものが見える。
「機械オンチで全然使えない無能上司だから、嫌がらせに変なアバター与えてみたんスが、まさかここまで扱うようになるなんて、正直ぼかぁ驚きました。鈴木エーナ以来の傑作ッス。聞けばヴァンさんのおかげっていうじゃないスか。マジ感動ッス」
オレはまじまじとハルカを見た。笑みを浮かべてエスプレッソを飲む。
「私、あの時はじめて地獄はこの世にもあるのだと思いましたわ」
タチバナ、お前一体どうやったら一日でこんなになるんだよ！
「ははは」
熱は急降下、顔を引き攣らせながら、どすんとソファに座った。目の前の女優もかくやというほどの女性中身男性、何故かオレを尊敬の眼差しで見るオタク。頭がうまく現実を受け入れてくれない。
落ち着くために、ずずずっと抹茶フラペチーノを啜った。オーケイ。

「改めて、ぼかぁサイバー課の本村弘美っス。よろしくス。『ルネのお守りヴァン』スよね」
「ああ」
ここでも出た。『ルネのお守りヴァン』。脱力ついでに訊いておく。
「その、有名なのか？　ルネは」
「知らないんスか？！」
極端に驚かれても困る。
「有名な情報屋っスよ。知らないものはないってほど情報持ってるんスが、気まぐれな上に情報量が高くて有名ス。扱いづらいので、情報を買うのも一苦労なんスよ。だから、いつも一緒にいるヴァンさんは奇異と羨望の意味を込めて『ルネのお守り』って言われてるんス。まさかヴァンさんが知らないなんて思わなかった」
情報屋だったのか。情報屋なんて漫画や映画の世界だけの話だと思っていた。どこかどす黒さを滲ませたあの幼女が情報屋、確かに言われるとしっくりくるが。
「はぁ」
ため息一つついて、オレは改めて自己紹介をした。
「ヴァンこと柳楽誠、よろしく」
必然的に本村弘美にフォーカスするのは、隣のハルカが目に毒だからだ。ハルヒコとわかっていても一挙一動にどぎまぎする自分が憎い。
「柳楽、誠！」
なんなんだよ。
「まさか柳楽誠さんスか！　あの『触手クラブ』の！」
ぶはっとハルカがエスプレッソを拭いた。一瞬自が出たぞ。
本村弘美は額をトン、と叩いた。
「ヴァンさんが柳楽誠さんだったんスか～。はぁ。うれしいなぁ。ぼかぁ『密林少女』大好きなんスよ。あ、『密林少女』は押収したＨＤＤにあったんスけどね。感動のあまりデータ買っちゃいました。

あのビデオに出てくる触手、リアルすぎて。ぴたぴたと触手が少女の頬に当たるたび、少女が思いっきり顔を顰めるんスよね。粘液が臭そうで、いやいやって首を振るしぐさがたまらないっス。あれ絶対演技じゃないス。聞けば、『触手クラブ』で撮られたっていうじゃないスか。ぼかぁもうすっかり触手に魅入られまして、サイバー課チラつかせながら何度もオーナーに問い詰めてやっと作成者教えてもらったンすよ。それぐらい大ファンっス」

「……」

一気に巻くしたくられてよくわからなかったが、オレの作った触手でエロビデオ、だと？

「もちろん上司にも見せたんスよ。だけど、あの芸術がわからなかったのか、見事に吐いたっス。理解できないスなぁ。あのいぼいぼがじわじわと少女に巻きつきながらも、肝心な部分はじらすのがなかなか赴きぶかくて」

「そろそろ、本題に入りませんか」

心なしか、ハルカの顔色が青かった。口元を両手で押さえている。何かを察したのか、本村弘美は顔を歪めた。

「ＤＲになってまで吐かないでくださいよ」

「ううう」

ハルカが落ち着くのを待って、オレは二人にチップを差し出した。ハルカはすっとチップへ手を差し出すが、すり抜ける。この辺はまだ実体の癖が抜けていないんだろうな。代わりに本村弘美がチップを持って、まじまじと見た。

「ほぅ、もしかしてこれがドラッグプログラムっスか」

「ああ、多分な。中にはバイナリが入っていた」

「チップ自体は確かにドラッグプログラムで使われてるものと同一スね。どうやって手に入れたんスか」

テーブルの上の抹茶フラペチーノはすっかりなくなっていた。エスプレッソも空だ。オレは背中をソファに沈めて、ぼんやりとチッ

プを見た。
「甲斐綾乃、いるだろ」
「あの子」ハルカがつぶやいた。本村弘美も知っているのか、頷く。
「彼女、カインがオレ宛に送ってきた。倒れる直前に教えてくれた。どういう意図なのかまでは訊けなかったが……。自分でもヤバいと思ったんだろうな」
ハルカが顔を伏せた。長い睫が震える。
「甲斐綾乃は今も昏睡状態だ。病院側でも調査をしているが、原因は不明。ただ、血中のストレス成分の値が高いとは言っていました」
「そうか」
ガラス越しに朝日が差し込んできた。チップが金に反射する。
「サイバー課が抑えているドラッグプログラム使用者で生存しているのは、二宮聖、甲斐綾乃の二名のみ。うち、二宮聖は甲斐綾乃秋山このみ経由で入手との証言があるっス。となると、実際に鍵を握っているのは甲斐綾乃っスね」
「早く目覚めてくれるといいのですが」
「そうだな」
まぁ、と本村弘美が口を開いた。
「こいつが手に入ったからには、ぼくが何とかするっスよ。バリバリ解析してヴァンさんの友人救うっス」
チップを握り締めた拳で胸を叩く。オレは深く頷いた。
そろそろお開きだ。軽く意思を確認して、オレは立ち上がった。
「ああ、そうだ」
ハルカと本村弘美を見る。
「そのドラッグプログラム、エマノンも狙ってるぞ。オレのサーバにハッキングしやがったからな」
ゲッと呻きを漏らした本村弘美と、眉を吊り上げたハルカ。
「だ、大丈夫ス。ぼくのセキュリティは万全スよ」
「頼んだ」
ひらひらと手を振って、オレは店を後にした。

そうして、オレは抹茶フラペチーノ、エスプレッソ、チョコチップトッピングの料金を回収し忘れたのである。

２０８８年９月１９日（日）　その４

帰宅すると、午前7時を回っていた。普段はとっくに寝ている時間なのでかなり眠い。のろのろとカバンからギアを取り出して、まだオフラインなのに気づいた。一通りサーバの初期化・復旧は終わっているので、ネットにつないでみる。

「何だよ」

サーバには大量の伸吾からの着信が残っていた。

『メッセージ聞いたらすぐに店に来てくれ』

伸吾らしからぬ焦りを含んだ声に、オレは慌ててギアを腕に取り付ける。座標は『アリスの国』へ。カチ、とギアを捻った。

「やぁ、やっと来てくれたね」

目を開けると、オレの声が聞こえた。ぽっかりとした空間に、オレだけが浮いている。座標はＮＵＬＬを差していた。

「またお前かよ、エマノン」

眼前に、オレのアバターが現れた。やはり手首にギアはない。橘が言っていた通り、こいつにセキュリティは無意味だ。ギリッと奥歯を噛んだ。

「あの着信の山は偽装か？」

くすっとエマノンは笑った。普段のオレの姿の分、強烈は違和感が襲う。

「タチバナシンゴからの電話のことかな。それなら本物だよ」

「今すぐここから出せよ」

「やだよ」

「お前ッ」

掴み掛かろうとしたオレの腕をすり抜け、エマノンはオレの頭一個分上に立つ。

「意外に短気なんだね」

誰だってこの状況なら怒るだろう。恐らく、だ。こいつはＤＲではない。昨日はオレのアバターに騙されたが、眼前のエマノンは単なるＡＲだ。ギアがないのは隠しているからではないし、今現在そんな技術は存在しない。ＤＲのように表情動作が巧みだが、そういう風に見せられないわけではなかったことに気づいた。こいつはどこか別の場所でニマニマと無様なオレを観察している。オレはエマノンに危害を加えることさえできないのだ。

「残念だが、ドラッグプログラムはサイバー課に渡した」

冷静になれ、と両手を握り締めながらエマノンを見上げた。あいつは目を細めて、愉快なものを見るかのように唇を吊り上げた。

「知ってるよ」

「じゃあ一体なんだよ。もうオレに用はないだろ」

「あるよ、これ」

エマノンが右手をオレに差し出した。握られた拳をゆっくりと開く。

「……、ドラッグプログラム」

右手の上に浮いたそれは、先ほどオレがサイバー課に渡したものだった。

「今、本村弘美のギアから直接アクセスしているんだ。バカだよね、あんなセキュリティ何度でも突破できるのに」

クスクスと嗤う声が耳障りだった。エマノンを睨むが、何もできないオレを嘲笑うかのように、ますます唇を歪める。

「彼らに解析は無理だよ。これ、逆コンパイルしてみたけど、プログラムが入れ子状になっていて、表面をなぞっただけでは、何がなんなのかわからない仕組みになっているんだ。で、プログラムを実行すると、中のプログラムが壊れてしまうようになってる」

「お前にはできるのかよ、スクリップトキディ」

幼稚なハッカー。厭味を込めると、一瞬だけ眉を顰めた。

「心外だな、柳楽誠がそう思ってるなんて。まぁ、いいけどね。キディかどうかはこれから判断してもらうから」

嫌な予感がして、一歩、オレは後ずさった。
「これを解析するには実際にプログラムを走らせてみて、動きをトレースするしかないんだよ。だから、」
オマエデタメサセテモラウヨ。
逃げようとするが、手遅れだった。一瞬の出来事だ。チップが光が生まれ、オレに向かってきた。光はオレの胸を貫いた。
瞬間、強烈な快楽、扇情、アドレナリンが脳内に迸る。抗うことはできなかった。「ははは」自然と笑い声が毀れた。懐かしい感じだ。閃光がいくつも走り、そのたびに何かから開放された気分になる。余計な自分がどんどん削ぎ落とされていくのがわかった。今までの陰鬱なオレが生まれ変わったかのように、世界が煌いた。
ドラッグプログラムが何だよ、エマノンが何だよ。どうだっていいじゃないか。本当におもしろおかしい。楽しい、愉しい。グニャリと目の前のオレが融けていった。ああ、こいつはエマノンだったか。どうでもいい。何もない空間というのがツボに入って、オレはくすくすと笑った。ＮＵＬＬだって？　単純に作りこむのが面倒だっただけだろ、キディ。結局、あいつは自分で試すのが怖くてオレにしかけたんだろう？　強がりかよ。ああ、たのしい。しかし、何だってオレはあんなにがんばってたんだろうなぁ？　しあわせなんてこんなに簡単に手に入るじゃないか。しあわせ？　しあわせだ。しあわせってなんだ。このじょうたいのことだ。おれはみたされているのか？　みたされている。どうしてだ？　せいんもかいんもたすけをもとめているのに？　あいつらがまきこんだんだ、かんけいない。しんごがよんでいたのにいいのか？　あいつはひとりでどうにかするさ。いままでもそうだったしこれからもそうだった。なあ、ほうっておいてくれよ、おれはいまこんなにたのしいんだよ。おにいさんのことは？　おにいさんだって？

2088年9月19日（日）　その5

目の前には、あれほど憧れていたギアがあった。世界ではじめて発売された小型ギアだ。今までのヘルメット接続とは違い、手首に巻くタイプのものだった。重さも1キロ程度と軽量化されている。ブラックのメタリック加工が格好よくて、ARの世界が存外楽しくて、秘かに憧れていたものだった。それから、接続用のサーバも。ギアの情報を処理するには多少苦しいが、それでも当時にしては十分モンスターマシンだった。一般的な家庭用サーバとは違っていささか大きい。それが逆に気に入っていた。

オレは喜びと困惑を綯い交ぜにした表情で、見上げた。

「あげるよ」

兄は優しく微笑みながら、オレに言った。だけど、これには彼の夢が詰まっていたんじゃないのか？

「必要なくなったんだ」

いいの？　本当に？

恐る恐る伸ばした手に、ギアが馴染んだ。ずっしりとした重さは、これが現実なんだと教える。喜びが爆発した。差し出された憧れに、オレは兄がどんな心境かなんて考えようともしなかった。嬉々として、もらったばかりのギアをぎこちない手つきで腕に巻く。接続したわけでもないのに、どきどきと胸が高鳴った。

どう？

ギアをつけた左腕を兄へ掲げた。満面の笑みで、オレは兄を見た。

兄から「顔」が消え去っていた。だから、この時の兄の表情を知らない。

懐かしい夢を見た。オレはゆっくりと身体を起こした。ずるり、

とギアを外すと、手首に薄っすらとギアの跡が残っている。ズキズキと痛む頭をしばらく抑えて時間を確認した。17：32、10時間近く眠っていたわけだ。

のろのろとオレは一回り大きいサーバへ向かった。15年以上前は最新鋭の、今ではすっかり時代遅れの宝物だ。筐体を撫でる。僅かに熱を持っていた。ブーン、とファンの回る音が聞こえた。

オレが完全に活動を再開したのは、それから1時間以上経ってのことだった。簡単にシャワーを浴びて、カップラーメンを啜った。眠っていた頭が覚醒していくにつれ、腹の熱が高くなる。ずしんとした錘を一つ一つためていくように、昨日の記憶が怒りに変わっていった。ギアを再びつけるころには、完全に頭にきていた。オレは喧嘩とは全くの無縁だが、今エマノンがここにいたら迷わず殴りかかるだろう。

エマノン、それ以上に自分だ。不甲斐ないの一言につきる。強烈な自己嫌悪、理性を剥ぎ取られた剥き出しのオレはおぞましく醜かった。

親指が折れるほどギュッと手を握りしめた。

結局、ドラッグプログラムと関わりを持ってしまった。一回でも使用すれば危険というカインの言がある。そして、おそらくエマノンはそれを知っていた。ドラッグプログラムを試すだけなら、オレ以外でもよかったはずだ。それなのに、オレを狙ってきたってことは、なんらかの意図があるはずだ。少なくともあのチップをばら撒いているヤツを捕まえるまで、この騒動から抜け出すことはできないだろう。最低の気分だ。いいよ、最後まで関わってやるよ、エマノン。

「クソッタレ」ギアを捻った。

降り立った先は『アリスの国』の正面だ。エマノンの空間に飛ぶことはないだろうと思っていたが、いざここにこれてほっとした。北海道では日が落ちるのが早いのか、すでに星が輝いていた。しかし、いつもの賑やかさはない。夜は輝いているはずの趣味の悪いイルミネーションは沈黙していた。

「タチバナ、遅くなった」

客はいないようだった。タチバナは受付に座って、いくつものスクリーンを睨んでいた。柔和な表情が素敵なはずのアバターは、今日は荒々しい空気を醸しだしていた。

「ああ、遅すぎだ」

タチバナがオレを認めて、ため息をついた。

「何があった？」

「客にドラッグプログラムでラリったやつがいた。それで、リカちゃんが襲われた」

「嘘だろ」

タチバナが無言でスクリーンを寄越した。画面には店内の様子が映っている。受付の先にある待合室で、先生風の男が一人立っていた。少女が入ってきて、簡単に会釈した瞬間、急に男が動いた。ぬっと両手を差し出して、少女のうなじを押さえる。そのまま両手で首を絞めた。首がもがれるのではないかと思うほどに、男の指が細い首に食い込んでいた。音が出ない分、不気味な動画だ。３０秒ほどで少女の姿が消え、男が暴れ始めた。

「向こうの部屋、見てみろよ」

散々だった。待合室はファンシーにおもちゃや人形が置かれていたが、見事に壊され、人形は四肢が散らばっている。床に、男の唾液と思われるものが付着していた。

「最悪だろ」

タチバナが顔を歪め、困ったように笑った。

「リカちゃんは？」

「実体は無事だが、精神的にかなりキテる。ＤＲ化が怖いそうだ。

それ以上に客が。もしかしたら辞めるかもな」
「そうか……」
オレもリカちゃんとは面識があった。某子供の人形を彷彿とさせるような、前髪ぱっつんの茶髪ロングで、目がくりっとして大きい。小学5年生の設定なので、店でも年は高い方だった。明るくて、しっかりとしていた印象がある。実体は元男娼の37歳。
リカちゃんは間違いなくプロだった。DRはある程度五感を調整できる。こんな仕事をしていると、痛覚や触覚をほとんど感じないようにする者も少なくないが、逆にリカちゃんは感覚を増幅していると聞いたことがある。「自分も感じて、その分お返しをするの」って優しい目で言っていた。
だから、首を絞められたときの痛み、感触を必要以上に受けてしまっただろう。DR化は強制終了も可能だが、リカちゃんにはする時間さえ与えられなかった。
「誠、俺は正直怒っている。あのクソヤロウにも、ドラッグプログラムばら撒いたヤツもな」
「ああ」
「だから協力してくれよ」
協力もなにも、オレはとっくに渦中にいた。

2088年9月20日（月）　その1

大久保はクズみたいな街だ。至る所がヘドロのようにドロドロに澱んでいる。少し街を歩くだけで、怪しげな外人が普通のサラリーマンと話しているところが見られる。金と小袋の交換、一瞬の出来事だ。隣を見れば、胸を大きく開いた服の外人女性が数人で集まっている。スカートの丈も極端に短い。一人の中年男性が彼女立ちに声をかける。一人の女性が腰に手を回され、夜の闇へと消え去った。飛び交う理解不能な言語、雑言、悪徳を当たり前に繰り広げているこの街を、オレは気に入っていた。奇抜なＤＲが集まってくるので、どこか遊園地みたいな雰囲気が好きだった。

だが、今はそれがひどく不快だ。ぞわりとした空気がオレの肌を撫で付ける。足元を照らすネオンでさえ、薄汚い。イライラしながらオレはゴミの散乱した道を歩いた。

「3日ぶりだね」

「ああ」

オレは息を整えて、ルネの部屋へ踏み入れた。今日のルネは珍しく三つ編みで、良家のお嬢様のように清楚だ。部屋もアンティーク調の家具で、絨毯は赤と金の見事な品物である。実体だったら絶対に見ることができないだろう豪華なソファに、オレは遠慮なく背を預けた。

「疲れてるね」

トテトテとした足音が聞こえて、頭にふわりとした感触があった。ルネの小さな手がオレの頭を撫で付ける。オレは目を閉じて、ゆっくりと口を開いた。

「なぁ、ドラッグプログラムの価値を教えてくれないか？」

ルネの手が止まった。

「それはどっちのルネに訊いてる？」

「情報屋」

頭からルネの手が離れた。オレの正面に立ち、ピンク色の瞳がまっすぐにオレを見つめた。どこかでこうなるのではないかと思っていた。情報屋、それを利用して後は行くところまで行くしかない。少なくとも、ルネとの関係が変わってしまったとしても、だ。

「ヴァンは……」

ルネの目が段々細くなり、そして。

「なんでそうなるんだよ」

ルネはいつも以上にオレに抱きついている。幼女のどこにこんな力があるのかと不思議なくらいに怪力だ。

「ルネ、痛いから離れろ」

「やだよ～。もう、ヴァン律儀すぎるよ～。素直に友人だろ、教えろみたいなオレ様態度で利用しちゃえばいいのに、わざわざルネのお客様になろうだなんて、１００ペタ年早いよ」

ぐりぐりとルネの頭をオレの胸に押し付けて、なんだかこそばゆい。

「わー、照れてるし。かわいいねぇ。大体さ、今一番ドラッグプログラムに関わってるのはヴァンだし、ルネはそれを利用している立場なんだよ。警察の内部資料なんかもちゃっかりいただいちゃったりしてるのに、ルネはそれくらいの情報出し惜しみしないよ」

いつも通りのルネだ。

「それに、ルネはちゃんとヴァンの友達だよ」

訂正、少しだけかわいい。

耳まで真っ赤になったルネの頭を、オレはぽんと叩いた。

「あー……、友達として教えてください」

顔をあげたルネに、満面の笑みが浮かんでいた。

「それで、どうしてヴァンはそんな情報が知りたいの？」

落ち着いたところで、のんびりとルネが訊く。オレは相変わらず

のソファだが、ルネが抱っこをせがんだので、彼女はオレの膝の上だ。この幼女は本当にスキンシップが激しい。

「ああ、ルネとサイバー課はともかく、エマノンまでドラッグプログラムを狙ってるって相当だろ。一応世間での価値ってのを知っておこうと思ってな。なんたってオレのところまでハックするぐらいだからな」

ルネに微笑みかけた顔の筋肉が固まった。

「へぇえ」

普段よりも一オクターブ低い声が、響いた。

「ルネ、初耳だな、それ。エマノン、ルネのヴァンに手出したのか。ヴァンもおとなしく手出されちゃったのか。ちょっとダサくて間抜けだけど、聞き捨てならないなぁ」

「あの……」

どす黒いオーラを身にまとい、ルネは極上の微笑みでオレに言った。

「詳しく教えてもらえないかな」

洗いざらいにこれまでの経緯を吐かされた。カインの邂逅やら、エマノンハッキング事件やら、サイバー課に抹茶フラペチーノの代金を回収し忘れたことまで、だ。この2日間はなかなかヘビィだったと改めて実感する。話した内容にプラスして、ハルカ改造物語とアリスの国リカちゃん事件まであったのだ。そんな疲労たっぷりのオレに、ルネは幼女には似合わない真剣な表情で、ボソッとつぶやいた。ヴァンはやっぱり間抜けだな、と。

「まぁ、エマノンがヴァンに手出したのもわかるんだけどね。だって、あいつ、ルネを警戒してるんだもん。ルネに手出さずに情報欲しいっていったら、やっぱりまずヴァンを狙うよね」

仕方ない子を見るように、ルネは首を振った。

「やっぱりお前の所為かよ」

オレは昨日までルネが情報屋だってことすら知らなかったんだ。ガードのしようがないだろ。リカちゃん事件の後、タチバナに話し

たら盛大に憐れみの顔で同情されたのにもムカついたが、これはこれでくるものがある。
「ルネもさすがにヴァンに手出されちゃ、黙ってないけどね。お仕置きしなきゃ」
小さな手がポキポキと鳴った。恐ろしい……。
「でも、ヴァン完全に巻き込まれちゃったね。もうどっぷり浸かっちゃいなよ、こっちの世界に」
なんて、ルネの背後に闇の世界が広がっているんだが。
「遠慮蒙る」

「じゃあ、本題に入ろうか」
ルネの手のひらに浮かんだのは、例のチップのＡＲだ。
「ドラッグプログラム。これが市場でどんな価値かってのは容易に想像がつくよね」
オレは頷いた。麻薬にとって代わるものだ。製造はプログラムのコピーという驚くほど簡単なもので、麻薬と同様、いや、それ以上の快楽を得られる。さらに付け加えるならば、少なくとも使用するのは違法ではないということだ。これ一つで世界の麻薬取引の常識を変えてしまう、まさに爆弾だ。
「でもそれだけじゃない。ヴァンはそれが知りたいんだよね。これがどういうものか」
チップはルネの手のひらの上でゆっくりと回転している。
「ヴァン、想像してみて」
実体だった時はどういう刺激を受け取っているか。
ルネは己れの目を指さした。
「視覚」
耳。
「聴覚」
鼻。
「嗅覚」

口。
「味覚」
そして、そっとオレの頬に触れた。
「触覚」
実体の刺激は全てこの五感によるものだ。ＤＲもそれは変わらない。
「ヴァン、快楽なんて刺激はこの世には存在しないんだよ。快楽物質は五感の刺激を通して生成されるんだ」
ランナーズ・ハイみたいな。
「麻薬は、その快楽物質に似たものだったり、快楽物質が消滅しないように長続きさせるためのものだよ。だけど、それはこの世界ではできない。この世界は直接実体に作用しないようになってる」
あくまでも、ＡＲは架空の世界だった。たとえば、風邪薬をＡＲ化してＤＲになってから風邪薬を飲んだとしても、風邪は治ることはない。ただ苦味が口内に広がるだけだ。麻薬も同じことで、ＡＲ化した白い粉から快楽を得ることはない。さすがにどんな味がするのかは知らないが。
ルネの言わんとすることが、オレにも十分理解できた。
「つまり、五感以外の情報をＤＲでは受け取ることができない」
こくん、とルネは頷いた。
「ルネは以前説明したね。ギアは実体とＤＲの変換器だって。刺激をパルスに変えて脳に送るんだって。だけどね、快楽なんて刺激は存在しないから変換できない。ギアが直接脳で快楽物質を発生させるなんてこと、できないんだよ」
そう、ドラッグプログラムは「不可能な技術」なのだ。

2088年9月20日（月）　その2

ドラッグプログラムを体験してまず分かったのは、これが興奮系のものだということだった。

麻薬には大きく分けて二種類ある。興奮剤と沈静剤だ。

コカインは前者で、服用すると精神が高揚し、自分がスーパーマンになったかのように、何事もへっちゃらになる。少しの刺激で頭の中がスパークするようなハッピーさだ。大久保に出回っている覚醒剤もこちらに分類される。

一方、後者の代表はヘロインだ。ヘロインをキメると、穏やかな気分になれる。全てがどうでもよくなって、世の中が全てハッピーに見えてくる。アヘン戦争時代の、チャイナ服を着た女性が木のベッドに横たわって、長いパイプを気怠く吸っている姿を想像してほしい。アヘンはヘロインの元で（さらに言えばアヘンは芥子から精製される）、まさにそれが穏やかハッピーだ。

実際にオレは麻薬をやったことがないが、聞くかぎりそんな違いがあるらしい。あの時、恐ろしいほどにハイテンションだった。この世界の王様にでもなったような、気分の高揚だ。

「それが巷で流行ってる暴力事件と関係あるかわからないけどな」

そう、オレは締めくくった。

ルネは腕を組んで、部屋をぐるぐる歩く。動きに合わせて三つ編みがテンポよく揺れている。オレはそれを、相変わらずソファの上から目で追っかける。ルネは飄々としている印象しかなかったから、これほどまでに真剣なルネは珍しかった。部屋の中を歩くのは、考え事をしている時の癖なのかもしれない。

「カインが言ったんだよね。一回でも使ったら駄目だって」

「ああ」

「ヴァンの話を聞いてると、ドラッグプログラムはよほどの『純正』だよ。新宿や大久保で流れてるドラッグは、ほんの少し気分が良く

なったり、疲れをかんじなくなったりする程度のものなんだ。だけど、ヴァンの意識が飛ぶぐらいの快楽なんて、かなり強いものだよ。ルネの予想からすると、カインの発作は」

「フラッシュバック」オレは言った。

麻薬依存者は、麻薬を摂取していない状態でも、急にトリップしたり、幻覚を見たりする症状に襲われることがある。それをフラッシュバックと呼んだ。

「うん。突然人が狂ったように暴れたり、トリップしたり。フラッシュバックだと考えればしっくりくるよ」

ただね、とルネは続けた。

「ドラッグプログラムで取沙汰されているのは、暴力性なんだよね。ルネたちが見たあのトリッパーも、めちゃくちゃ凶暴だった。確かにフラッシュバックって、キモチイイだけじゃなくて、怖い幻覚を見ることもあって、恐怖を追い払おうと暴れることもある。だけど、ルネの調べたところ、決まって出てくるのは暴力事件なんだよ」

ルネが足を止めて、手をさっとふった。部屋中にスクリーンが数多く浮かび上がる。どれも、暴力を振るう場面だった。中には自傷もある。

「カインの例からすると、現実世界でもフラッシュバックは起きる。でも、ＤＲの場合は暴力性を伴う」

「ああ」

オレは剥き出しになった感情を思い出した。

「そういえば、トリップ中に感じたのは怒りだった。オレは単純にエマノンにムカついていただけだと思っていたが」

「……」

「何か、ギアと関係があるのかな……。さすがに時間がかかりそうだね」

お手上げ状態とでもいうようにルネは首を振った。瞬間にスクリーンが消えて、今日の豪勢な部屋に戻った。

「まぁ、いいや。ルネにはセイン、カイン、なんとヴァンまでドラ

ッグプログラム使用者仲間がいるからね～」
「なんだよ、その薬中ご一行みたいな言い方」
「ＤＲでフラッシュバックがきたら、ルネがギアのシグナルまでしっかりトレースできるし、安心だね」
「不安しか残らない」
急に機嫌のよくなったルネに抱きつかれ、さらにはモルモット扱いされ、オレの身体はますますソファに沈んだ。

ああ、そういえば。
「今日来た目的はもう一つあったんだ」
「何？」
トランプタワーで遊びはじめたルネをぼんやりと眺めていたら、不意にアリスの国を思い出した。
「ドラッグプログラムをどうやって入手するのか、一つだけわかったよ」
ルネがぱっと起き上がった。五段まで積み重なったトランプタワーがペシャリとつぶれた。
「教えて！」
彼女は気にならないようだった。タタタと駆け寄ってオレに抱きつく。オレは苦笑して、あらかじめ用意しておいたデータをルネに渡した。
「これ……」
「ドラッグプログラムの使用者から直接訊いたらしい。オレも人づてだけどな」
リカちゃん事件の加害者、阿部一郎、２２歳。慎吾は、オレが行った時にはもうやるだけのことはやっていた。元々アリスの国では実体の顧客情報を抑えている。その上で、実体を脅しあげたらしい。大方、ブラックリストに登録するとか言ったのだろう。
ブラックリストは組織や個人が持っているデータベースで、そこ

に登録するとブラックリスト所有者から登録された人間は認識されなくなり、逆に登録された側もブラックリスト所有者が見えなくなる。現実世界を投影しているＡＲでも、やはり殺人が起こったりするのだが、法的に裁けるわけではない。オレたちはそうやって「嫌な奴」を自分の世界から消していくのだ。慎吾の言うブラックリストはいわゆる業界のもので、それに登録されたら一切風俗店に行けなくなる。

ルネに手渡したのは、阿部一郎の尋問内容だ。かなり詳細に記述されているもので、阿部一郎の必死さが窺われる。ちなみに、タチバナはにこやかな顔で「それでも登録したけどな」と宣っていた。

「奈良県」

「ああ」

ドラッグプログラムを入手したのはつい最近、９月１５日だ。私書箱２０３にドラッグプログラムのチップが５０個、１ケース分送られてきたらしい。すでにドラッグプログラムの噂を知っていたから試してみた、というのが口述の内容だ。

「私書箱、２０３……？」

ルネがはっとしたように顔をあげた。瞬間にスクリーンが５つ、恐ろしい早さで指を操る。いつもにも増して何をしているのかさっぱりな状態で、オレはいつものごとく呆然と眺めた。

「こいつも、こいつも……、全部同じプロバイダだ」

「それが？」

「さらに、ＩＰアドレスが」

「？」

ルネが腕を下ろして、ぎゅっと小さい手を握った。

「ヴァン、私書箱２０３が悪用されてる！」

２０８８年９月２０日（月）　その３

　ＩＰアドレスは１６バイトで表されるインターネットの接続先だ。よく例えとして「ネット上の住所」と言われるが、実は少し違う。ＩＰアドレスは一般的にプロバイダに接続要求を出し、その時にＩＰアドレスが個別に割り振られる。いわゆるＤＨＣＰ（Ｄｙｎａｍｉｃ　Ｈｏｓｔ　Ｃｏｎｆｉｇｕｒａｔｉｏｎ　Ｐｒｏｔｏｃｏｌ）という古典的な手法が、現在でもずっと使用されている状態だ。ＩＰアドレスはプロバイダへ接続（正確にはＩＰアドレス取得）要求を出す度に変わる。つまり、ＩＰアドレスとは使い捨ての連絡先みたいなものだ。もちろんＩＰアドレスを固定にすることも可能だが、一般ユーザはそんなことはしない。オレたちは意識しないままに連絡先を貰っては捨てる。

「ＩＰアドレスさえ分かれば、ギアのシリアルナンバーを取得することは十分可能だよ」

　結局はギアもインターネットに接続する必要がある。インターネットという媒体を通してＡＲの世界やＤＲは繋がっている。

「でも、におさんって、相手がどこに住んでいるかとか知ってないとダメだろ？」

　ルネが首を振った。

「ヴァンはあまり使ったことがないのかな。におさんは配送先の指定がない場合は、ギアのシリアルナンバーから接続しているＩＰアドレスを取得するんだよ。そこで、接続先のアクセスポイントに一番近いお店へ運ぶの」

　もっともプロキシ使ってたら荷物なんか届かないけどね。ルネが吐き捨てるようにつぶやいた。

　たまたまカインが大久保のにおさんを指定したから、ドラッグプログラムはその店にあったが、もしなかった場合は他の店に行ってた可能性が高い。

私書箱２０３システムはＩＰアドレスとギアのシリアルナンバーだけで個人を識別しているというわけか。

「一つのＩＰアドレスの、その時の使用者にドラッグプログラムを送っていた？」

「うん。少なくともこのデータから導き出される答えはそうだよ」

「スパムみたいな？」

ルネは小さく首を振った。三つ編みも揺れる。

「少し、違うね。スパムは不特定多数の人にメールを送りつけるけど、基本的にメールは無料だよ。大量にメールを送りつけて誰か釣れたらいいや、的なものだよ。におさんは有料サービスだし、チップにもお金がかかる。それに、ＩＰアドレスを狙い撃ちになんかしない。」

熟考するように小さな手を顎に当て、ルネはスクリーンを見た。

「ねぇ、ヴァン。もし仮に一ヶ月間今日までチップ５０枚を３０名に配ったとして、掛かる金額は大卒初任給の一ヶ月分くらいになる。それにさ、このドラッグプログラムは金をいくら払ってもいいって人がたくさんいるはずだよ。それをわざわざお金を出して配るって。それを特定のＩＰアドレスに」

ドラッグプログラムを不特定多数に送りつけたいわけではないはず、そう小さな唇が紡いだ。

「正直、結論を出すのはまだ早いと思う。だけど、あのＩＰアドレスの使用者の誰かにドラッグプログラムを送りつけたかったって考えるのが自然なんだ」

そのために私書箱２０３は利用された。

「ああ」

「それも、まだ送りたかった相手に届いていない可能性も高い」

リカちゃん事件の加害者、阿部一郎がドラッグプログラムを手にしたのは９月１５日だった。少なくともその日までに相手の目的は達せられていない。

一番最初にタチバナと作成したメモを思い出した。頭の中で内容

が埋まっていく。リカちゃん事件まで、オレはドラッグプログラムが売られている物とばかり思っていたが、そうではなかった。
「におさんが使われたのはルネとしても嫌な気がする。だけど、やっと手がかりが掴めたね」
振り返った幼女の顔に、やっと小悪魔のような表情が戻った。
「あとはルネの仕事。裏をとって確認するよ」
「了解」
お開きだった。ルネの頭を一撫ですると、擽ったそうにピンク色の目を細める。オレも満足してギアを捻った。

仕事の依頼が来ていた。午前2時、オレは盛大に顔を顰めてスクリーンに向き合っている。今すぐメールの存在を削除したい気分に駆られるが貯金残高が脳裏を掠めて思いとどまる。狙ったとしか考えられないこのタイミングにオレは唸るしかなかった。
触手クラブ・アマゾン支店、なるものを作るらしい。
すでに場所の手配済みで、要となる触手が大量に必要だそうだ。現在新宿にある触手クラブとは違い、アマゾンの植物をモチーフとした触手だとなかんとか。
それから、蟲。
メールを読み進めるに従って、眉間の皺がどんどん深くなる。
蟲、虫ではない、蟲だ。メールにそう書かれてある。蟲ってなんだよ、どんなプレイだよ。こちらと年齢イコール彼女なしの人間だぞ。どんどん変な知識だけが植え付けられていくようでげんなりする。
さすがに何度か取引をしている間柄なだけあって、社長は丁寧にイメージ図までつけてくれていたマングローブの根や、樹に絡まっている蔦が少女を襲うシーンに思わず目を背ける。
「オレの周りって何でこんなんばっかだよ」
慎吾しかり、社長しかり、ニューフェイス・サイバー課本村弘美、

お前もだ。
　そういえば作った触手でエロビデオ撮ったんだよな。『密林少女』、だったっけか。
「あー……」
　ガリガリと頭を掻く。生憎と断るという選択肢はないんだよな。メールに提示された金額は貴重なオレの軍資金だ。前金だけで3ヶ月は生きていけるだろう。しぶしぶと、承諾と打ち合わせのお伺いメールを相手に投げた。
「そういえば」
　他にメールは着ていなかった。エマノンがハッキングした9月18日のメールだけは一切削除されていて見ることができない。だが、あれほど大量にメールを送りつけてきたセインから、この2日間何も音沙汰がなかった。やっと、カインが倒れた後一切連絡がとれていないことに気づく。
「お嬢様だから絞られでもしたか」
　それにしても、この沈黙は不気味だった。あれほどカインのことを知りたがっていたというのに……。
　胸に不安を抱きながら、ルネの部屋で会えないかというメールをセインに出した。

２０８８年９月２２日（水）　その１

はじめて触れたＡＲはプラスチックのように硬かった。見た目は完全にりんごなのに、りんごの瑞々しさや弾力、香りがまったく感じられない。精巧に作られたディスプレイ用の置物のようだ。

「お兄ちゃん、これ、りんご？」

ＡＲスキャンで作成されたりんごを、兄の映るスクリーンへ向ける。

『誠、それはまだ情報が添加されてないんだよ。ほら、こうしてみるとどうだ？』

手にあるりんごの偽物が、今まさにりんごへと変わった。

「りんごになった！」

『そのＡＲに情報を加えたんだよ。まだスキャンじゃその辺は対応していないからね、自分で情報を作って加えてあげないといけないんだ』

苦笑しながら兄が言った。まだＤＲはそんなに普及していない。ギアは高額で、それもヘルメット型が大半だ。新宿へ言っても見かけるか見かけないかというレアさだ。だから、技術も進化していない。

『誠が大きくなる頃には一般的になってるといいけどね』

オレは兄の言葉をあまり理解していなかった。ただただ手の中のＡＲに魅せられている。

「もしかしてこれって食べれる？」

『多分味はしないよ』

即答されて凹むオレ。街には色々なＡＲが溢れていたが、ほとんどが見た目だけのものだった。硬い花びらをつまみながら、なんとなく訊いてみる。

「ねぇ、ＡＲってさ、オレにも作れるかな」

『簡単だよ。誠、一緒に何か作ろうか』

「うん。もしかしてさ、現実にないものでもいい？　例えば、あの空飛ぶスケボーとか、つちのことか！」
　目を輝かせるオレに、兄まで笑みが零れる。
『できるよ。最初にスケボーからやるか』
　本当に作れるのか。古典映画で大好きだった空飛ぶスケボーが。未来に飛ばされた主人公がスケボーに乗って逃げるシーンが思い浮かぶ。最高に格好いい。
「ＡＲってすごい！」

「すごい……」
　あの頃とはまったく同じ台詞を、真逆の気持ちでつぶやく。
　机の上で悍ましく蟲が這いずり回っていた。蜘蛛、ゴキブリ、ムカデ、小さい玉虫等が蠢いている。ガサガサという音までリアルでまさに気色が悪い。
「うん、柳楽君、いい感じね。動画まで送っておいてよかったわ。アルゴリズムがすばらしいわね」
「はぁ」
　正午ぴったり、オレは触手クラブに来ていた。今日は仕事なのでいつもの少年ではなく青年のアバターを使っている。オンとオフの切り替えのようなものだ。顧客要望を聞いてイメージを合わせるための打ち合わせだ。事前にサンプルもいくつか作成して意見をきく。
　目の前の七緒さんはこの触手クラブのオーナー兼社長だった。眼鏡にきっちり髪を纏めていてスーツ、まさにキャリアウーマンというに相応しい姿だが、如何せん、シチュエーションが残念でならない。周りには触手、目の前には蟲、それをうっとりと頬を染めて眺めている。
「この蟲たちの動きを、ＤＲの穴があれば何度も出入りさせる感じに持ってくれれば完璧ね。その辺の動きを修正してほしいわ。もちろんたまに皮膚を噛んだりとか、そういうものも組み込んでね」
「はぁ」

「触手の方は、そうね。もうちょっと堅めで擦りすぎると皮膚が傷つくぐらいざらついた感がほしいわね。こっちの方は……」
「はぁ」
ため息なのか相槌なのか自分でももう分からない。
「あとね、最後にもう一つ！　ラフレシアみたいなえぐいお花のベッドがほしいのよ。ほら、今まで触手クラブって両手両足縛られて宙に浮かされてってのがメインでしょ。そうじゃなくて、花の中に押さえつけられて花弁で擽られるって素敵じゃない？　それも悪臭がするのに、そんな中で快楽の渦に飲み込まれる。うん、いい！」
「はぁ」
オレの思考回路は迷路になってしまったようだ。まったく話についていけない。七緒さんはどんどん一人でフィーバーしていく。頬も赤くて何故か息も荒い。いつものことだ。会話は録音してあるので、後で何度も聞けばいい話なのだが、オレとしてはもうお腹いっぱい状態で勘弁してほしいのである。
「じゃあ、私からはそれぐらい。相変わらずの腕で安心しているわ」
「ドウモアリガトウゴザイマス」
全くもって褒められた気がしない。オレの無自覚な変態度がレベルアップしたってことなのか。七緒さんは一通り満足してくれたようなので、気色悪いものはさっさと消すと、彼女は若干悲しそうに顔を歪めた。
「また一週間後ぐらいに持ってきますよ。その時詳細な部分を修正しましょう」
早くこの場を去りたくてオレは立ち上がった。
「ええ、また一週間後ね」
空飛ぶスケボーの感動も触手クラブで地に堕ちる。七緒さんは嫌いではないが、永久にこの手の仕事はやりたくない。

この2日間、セインからも慎吾からも特に連絡はなかった。さっさと終わらせたい仕事なだけあって、オレもひたすらARを作成し

ていた。その集大成が本日七緒さんに披露したあれだ。作っている最中も何度も目を逸らしたし、気力も削がれたが今日の比ではなかった。ゲッソリと気力を吸い取られたような気分だが、まったくルネと会えていない状態なのでそろそろ顔を出しておくか、と少年姿で大久保に降り立った。情報もそれなりに集まっている頃だろう。

空は薄闇なのに、大久保は相変わらず賑わしかった。駅の一角にいつもにはない人だかりができている。

「なんだ？」

外野は歓声だ。楚々とした様子で憂いた息をつけば、群集が唸った。それだけではなく、ハルカの隣にはまた一段と目立つアバターがいた。『ぷんすかプリンセス』の主人公やえちゃんの敵役で人気の高いヤヒロだ。服装はヤヒロの着ている黒色マントに悪徳スーツ。それだけならまだコスプレだけですんだ。しかし、このヤヒロのアバター、アニメ顔を見事に再現している。アバター作成は難易度が高いも関わらず、ここまでそっくりとなると、作った人は相当な技術の持ち主だろう。ＵＵＩＤの偏差をあそこまで消してしまえるとは。

賞賛の後、なんとなく回れ右のオレ。

「げ」

ハルカだ。楚々とした様子で憂いた息をつけば、群集が唸った。それだけではなく、ハルカの隣にはまた一段と目立つアバターがいた。『ぷんすかプリンセス』の主人公やえちゃんの敵役で人気の高いヤヒロだ。服装はヤヒロの着ている黒色マントに悪徳スーツ。それだけならまだコスプレだけですんだ。しかし、このヤヒロのアバター、アニメ顔を見事に再現している。アバター作成は難易度が高いも関わらず、ここまでそっくりとなると、作った人は相当な技術の持ち主だろう。ＵＵＩＤの偏差をあそこまで消してしまえるとは。

賞賛の後、なんとなく回れ右のオレ。

「あ、ヴァンさん」

周囲の視線が一気にオレへ突き刺した。ギギギとオレは振り返って顔を引き攣らせる。ハルカが愛らしく走り寄って、そっとオレの右手を両手で握った。態とらしく視線は斜め下で、目を潤ませて。

空気が痛い。どう考えたって、ここで手を振り払えるわけないだろう。おいタチバナ、演技の指導にも程度があるってのを知った方がいい。だから、オレは次の台詞にも頷くしかなかった。

「ヴァンさん。お願いです。ルネさんに会わせていただけませんか？」

２０８８年９月２２日（水）　その２

しかし、突然サイバー課を引き連れてルネの部屋に行くのは抵抗がある。元々ドラッグプログラムに関わる前までは、ルネとは外で合流するのが普通だった。オレはしおらしく涙を拭くハルカを前に諦観の念を込めて言った。

「それじゃ、公園で待つか」

「それには及ばないよ」

ふわりと幼女の天使が舞い降りた。

「ルネ」

空間から現れた彼女は、とん、と赤い靴を地面についた。髪がゆっくりと垂れる。今日は胸の下から大きく膨らんだ白いワンピースを着ていて、胸元の赤いリボンが良いアクセントになっている。ルネは周囲を見渡して、やおら首を傾けた。

「ヴァン。それにサイバー課、ここは目立つから移動しようか」

確かにオレたちは一種の見せ物と化している。外面だけは清楚で可憐な美少女ハルカ、かたやアニメ顔のヤヒロ、それにふわふわ幼女のルネだ。オレだけ平凡で場違いだが、ばっちりとこの濃い三人に囲まれている所為で他人のふりはできない。

すぐに座標が送られてくる。お馴染みとなったルネの部屋だった。今日はどこかの基地のイメージなのか、今となっては見るのも珍しい大きなディスプレイが部屋一面に張られている。ボタンがいっぱいにならんだ大きなパネルがこれ見よがしに設置されていて、古典に出てくるＳｃｉ－Ｆｉのようだ。

「それで」

部屋の主はオレの膝に座って脚をぶらぶらさせている。いつものことなので為すがままとなっていたが、ハルカは『ペド！』と顔を引き攣らせている。いや、中身はオッサンだからな、ハルカ。

「要件は何かな、サイバー課三島晴彦、本村弘美」

ヤヒロはアニメのきりっとしたイメージをどこやら、へらりとした表情で頭を掻いた。
「いやぁ、さすが情報屋ルネっスね。今日のために作ったアバター、普段とは違うギア、回線を使ってるのに一発っスか。まぁ、あの上司は一発かもしれませんが、ぼかぁ正体不明の悪役ヤヒロって自信があったんスよ」
ルネが半眼でにやりと笑った。
「本村弘美が毎週かかさず『ぷんすかプリンセス』を三回見て、さらに先週やえちゃんの半裸抱き枕をネットで予約したのくらい知ってるよ。そういえば独自のクローラーで『ぷんすかプリンセス』の１８禁を毎日探してるよね。サイバー課でどっぷり『ぷんすかプリンセス』に嵌ってるのは本村弘美だけだもん。分かるよ」
「ははは。ルネさん何かおすすめのサイト教えてくださいよ。ぼかぁやえちゃんが触手に捕まってあそこをぐじゃぐ……ッてぇ」
苦笑いするヤヒロの尻にハルカの蹴りがヒットした。
「自重してください、この変態」全くだ。
ハルカはそのままルネとオレの前に立つ。
「改めてルネさんの情報調査に参加という形をとれないでしょうか。実は先日手に入れた唯一のドラッグプログラムは不甲斐ない部下の所為でエマノンに奪われました。恥ずかしながら万全を尽くしてもサイバー課ではエマノンの攻撃を防ぐことはできません。こちらの情報は全てエマノンには筒抜けになっていて、つまりはネットへ流れ放題となっています」
屈辱を抑え込むかのようにハルカは唇を噛んだ。インターネット犯罪を取り締まるべき組織がハッカー一人に屈している、その現実を晴彦は受け入れた。
「それに、私たちがルネさんに協力するとなれば、ヴァンさんを通さなくてもスムーズな情報交換が可能です。メリットは大きいのではないかと」
これまでのヘタレっぷりからは想像できないほど、ハルカは屹然

とした様子で告げた。真っ直ぐとルネに対峙するその姿は然りながら戦乙女のようだった。おいタチバナ、これも演技指導効果かよ。
「なるほどね」
ルネはぴょこんとオレの膝から降り立った。両手を腰にあて、見定めるようにハルカを見回す。
「話はわかったよ。でもどうして今のタイミングなのかな？」
ハルカはオレがあの恥ずかしい二つ名「ルネのお守り」であることを知っていたが、直接協力を仰いだことがなかった。それが今、こうして協力を仰いでいる。その意味はつまり……。
「まぁ、いいや」
開きかけたハルカの口をルネが片手を挙げて制す。
「ルネが欲しいのはドラッグプログラムのソースコード、あるいはその仕組みに関する情報だよ。それを邪魔しないなら今回は協力してあげる」
「ヴァンさんにはもうお話してありますが、私たちの目的はドラッグプログラムの流出防止です。そのためにばら撒いている人間をとっ捕まえるつもりです。ルネさんの目的がドラッグプログラムの配布にないとするならば、私たちはドラッグプログラムの入手・解析を妨害するつもりもありません」
「合法っスしね」
ルネは小さな手をハルカへ差し出した。
「取引成立だね。今回はヴァン経由でサイバー課には色々お世話になっているし、特別」
ハルカはルネの手をしっかりと握った。

「まず、ルネの状況を言うね。サイバー課がどこまで把握しているのかは知らないけど、ドラッグプログラム配布方法の一部に私書箱２０３が使用されていた。それも、特定のＩＰアドレス使用者に対して、ね」
「一部？」

ルネは頷いた。腕を振ってオレたちの前にスクリーンを出す。私書箱２０３やドラッグプログラム死亡者の情報が一面に表示されている。

「あの後、あらためてカインのＩＰアドレスを調べたら、まったく別のプロバイダを使用してたの。つまり、ルネが把握できている範囲で、カインだけはにおさん以外でドラッグプログラムを手に入れた可能性が高いってことだよ」

「そうか」

「このＩＰアドレス自体は１２年前からプロバイダ、ウエストジャパンネットが買い取って使ってる。それまでは個人所有で使ってたみたい」

でもそこから先は手詰まりなんだ、ルネが唇を尖らせた。

「早めに見積もって２０８８年６月からのログを採取して解析しているんだけど、どれも利用者は一般の域を越えない。このＩＰアドレス使用者全てに送られているわけでもなくて、完全にランダムで送付者を決めているみたいなんだ。これまでのデータから共通性は見出せないの」

２日前から大した進展はなし、か。

「で、ハルカとヤヒロは何を掴んだんだ？」

何かわかったからこそ、こうしてルネを訪ねた。ハルカとヤヒロは目配せをした。

「ギアを身につけたまま死亡するって初めてのケースを見つけたんスよ」

「どういうこと？」

ドラッグプログラムによる死の特徴として、大抵発見された死骸はギアを身につけている。ＤＲ化したまま死亡したのだとオレは想像していた。

しかし、今更調べなくとも、ドラッグプログラムによる死亡が初めて検出されたのは２０８８年９月２日だった。それは以前ルネと一緒に見た警察の内部資料からも明らかだ。ルネも小首を傾げてハ

ルカとヤヒロを見る。
　ヤヒロはオレとルネの前にスクリーンを出した。
「実は改めて調査して分かったことなんスけど、ギアをつけたまま――ＤＲで死亡ってのは２０８８年以前に一件だけあったんスよ。これがその時の調書と死亡検案書っス。当時は単純に心臓発作として片付けられたみたいで、詳しい検死はされてないっスね。もちろんこれがドラッグプログラムと関係あるのかないのかすら、わからないっスけど」
　ピンク色の瞳にスクリーンが点滅する。
「２０７７年？」十一年前……。
「そうです。今となってはそんな昔のことを調べるのは難しい、だからこそルネさん、情報屋の力が必要です」
　十一年前といえば、やっと一般向けの小型ギアが販売されはじめた頃だ。まだヘルメット型のギアをつけたＤＲが圧倒的に多かった時代だった。スクリーンの調書にも、ヘルメット型のギアを被った遺体が映っている。顔の代わりにすっぽりと黒光りするヘルメットが頭部にあり、うつ伏せの状態で床に寝っ転がっている身体。スーツだったが、スラックスから排泄物が流れ出ていた。
「死亡推定日２０７７年２月２８日、同年３月２日発見。奈良国際大学准教授、山本一樹。享年３７歳」
「当時の記録では、山本一樹はＤＲとギアの研究をしていました。奈良国際大学理数科物理心理学科山本研究室は当時ｔｕｚ社の顧問にもなっています。いわゆるスポンサーですね。ｔｕｚ社は有名なギアのメーカーです。単なる偶然なのかもしれませんが、ルネさんの意見が伺いたいです」
「山本一樹、まさか」
　驚愕の表情を浮かべながらルネはスクリーンを引き寄せて、素早くスクロールした。同じく左手は別の端末を呼び出して片手でタイプする。
「京都大学卒業後ＭＩＴに入学、２０７０年９月に博士号取得後、

奈良国際大学の准教授に就任。研究のテーマはＡＲの感覚共有化について。『サイエンス』２０７１年５月号に論文が掲載されている。ルネが知らないはずがない、ＤＲ第一人者の一人だよ」

ぽかんと口を開けたハルカをルネは見上げた。

呆然としているオレたちに向かって、ルネが講釈を始めた。

ＡＲとは違い、ＤＲはここ２０年程度の歴史しかもたない。ＤＲという概念が提唱されたのは２０６８年だった。発表したＭＩＴのプロジェクトメンバにも山本一樹は所属していた。ＡＲが視覚の拡張というならば、他の四感についても拡張を行う、それがＤＲだ。２０６８年に発表されたギアはヘルメットすら技術維新だと思えるほどのもので、一番最初のギアは全身スーツ、さりながらアイアンメイデンのような装置だった。

ＤＲは発表後有名大学にて研究が進められるようになる。ＭＩＴを筆頭にＮＡＳＡ、スタンドフォード、オックスフォード、メルボルン、パリ、京都大学、筑波大学、そして奈良国際大学。

「この辺の経緯はインターネットの広がりと似ているね」

ＤＲ技術、ギアの発達とともに研究機関は増え、社会に浸透してきた。

「山本一樹は」

ルネは目を細めた。

「彼は当時こそ注目を浴びたけど、日本に帰国してからは輝かしい功績はあまりないよ。『サイエンス』の論文も院生時代のものを手直ししただけみたいだし。だからそれ以降はあまり業界にも出てこなかったみたい。彼の受け持っていた院生が自殺した時、少しだけ話題に上がったけどそれきりだった。ルネはてっきりまだ生きてて干されただけだと思ってたけど」

「山本一樹がドラッグプログラムの作成者ってことっスか？　ＤＲの研究者なんてバリッバリのストライクじゃないスか！」

「ん～、どうだろうね。だってこんなに昔に死んじゃってるしさ」

とぼけた声を出しながらも、小さな手は素早く動いていた。目紛るしく変わるスクリーンに、オレたちは立ち尽くしている。
「山本一樹の関係者の可能性が高いかな、て」
ショートでもしてしまったかのように、ぴたっとルネの手が止まった。
「ルネ？」
スクリーンを覗き込んでみるが、何がなんだかわからない。ハルカとヤヒロも同じようで、顔を見合わせた。だけど、ルネの震える声でオレたちも同じように動きを止めた。
「あのＩＰアドレスの１２年前以前の保持者と、山本一樹の自殺した院生、同じだ」
ルネの小さな唇が言葉を紡いだ。
「タララリョウ」

２０８８年９月２２日（水）　その３

タタラリョウ――ー多々良涼、２０７５年３月死亡、享年２４歳。

当然ながら一介の院生、それも死亡して十年以上経つ人間の情報はそんなに残ってなかった。判るのはお役所や学校に登録された情報だけだ。街に設置された監視カメラの映像も保管期限は長くないし、アクセス解析、各種ログもさすがに１０年間も保管したりはしない。現状、１０年以上前に死亡した一般人の情報など、ネットから得られるのは皆無と言ってもよかった。それでも、とルネは高速で指を動かすが、芳しい結果が得られないのか表情は固い。自殺する人間には死ぬ前に自分の痕跡を消してしまう人がいるが、多々良涼もその種のようだった。事故死や衝動的な自殺した人の場合、大概ブログやらＳＮＳやら、メールアカウントやらが放置されたまま残っている。５０年前が最終更新日の故人ＷＥＢサイトや３０年前のブログが未だに存在するのもそれだ。咄嗟にはわからなくとも、根気よく探せばＳＮＳのアカウントなり、ブログなりが出てきそうなものだが、とうとうルネは敗北宣言を出した。

「これ以上、何も出てこない」

呆然とオレたちはスクリーンを眺めた。ヴーンと唸る機械音がリアルだ。

何かの証明写真のようだった。全面に映し出された凡庸な青年の顔を見つめてハルカが唸る。

写真の隣には簡単なプロフィールがついている。履歴書のような素っ気ない来歴だ。

生年月日、出身の小学校、中学、高校、そして大学ーー。子供のころに父親を亡くしてからはずっと片親だったようだ。高校までは八王子に住んでおり、奈良国際大学へ進学後奈良へ親子共々引越している。大学生の時に母親が病死、文字通り天涯孤独の身の上となった。

「十一年前、か。思ったより根は深いかも」
「山本一樹だけでなく多々良涼についても洗う必要がありますね」
こくり、と幼女は頷いた。が、すぐさま首を振る。
「だけど、それはルネの仕事じゃない」
ピンク色の瞳はまっすぐサイバー課に向いた。
「多分、山本一樹のゼミ生、多々良涼の大学時代の同級生一覧ならすぐに出せるよ。でも、さすがに多々良涼の人間関係や自殺した理由まではアクセスできない。ルネは飽くまでもネットの海から拾うだけだから」
悔しそうに幼女は顔を歪める。
ヤヒロ顔の本村弘美が胸を叩いた。
「オーキードーキーっスよ。上司が聞き込みをするっス。うちの上司は鈍くさいから、それぐらいが適任スしね」
ハルカは渋々承諾する。
「私は今関西にいるので、関係者リストをいただければ早速今日から聞き込みに行きます。本村はサボらず私のサポートで来ること」
ぐぬぬぬぬ、と本村弘美が唸る。
「じゃあ、ルネはにおさん関係を追っかける。ヴァンは……、ヴァンは……？」
「……」
「……」
「……」
戦力外通知を受け取ってしまった。

「って感じだな」
苦味潰したようなオレの言葉に、タチバナはにやけた笑みで答えた。

「なるほどね。当たってる。あ、そこにフィギュア置いてくれよ。たえちゃんとノノちゃんのランドセル姿」

言われたとおりに『アリスの国』の子供たちを模したフィギュアのARを置いていく。たえちゃんは小学校1年生なので黄色い帽子もかぶせた。くまのぬいぐるみを両手に抱いて、健気なイメージで。微笑ましい登校をモチーフにフィギュアを配置する。タチバナは角度を変えて念入りに配置を確認した。イケメンが女の子のスカートを真剣に覗き込む姿はなんともシュールだ。

「おい、なんで紐パンだよ。ここは白でくまさんのアップリケだろうが」

「たえちゃんはあどけない顔をした淫乱っ子だろ。この前来たときは『ヴァンさ～ん、やっぱり服を脱いだらせくし～な下着なのって素敵ですよね。ぺたんな胸なのに、こ、こんなって感じが』とか言ってたぞ」

「はぁ？　たえちゃんは来客回数によってキャラを変えていくんだよ。1回目は何もしらない純粋な女の子、2回目は大人の男が怖い臆病な女の子、3回目は怖いけどちょっとだけ触れてほしいってかんじで。ここのフィギュアはまだ汚れを知らない処女たちなんだよ。ヴァン、まだまだ俺の店を理解していないな」

理解したくもない。

やっぱり一回は遊んどけよ、というタチバナの言葉を無視して、黙々とARを作っては設置していく。

明日から『アリスの国』は営業を再開する。さすがにいつまでも休んでいるわけにもいかないってこともあり、更にはどうせだから改装しようというタチバナの思いつきもあってオレは呼び出された。毎日触手と蟲に対峙しているよりは、はるかに健全だと思う、うん。

一通り改装が終わって、タチバナは満足そうに頷いた。並べた人形を見て、その中にリカちゃんがいないことに一抹の寂しさを覚える。

リカちゃんは、結局辞めるそうだ。やっぱりあの事件以来怖くて

ＤＲになることすらできない。そのかわり、ここで稼いだ資金で新宿二丁目に店を出すのだという。オレは決して遊びにいく予定はないが、前向きなリカちゃん（３７歳・♂）の話に安堵していた。

一息ついたところで、最初の話題に戻る。オレも大きなキリンのソファに腰掛け、思考を切り替える。目の前にスクリーンを出して流れる情報を眺めた。

「つまり、１０年以上前に自殺した院生宛にドラッグプログラムを送っていた可能性があるってことか」

俺の専門外だな、と　タチバナはつぶやいた。多少は裏につながりがあれど、大学関係となると門外漢だ。

「そうなるな」

オレも無力だが。

「おい、落ち込むなよ、誠。元々お前ルネの連絡係だろう。俺たちに出来ることをやればいいんだよ」

乱暴にタチバナがオレの髪をかき混ぜた。実体よりも柔らかい髪質だから、すぐにくしゃくしゃになる。

「本名呼ぶんじゃねーよ。うるせーよ。サイバー課けしかけたくせに、何言ってんだよ」

「やっぱわかったか？」

わかるだろ。ルネとサイバー課は別々で同じ事件を追っている。その仲介を果たしているのはオレだったが、それは慎吾しか知らない。サイバー課に持ちかけたのは当然こいつということになる。何故今頃になってとの疑問も浮かぶが、それはリカちゃん事件でこいつが本気になったからだ。

確かにオレを介してルネとやりとりをするのは煩わしいし、情報伝達が二度手間だ。慎吾なりにお土産があれば、ルネと交渉することができると考えたのだろう。そして見事に契機を作った。

「だけど、よく最初にＤＲで死んだ奴なんて発想が出てきたな」

「ああ」

あれなぁ、とタチバナはタレ目をさらに下げて、舌舐めずりをし

た。
「前例ないかなって調べてもらったら偶然出てきたんだ。やっぱ興味あるだろ、ＤＲで腹上死」
「ふッ……」
吹き出した。
タチバナ、お前本当に残念なイケメンだよ。

２０８８年９月２３日（木）　その１

不機嫌さを全面に押し出して、オレは低く唸る。
「で、お前は晴彦のお手伝いじゃなかったのか？」
本村弘美がへらっと笑った。服装はお馴染みの化石級オタルックだ。瓶底眼鏡は完全に目を覆い隠していて、得体の知れない存在感を醸し出す。
午前１０時、珍しく健全な時間に外出しているオレだ。もちろん実体で。
「そうス。これから任務開始っス」
別に敬礼しなくともいい。とにかく、だ。
「オレを大久保に呼び出す理由がわからないんだが……」
昼夜逆転がデフォルトなので、普段はすっかりお休み時間なわけである。眠い眼を擦って恨めしい気持ちを込めて本村弘美を睨んだ。
「まぁまぁ、どうせヴァンさんは暇なんスから、いいじゃないスか」
「……」
昨日はタチバナの改装に付き合ったり、触手のＡＲ作成に忙しかったんだよ、とはいわない。大体本村弘美の反応が想像できるからだ。今すぐにでも触手を見せろとか、新作！　とか、喚く姿が思い浮かぶ。
オレは緩やかに首を振ってため息をついた。
「で、どこにいくんだよ」
大久保駅前のターミナル、本村弘美はすぐさま隣を指差した。
「モチにおさんっス！」
本村弘美の鼻息は荒かった。

私書箱２０３ことにおさん大久保駅前店、一歩足を踏み入れてやっぱり飛び込んできたのは豊満な胸だった。
「いっらっしゃい～」

オレたちの姿を認めて笑顔を零すニオさんがいた。口元のほくろが相変わらず妖艶だ。

「ニオさん、おヒサっす」

「ヒロミちゃんにヴァンちゃん、こんにちわ」

オレは曖昧に頷いた。ニオさんが舐めるようにオレの全身を見回す。そっと本村弘美に身体を隠した。

「今日はギアを持ってきてない」

存外に冷やかしと宣言したわけだ。ニオさんは見る見るうちに悲しそうな表情に変わる。

「今日はぼくの付き添いっスよ。でもヴァンさんにギアを持ってくるようにいったらよかったスね。申し訳ないっス」

「ううん、いいの」

本当によかった。理由もなくあんなでかいギアを持ち運びたくはない。それにニオさんの目つきが獲物を狙う猛禽類のように鋭くなるし。身体を動かすたびに胸がゆっさゆっさと揺れるが、騙されるわけにはいかない。

「で、ヒロミちゃん、荷物取り出す？」

「いや、今日は仕事で来たんス」

ぼろぼろのジーンズから、本村弘美は手帳を取り出した。そして、ドラマでしか見たことない警察手帳ご開帳だ。黒皮にきんぴかの桜マークは何年たっても変わらない過去の遺物だ。面倒くさそうな本村弘美の動作に、警察の威厳は何も感じられなかった。

「ああ、ルネちゃんがいってた」

じゃあちょっと奥に行きましょうか、とニオさんはオレたちを促した。

私書箱２０３がドラッグプログラムの運搬に利用されていることをルネから聞いたらしい。誰がいつ荷物を預けたか、クレジット情報等は個人情報扱いとなるため、どうアプローチするか考えあぐねていたそうだ。最悪裏で取引というところにサイバー課が飛び込んできた。個人情報は開示請求があれば警察にデータを提供できる。

ルネはそれを本村弘美にお願いしたのだろう。
シンプルな白のテーブルにニオさんはコーヒーを三つ置いた。向かい合わせに座るが、大きい胸をテーブルの上に乗せる。
「は～。胸が大きいと肩凝るんですよね」
心底癒され中という雰囲気だ。オレには何もコメントできない。
「じゃぁニオさん、これは警察からの正式な要請ス」
「うん、一通り履歴を纏めてるから送りますよ」
８月からの、『特定のＩＰアドレス』を指定した取引情報だ。ニオさんはスクリーンを出して本村弘美に渡した。
「やっぱり関西から送信スね」
「送り元はバラバラだけど、ルネちゃんなら関連性もわかるんじゃないかな。大阪、奈良、京都。年齢は十代後半から二十代前半、性別は男性の方が多いかな」
「なるほど」
コーヒーを一口飲んだ。豆から引いたのか、香りがいい。酸味とコクが調和して、非常においしかった。
「例のＩＰアドレス指定の郵便物は、９月１８日からストップしてるんですよね。一週間に３０通、多い時だと１００は超えていたのに」
「何かあったんスかね」
私書箱２０３が関わっていると判明したのは９月２０日だ。それも、オレとルネの中だけの話で、ドラッグプログラムを送っているやつらが知るよしもない。
「さあな」
だが、ドラッグプログラムの送信元がわかるのもすぐだろう。手がかりは大分出揃ってきた。におさんのデータ、山本一樹、そして。
「多々良涼がやっぱキーっスかね」
コーヒーを飲み干した。ぽつんと漏らした本村弘美に苦笑して、席を立とうとしたところで手首を捕まれた。
「ニオさん？」

真っ赤なマニュキュアを塗った爪がわずかに食い込む。何故オレをつかむのか。視線を投げると、そこにはどこか呆然と、だけどほの暗い表情のニオさんがいた。
「今なんて？」
「多々良涼。どうしたんスか？」
ニオさんはまるで滑稽なものを見たかのように唇を不自然に歪めた。

彼女はどこか遠くを見ていた。軽快で妖艶な雰囲気は消え去って、漂っているのは倦怠感と、微かな寂寥感だ。オレたちは改めてニオさんに向き合った。
「多々良涼、知ってるよ」
口をついたのはそんな言葉だった。紅い唇が動く。
ルネが作成した多々良涼関係者一覧にはニオさんの名前はなかった。あらましを語って、不思議そうに首を傾げるオレたちにニオさんは微笑んだ。
「といってもわたしは直接関わったことはないし、ルネちゃんのリストから漏れているのも分かる。わたしは多々良涼ー多々良先輩が死亡した時は大学４年生で、さらには学部が違っていたわけだし」
ニオさん、本名、柳九は中国人留学生で、当時医学部神経科に属していた。こう見えてもちゃんと医師免許は持ってるんだ、そうニオさんは誇らしげに言った。
「わたしが多々良先輩を知っていたのは、出資してたからだよ」
「出資？」
顔を見合わせたオレたちに、ニオさんはスクリーンを示した。そこには「ｔｏｄｏｒｏ　Ｉｎｃ.」の文字列。
「ｔｏｄｏｒｏ社って、ヴァンさんが持ってるギアの製造元スか？」
「そう。世界初の小型ギアＧＲ１Ｂ、ｔｏｄｏｒｏ社の唯一の製品」

ニオさんがスクリーンを操作すると、オレが使っている同型のギアが表示された。英語サイトだが、オークションサイトのようだ。どれも驚くような値段がついている。

「あまり知られていないけど、ｔｏｄｏｒｏ社は奈良国際大学の学生が立ち上げたベンチャー企業なの。ＣＥＯ以外は公開されていなかったけど、多々良先輩もその従業員でもあった。わたしの先輩がｔｏｄｏｒｏ社のＣＥＯで、趣旨に賛同したから起業時に出資したの。その時に簡単な紹介を受けたし、ギアを発売した時に開いた関係者のみのパーティーにも出てたから知ってる」

まさか、そう声なく本村弘美がつぶやく。ニオさんは困ったような顔をした。

「ヒロミちゃんが想像しているのとは多分違うよ。ｔｏｄｏｒｏ社は２０７５年、ｔｕｚ社に買収されて、その歴史に幕を閉じた。多々良先輩が自殺したのも同じ年だけど、順番が違う」

多々良涼が死亡し、その数ヶ月後買収された。

「まぁ、ｔｏｄｏｒｏ社のおかげで莫大な資金が出来ちゃって、それを元手に私書箱２０３を作ってみたけど、実はそのアイデアもｔｏｄｏｒｏ社のものだったりするんだよね」

ｔｕｚ社は小型ギア部分だけ買い取って、あとは捨てちゃったから。あははは、とニオさんは笑うけど、その声も乾いていた。

「ニオさんは、どうして多々良涼が自殺したか知ってるのか？」

頷いた。

「多々良先輩が自殺したのは、修士論文が拒否されたから」

ニオさんは冷めきったコーヒーを一気に飲んだ。口紅が少し掠れた。コーヒーカップの縁を拭ってオレたちに向き直る。

「山本一樹は読みもしなかった。当然、承認されないし、卒業できない。後々分かったことだけれど、山本一樹と多々良先輩は驚くほど仲が悪かったみたい。ｔｏｄｏｒｏ社が出来てから悪くなったのか」

「ルネさんが言ってましたが、山本一樹ってｔｕｚ社がスポンサー

だったんスよね。もしかして、山本一樹が嫉妬して多々良涼を蹴落としたってことスか？」

　ｔｕｚ社は当時ヘルメット型のギアで最大手だった。ニオさんを見るが、返ってきたのは否定だ。

「多々良先輩が自殺して、やっぱり大学でも少し問題になったの。査問会が作られて不正があったかどうか、山本一樹の私怨かどうかももちろん調査された。結果は白。何でだと思う？」

　多々良涼の書いた修士論文が、『ありえない理論』だったからだよ。

２０８８年９月２３日（木）　その２

私書箱２０３を出て大きく伸びをした。見事な秋空だ。鱗雲がビルの合間に棚引いている。なんとも神妙な気分だった。それは本村弘美も同じようで、呆っと遠くを見つめる。

「ぼかぁ一旦署に戻ってからルネさんのとこ向かうス」

「ああ」

時間を確認すれば、まだ１０時４８分だ。わずか数十分間の出来事なのに、すでに何時間も経ってしまった気がする。それほどに濃密だった。

オレと本村弘美は外国語の飛び交う人ごみを抜け、モノレールの改札に入る。途端に騒がしいＤＲはいなくなり、実体だけが存在を許される。それを奇妙と思う程度には、オレは拡張現実の人間だった。軽く挨拶を交わして、オレは本村弘美に背を向けた。あいつは桜田門、オレは自宅行きだ。

軽快な音楽が鳴り響き、モノレールが走り込む。可動柵が開いて、乗客がぞろぞろ降りてきた。スーツ姿ばかりで、あらためて今日が平日だったことを思い出す。２０代のビジネスマンとすれ違いざま車両に乗った。

昔は電車事故が多かったのだそうだ。電車で投身自殺、線路での衝突事故、それで発生する電車の遅延。そんなものが日常だと、ビジネスマンはさぞかし苦労したことだろう。モノレールが主流になって、それらはほとんどなくなった。ホームには柵が義務付けられ、地面に接する線路は姿を消した。高層ビルの合間を縫って走る光景はとても綺麗だと思う。ビルのガラスに反射する白いモノレールの姿や、見下ろした街の光景はオレのお気に入りだった。

壁に凭れかけ、口の中で転がす。『不可能な技術』、『ありえない理論』。

ぼんやりと流れゆく風景を眺めながら、ニオさんの語ったことを

反芻した。
もちろんわたしは納得しなかった、そう彼女は続けた。
「だって、読みもしない論文を否定なんてありえない。だから、わたしは多々良先輩の書いた論文を読みたかった。でも……、時すでに遅しってやつかしら。多々良先輩は論文を処分してしまっていた。山本一樹の手元からも論文を削除したらしく、どこにも残っていない。遺されたのは論文のタイトルだけ」

『偽装現実の精神作用』

シンプルかつ明解なタイトル、そのくせ掴み所がない。
ピンポンパン、と音がして扉が開く。気がつけばもう荻窪だった。オレはジーンズのポケットに両手を突っ込んで駅を降りた。

眠りは限りなく浅い。夢は見なかった。妙に頭が冴えていた。オレは起き上がって首を振った。西日に目を細めて今が夕方なのだと悟る。
一昔前のサーバがモーター音をかき鳴らしていた。じっとりと肌も汗ばんでいて、暑い。どうやら無意識にタイマーをかけていたらしく、エアコンが切れていた。摂氏２９．８度、そろそろ１０月だというのに、まだ夏は立ち去ってくれない。
簡単にシャワーを浴びてメールをチェックした。相変わらずセインからもカインからも連絡がない。
「一体何やってるんだろうな」
いい加減心配にもなってくるが、オレには動きようがない。
触手と向き合うか、ルネに会いにいくか、思案をするが結論がで

ない。とりあえずＤＲになるか、とギアを捻ったのが駄目だったのか。
「こんばんわ、柳楽誠」
馴染みすぎた声にぞわりとする。
「お前！」エマノン。
ＮＵＬＬ空間だった。オレの真正面には生き写しの少年が立っている。
「３日ぶりだね。その後の調子はどうだい？」
無言で拳を握り締めた。そのまま勢いよく殴りかかるが、ひらりとかわされる。
「熱くなるなよ、ヴァン。お前だってそれが無駄な行為だってわかっているんだろう？」
そうだった。こいつはＤＲじゃない。オレのアバターを象ったＡＲで、中身は別のところにいる。落ち着け、と深呼吸をした。
「それで、何の用だよ」
オレと同じ面の皮がにやにやした表情を造る。自分ながらに気持ち悪い。
「いや、そういえば感想聞いてなかったなって思って。ドラッグプログラム、キモチヨカッタ？」
犬歯で噛んだ。口に鉄の味が広がるのがリアルだ。
「ああ、ヨかったよ。お前が試せばよかったのにな」
そうすればお前が知りたかったこともわかったんじゃないのか？
睨みつけてもまったく気にしていないようで、エマノンはオレの顔を覗き込む。
「何を感じた？」
「どうしてそんな質問をするんだ。トレースしてオレに流れ込むシグナルを読んだんだろ。もうオレはお役目御免なんじゃないのか」
快楽、それに憤怒。ドラッグプログラムで剥き出しにされた怒りが全身に蘇ってくる。
「それがさ。ああ。当事者だしヴァンにも教えてあげるよ。あのプ

ログラム、人が認知出来ない程度の五感情報を送っていた。それが快楽の正体かと思ってさ、試してみたんだよ。色々な人に同じシグナルを流し込んでみたし、自分自身でもやってみた」

どうなったと思う？

「知るかよ」

「何も起こらなかった。な～んにも。ヴァンのように飛ぶような快楽なんてなかった。元々が感じられない程度の情報だったから、視覚も、聴覚も、嗅覚も、味覚も、触覚も、何も変わらなかった。五感以上の付加情報を送っているのかと疑ってみたけど、それもない。なんだろうね」

「知るかよ」

「そっけないなぁ」

それこそ、知るかよ。

エマノンはくるりと身体を翻し、一歩二歩三歩と歩いた。

「この情報、ルネも知ってるよ」

「何？」

「ルネもドラッグプログラムがどんなものなのか把握しているってこと。ヴァン、ルネをあんまり信用しないほうがいいんじゃないのか」

「余計なお世話だろ」

ルネは情報屋だ。ドラッグプログラムの情報はオレやサイバー課以外にも伝手があるのは当然だ。オレの様子にエマノンは鼻を鳴らした。

「まぁ、いいよ。色々情報も手に入ったしね。山本一樹に多々良涼、か。大分核心に近づいてきたんじゃないのか。山本一樹が結局多々良涼の理論を使ってドラッグプログラムを作った？　多々良涼は自殺ではなくて実は生きている？　おもしろい想像ができるね。どこぞの三文小説みたいだよ」

何故このタイミングでドラッグプログラムをバラ撒いたのか。何故『特定のＩＰアドレス』に送りつけているのか。

「まだ全部解ったわけじゃない」
「それでもすぐさ」
エマノンはまたオレに向き直った。顔には笑みを張り付けて、良い悪だくみでも思いついたかのように目を輝かせる。
「いいこと教えてあげるよ。ヴァン、明日新宿に行ってみなよ。きっとおもしろいものが見られるよ」

２０８８年９月２４日（金）　その１

おもしろいもの、それが不吉な表現にしか思えないのは何故だろうか。

悶々と過ごすうちに、気づいたら早くも金曜日の２１時だ。結局出かける気にはならずせっせと仕事をした。お陰様で依頼のあったアノ物はほぼ完成だ。

エマノンの薄気味悪い笑顔が思い浮かぶ。行かないつもりだったし、それが正解だと冷静な頭が告げる。だが、何があるのか気にもなっていた。いざ金曜日になってみると、そわそわしてろくに寝れやしない。ぞわぞわと動く蟲を消して、時計に視線を投げた。

「行くか……」

手首に古びたギアを取り付けて、ゆっくりと撫でた。座標は新宿西口で、捻る。脳内を駆け巡るパルスの後に現れるのは人ごみだ。今日は金曜日だから、特別会社勤めの者が目についた。すでに出来上がった酔っ払いが何人も駅へと消えてゆく。

周りを見て首を傾げた。

「何だ？」

実体のオレよりも少し小さい両手をポケットにつっこんでぶらぶらと歩きながら、疑問はどんどん積み重なっていった。

普段よりもＤＲが圧倒的に多い。大久保は一種ＤＲの聖地になっていて、色々なＤＲが集まる。一方の一駅離れた新宿は、どちらかというと実体に人気だ。大久保と比べるとＤＲの数も減って、さらにはパンダやペンギンといった特殊な形状をしたＤＲもいなくなる。それがどうだ。今の新宿は混沌としていた。実体の酔っ払い、客引きのホストやホステス、うさぎの着ぐるみのＤＲ、そして明らかにトんでるＤＲのジャンキー。

雑居なビルを前に一際輝く「歌舞伎町」の門、オレはそれを視界に入れて足を止めた。悲鳴が聞こえる。それも何人もだ。男の裏返

ったものであったり、女の金切り声であったり。ぞくり、と嫌な予感がした。地を蹴って歌舞伎町へと駆け込んだ。強烈なデジャヴ、目に飛び込んできたのは暴れ狂うＤＲの群集だった。

「どういうことだよ」

ドラッグプログラムの乱用者がこぞって狂乱している。雄叫び、悲鳴、逃げ惑うＤＲを追うジャンキー。気にしていないのはチューナーをつけていない実体だけだ。

涎を垂らし、焦点のあっていなかった目が、立ち尽くしたオレに向いた。ぐるん、と大男の目玉が回る。

「おまえ……」

男はオレの腕を見ていた。

「おまえ、おまえ」

近寄る男に後ずさった。

「見つけた！　おまえ！　おまえがあああぁあああああああ」

筋肉剥き出しの大男がオレの前に躍り出た。陰がオレの顔におりる。ググググと口から異音を出していた。涎が地面にぽたぽたと落ちる。だが、一心に凝視しているのはオレのギアだ。

「おまえが、た、たた、たたらりょう、か！」

「たたらりょう！」

「たたらりょうがいた！」

「見つけた！」「たたらりょうを見つけた！」「たたらりょうだ！」

「いた！」「こいつが！」

暴れていたＤＲは一斉にオレを認める。

「一体、何なんだよ……」

とん、と背が壁に当たった。

迫りくる手を間一髪で躱した。すぐさま背を向けて走り出す。

後ろを向いて血の気が引いた。ＤＲの狂った集団がオレを追いかける。「たたらりょう」「たたらりょうが」「つかまえろ」「あそこにいる！」

段々と母数が増える。目の前にも、ＤＲがオレを待ち受けるよう

に構える。
「ふざけんな」
男の股を潜って背中を思いっきり蹴った。奴がＤＲの集団に倒れ込んだのは嬉しい誤算だ。でもな、オレは非戦闘員なんだよ。引きこもりなんだよ、足が痛えよ。悪態を付ながらまた足を動かす。運動不足がダイレクトに効いたようで、すでに息が苦しい。
「何で夜中に鬼ごっこなんてしなきゃいけないんだよ」
クソ、クソッ。汚い言葉ばかりが口に出る。クソ。
走りながらスクリーンを出した。簡単にニュースを流していると、驚くものが飛び込んでくる。

Ｆｗ：多々良涼を見つけたらドラッグプログラムをアゲルョ
ーーー

「これか」
あいつらはこのギアを追っかけてきているのか。
多々良涼のギアはＧＲ００１Ｂだった。とは言っても、彼はｔｏｄｏｒｏ社に勤めていたし、そのギアを所有していたとしても何ら不思議がない。
オレは舌打ちしたくなった。このギアは特徴的だから、いい目印になるのだろう。頭のぶっ飛んだ野郎たちに、オレが多々良涼でないと説得するのも難しそうだ。
エマノン、あいつはおそらくこのメールが今日流れることを知っていた。その上でオレをここに嗾けたのだ。解っていたのに、まんまと乗せられてしまった。オレは下唇を噛む。今はあいつに憤っている時じゃない。自分の不甲斐なさを嘆く時でもない。

スクリーンに気をとられて、足が縺れた。転びはしなかったが、バランスが崩れて足が止まる。
肩を捕まれた。強い力で引かれ、尻餅をついた。どろり、と涎がオレの頬を伝った。見上げた先にいたのはあの大男だ。
「なっ……」
集団に囲まれた時の恐怖心、それがオレの全身に侵食した。暗闇でいくつもの狂った眼がオレを射抜く。身体が少しも動かせない。震えさえない。ただオレは迫りくる手を呆然と見る。伸びる。手のひらがオレの顔を被う。

「不埒もの！」
大男が消えた。
「私の前で犯罪なんて」男が膝をつく。
「よっぽど自殺願望があるのですね」女が吹っ飛ぶ。
そして現れたのは白い生脚だ。
「ヴァンさん、大丈夫ですか？」
伸ばされた細い手首をギュッとつかんだ。

「助かった」
「いえ……」
頬を染めてはにかむのは、つい先ほど大暴れをした美少女だ。
「ハルカ、強かったんだな」
「こう見えても空手三段、柔道五段ですから」
彼女は清楚に微笑んだ。顔の横には握りこぶし、怖えよ。

息を整えてハルカの隣に並んだ。
「新宿が変だと通報があったんです。念のため来てみてよかったです」
「ありがとうな」
彼女は目を細めて周囲を見回す。もうここには狂ったＤＲとオレたちしかいない。
「でも、あいつらゾンビみたいに沸いてきますね」
「ああ」
ぞろぞろと周りからジャンキーが集まってくる。また囲まれるのも時間の問題だった。だが、ハルカが隣にいることで精神的余裕が生まれる。
どうします？　と投げかけるハルカの視線に、オレは唇を釣り上げた。またスクリーンを出して、軽く操作する。
「まぁ見てろよ」
徐に目当てのものを取り出した。
「えっ」
真っ青になるハルカ。オレはますます笑みを深める。
「ＡＲ技師舐めんな！」
触手が広がった。オレの足元からはゾロゾロと蟲が湧き出る。今日の今日まで作っていたＡＲだ。プログラムも導入済み。
臭い粘液を出しながら、触手がグン、と伸びた。触手1号は蔦タイプ。先端は蕾になっていて、穴に入ると開花するという恐ろしいものだ。あいつに捕まったらどんなノーマルでもＭになるだろう

と思われる。マングローブ型の触手2号もアマゾンらしい特殊仕様になっていて、自分で言うのも癪だが、傑作だ。七緒さんの注文がビシバシと入った品で、その、男性向けだ。先端から色々と伸びるのだ。いいだろう、その効果、ここで試してやるよ。触手3号4号、……ありったけの作品を出現させる。蟲もバリエーション増やしたんだ。楽しんでもらわないとな。蔦がどんどんジャンキーを搦め捕り、そこに数多の蟲が這い上がる。

今のオレはさぞかし凶悪な面をしていることだろう。

「ドラッグプログラムよりも善い夢を見させてやるよ」

「ひいいぃぃ」

悲鳴はもちろんハルカから発せられた。

「ヴァンさん、鬼畜です」

不貞腐れたようにハルカは頬を膨らませた。女の子が拗ねた仕草が非常に愛らしいが、中身はハルヒコだ。オレは必死にハルヒコの実体を思い浮かべた。

ジャンキーはあらかた堕ちた。それを見届けてオレのARも消した。残ったのは新宿に似つかわしくない静寂だけだ。

「じゃ、行くか」

「……」

「なんだよ」

「あの、ヴァンさん、実はさっきから考えていたんですけど、DRで襲われたらとりあえず一回戻って別の場所に飛んだら良いんじゃないでしょうか」

その手があったか。

２０８８年９月２４日（金）　その２

布を覆うというオーソドックスな手法を用いてギアを隠し、ハルカを連れて大久保まで歩いてきた。やはり大久保もいつもより殺気立った雰囲気があり、狂ってしまったＤＲが暴れていた。狂人の咆哮を背にオレはスタスタと足を動かす。

「酷いものですね」

「そうだな」

哀れなジャンキーたち、その末路は死体となる。

廃墟ビルにためらいなく足を踏み入れた。隠し階段を降りてドアノブを捻れば勝手知ったるルネの部屋、とやらだ。

「ヴァン！」

予測通りルネがいた。すぐさま駆け寄ってオレの腰に抱きついた。

「おそよース」

ヤヒロ姿の本村弘美もいる。

部屋は現代風のスタイリッシュな部屋だった。黒曜石の楕円形テーブルに赤色のビーンズクッション。壁は白で統一されている。オレはすぐさまビーンズクッションにダイブした。めちゃくちゃ柔らかい、癒しだ。

「それで、ドラッグプログラムバラ撒いている奴は判ったのかよ」

ルネも同じようにオレの隣でビーンズクッションの虜となる。

「うん、多分」

埋めた顔を上げた。

「何から話そうか？　多々良涼のことからかな」

オレは頷いた。

「全くね、ニオさんが多々良涼を知ってるなんて、意外なつながりだったよ。お陰でｔｏｄｏｒｏ社関連の内情も知れたし、ある程度の事柄がわかった」

「ああ」

「もうニオさんから話を聞いているはずだけど、多々良涼はｔｏｄｏｒｏ社創業時のメンバーだった。主にギアの組み込み開発を行っていたみたい。院生の頃からかれこれ2年かな。その一方でＤＲ－ー偽装現実の研究を行っていた。最終テーマは『偽装現実の精神作用』、多分、ドラッグプログラムに関わることだよ」

当時、いや、今ですら偽装現実と精神についてを結びつけた研究は存在しない。それは実体とＤＲの感覚はイコールであるという前提があるからだ。受け取る感覚が同じなら、それは肉体に等しい。ＤＲそのものが直接精神に関わるということはない。が、多々良涼の研究テーマはそれを真っ向から否定するものに思われる。まさに『ありえない理論』だ。ドラッグプログラムを目の当たりにしなかったら、きっとオレですら信じられなかっただろう。

「ルネも多々良涼の論文を探してみた。だけど、ニオさんの言ったとおりもうどこにも存在しない。奈良国際大学だけじゃない、世界中の大学のサーバも、研究者も。多々良涼と交流のあった者ですら、論文の詳細については知らなかった」

彼は自分を全て葬りさったのだ。

「多々良涼が、論文拒否を苦に死んだっていうのはほぼ正しいと思う。当時のゼミ関係者も合わせて口を揃えていたよ。山本一樹から拒絶されて論文が通らなくて、段々多々良涼が焦心衰弱したって。彼は特待の奨学金を受けていたからね。留年となると奨学金は打ちきられるし、返金も要求される。ｔｏｄｏｒｏ社で働くどころではなくなるってこと。もう後がなかったってこと。ただ一つ不思議なのが」

「？」

「多々良涼が死んだ場所、荻窪なんスよ」

「彼は奈良に住んでいたし、その前は八王子だった。どう考えても荻窪に縁があるように思えないのに、わざわざ奈良からここまで出てきて自殺した。それだけがわかんない」

ルネは首を振った。

「まぁ、自殺する直前に何を考えていたかなんて知るよしもないし、まともな精神状態でなかったのかもしれない。追求するのも無駄な気がするから今はいいや」
「スね」
なぁ、とオレは声をかけた。
「多々良涼が生きてるってことはないのか？」
なにしろ今日彼と間違われて追いかけられたのだ。
「ないよ」即答。
「自殺者は変死扱いになります。変死は、検視の対象で、多々良涼の場合はちゃんと調書も残っています。歯型が一致したとの記録もあるので、調書を改竄しない限り生きている可能性は皆無ですね」
ドラッグプログラムをバラ撒いている奴は、多々良涼がもういないことを知らないのか。
ひょいっとルネは身を起こして、小さな手からスクリーンを出した。
「多々良涼はそんなところ。そんでもって、ドラッグプログラム散布者は」
ピンク色の瞳が光った。
「奈良国際大学にいるよ」
山本一樹の勤務先、多々良涼の通っていた大学。

「ヒロミちゃんがニオさんからもらってきてくれた情報が決定打、かな。ドラッグプログラムを送っていた人たち、彼らは奈良国際大学の学生だったんだ。たぶんバイト。そうじゃなくても中身なんて知らないと思う。そこから辿っていって、一応の目星はつけた」
壮年の男性スクリーンに映し出された。白髪が何本も混じっていて、目元の皺が目立つ。
「元ＭＩＴの講師で、今からちょうど二年ほど前、奈良国際大学に誘致されて教授になった人物だよ。専門は山本一樹と同じＤＲ。かつての

理数科物理心理学科、現、工学科物理心理学科に所属しているんだ。ドラッグプログラムを送る学生の大半が彼の受け持っている生徒だったよ。ここ1週間ほど大学を休んでて怪しさ満点だね」

隣にスクリーンが現れ、三十代の女性が表示された。媚びたような目つきだ。

「そして、おもしろいことに彼の妻は元ｔｏｄｏｒｏ社のＣＥＯだったりする。もっとも、勤務態度やネットでの発言を見る限り、彼女は今回に関わっていないように見受けられるけど、詳細は不明。多々良涼が死ぬ直前にＣＥＯを辞してアメリカに留学してる。留学先で不倫愛を育んで結婚したみたい。彼女も二年前に日本へ戻ってきてるよ」

淡々とルネは口にした。

「二宮正、とその妻絵里、旧姓、菅野」

「これって……」

不意にルネの部屋の扉が開いた。

「ヴァン、ドラッグプログラム作ってたの、私のパパだった……」

扉の向こうには、泣きそうな顔のセインと無表情のカインが立っていた。

金髪の青年は碧眼を細めてオレを見る。

「久しぶり」

カインのＤＲだ。つい最近まで見かけていたのに、随分懐かしい気がする。

「一週間ぶりだな」

セインも、と加えると短髪の少年は目を潤ませて、それでも嬉しそうな笑みを零した。

「カイン、いつ意識が戻ったんだ？　もう身体は大丈夫か？」

「今日かな。実は病院を抜け出してきた」しれっと答える。「さすがに一週間寝てたら身体が重い。歩けるだけマシだろうけど」
「カインが僕を助けてくれたんだ」
セインが一歩前に出た。女の子版セインがすっかり馴染んでいたオレにとっては、セインの僕言葉は少しムズ痒い。
「助けたって？」
「カインが倒れた後、ヴァンは連絡くれただろ。それがパ……、父に見つかってドラッグプログラムを使ったこともバレたんだ。ギアを取り上げられて、部屋に閉じ込められてずっと連絡もできなかった。カインが家に来てやっと抜け出せたというわけ」
「なるほどな」
カインはチラッとオレの背後に視線を投げた。
「ああ、紹介するよ。ハルカと本村弘美、サイバー課だ。カインは覚えているかわからないが、三島晴彦、ハルカがカインを病院に運んだんだよ」
カインの目が見開かれる。うそだろ、と声無き声。オレでも未だに信じられないよ。
「はじめまして、かな。サイバー課のハルカです。色々ヴァンから聞いてます。よろしくね」
「ヴァンさん～、なんでぼくだけ本名なんスか」
いや、だってオレお前のハンドルネーム知らないし。
「まぁいいっス。ぼかぁサイバー課の本村弘美ス。よろしくっスよ」
「う、うん」
セインが固く頷いた。
「それで、一体全体何がどうなったの？」
ルネが小首を傾げた。正直、オレもついていけてない。
セインは両手に顔を当てる。込み上げるものを押しつぶすかのように、口が苦悶に歪んだ。
「私が代わりに話そうか？」

肩に手を置くカインに、セインはやんわりと首を降る。
「いい。大丈夫だよ」
パン、と頬を叩いてセインはオレたちを見回した。
「さっき言ったとおり、僕の父がドラッグプログラムを作ってた。僕の本名は二宮聖、っていってもうみんな知ってるかな。父は二宮正、奈良国際大学で教授をしてるんだ。元々はアメリカの、よくわからないけど有名な大学の講師をしてたんだけど、2年前に大学へ就職した。僕もその時に転校してこっちに来た」
ルネの調査とほぼ同じ内容だ。カインからセインのことは聞いているが、転校のタイミングも一致していた。
「僕ってそんなに頭良くないし、父の研究は何をやっているのか知らなかったんだけど、DRらしいね？　日本に来てからはほとんど研究室にこもりっきりで、ろくに会話なんてしなかった。ううん、それはあの女、義母が来てからだっけ。とにかく、僕と父の仲は良かったとは言えない。それが今年の7月7日、ちょうど中間テストが終わった日だからよく覚えている、父がえらく上機嫌でほとんど話すらしなかった僕を抱きしめたんだよ。それから、耳元でつぶやいてた。やっと聖に誇れる父親になれる。歴史に名を残す親になれるってさ、そんなことばかり言ってた。私はそんな名誉よりもほしいものがあったんだけどな。それから、僕と向き合って言った」
すごいものを見つけた。あんなものが存在していたなんて。常識が覆される。
「今から思うと、あれがドラッグプログラムだったのかも」
ルネは顎に手を当てて床を見つめる。
「だけど、機嫌がいいのもその日だけだった。次の日からは急降下、ブレーキの壊れた車が崖を降るみたいに、日に日に悪くなっていったよ。それで、あの日」
カインが倒れた日の朝、聖は二宮正がいることには気づかなかった。かなり動転していたのだろう。彼女が学校をサボって病院へ駆けつける準備をしていた時、うっかり『ドラッグプログラム』って

つぶやいていたみたいだった。
二宮正は顔色を変えて詰問した。何故ドラッグプログラムを知っているのか。使ったのか。正直に答えると、二宮正は目尻をつり上げ、無理矢理聖のギアを奪い取った。
「それからマンションに監禁生活なんだ。ネット回線も切られて、家のドアも遠隔操作でロックされてて解除できなかった。父は毎日『どうにかするから』って言ってた。『今にドラッグプログラムの開発者を見つけてくるから待っていろ』『自分の所為だ』」
かける言葉が見つからなかった。カインはやさしくセインの肩を撫でている。
「ぜーんぶ判っちゃったね。ああ、パパが犯人か。そんでもって、ドラッグプログラムの本当の製作者を探してるのかって」
ルネはとてとてとセインへ歩いて手をギュッと握った。
「辛かったね」
「うん」
聖にとっては元々義憤に駆られて始めた調査だった。その元凶が父親だとは、心の痛みは幾許だろう。

「それで……」
セインの落ち着いたところで、オレは気になっていたことを訊いた。
「カインはどうやって助けたんだ?」
連絡手段ないんだろ? ドアがロックされているんだろう?
カインは眼鏡をキラリと光らせた。
「ヘリだよ。窓からなら、出てこれるだろう」
やっぱりこいつら、スケールが違うよ。

改めて全員が向き合う。その中心はルネで、彼女は腕組みしながらとんとんと踵を鳴らした。
「うっすらと、二宮正が多々良涼ーードラッグプログラムの理論を

組み上げたと思われる人ーーを探しているのはわかってたけど、裏付けがとれたね」

「ああ」

タタラリョウ？　と小さなセインとカインの耳打ちにこれまでの経緯を簡単にまとめた資料をスクリーンで渡す。

「二宮正がドラッグプログラムをバラ撒いていた手口はもういいよね。ただ、カインちゃんだけがそのルートから外れるんだ。どうやって手に入れたの？」

こてん、と幼女は首を傾げる。ハルカも身を乗り出してカインの言葉を待った。

「私のドラッグプログラム入手方法は少し特殊だったからね」

吐き出された声は苦笑まじりだった。

「要は伝手だよ。もう知ってると思うけど、本名は甲斐綾乃、カイスポーツの跡取りでもある。伝手というのは、弊社が新技術ｍｏｎｏｌｉｔｈを採用したことに関係がある」

甲斐綾乃との邂逅が思い浮かぶ。秋山このみとの関係を解消するきっかけとなったものだ。

「ｍｏｎｏｌｉｔｈは実は脳神経部分でＤＲとつながりがある。ＤＲの脳にシグナルを送る部分がｍｏｎｏｌｉｔｈの技術に関わっているんだ。その研究部分で関係上、少しだが二宮正に出資している」

「えっと、カインちゃんは直接二宮正からもらったってこと？」

「いや、私自身二宮正がドラッグプログラムの配布元だとは知らなかった。私はカイスポーツで半分働いているようなものだけれど、ラボには元二宮正の教え子が出入りすることがある。そこで私がもらったのは、そいつがくすねたドラッグプログラムだよ。二宮正は元生徒や学生にチップのコピー・送信を手伝わせていたんだ。大抵の奴等は何も知らなかったようだが、そいつは作ったドラッグプログラムを送らずに自分で使っていたんだよ」

「へぇ」

「元々私に使わせて、依存させて、いいように弄ぼうって目的だっ

たらしいが、自滅したな」
二週間前に死んだ。彼女はそう淡々に語った。

判ってしまえばあっけないものだった。意外にクローズドな世界、ただ経路は黒塗りで潰されている。オレと同じことを思ったようで、ルネも「世間は狭いね」なんてつぶやいたりする。
「で、ヴァンにドラッグプログラム送ってみたけど、何かわかったか？」
カインは何気なく尋ねたようだが、それに身体を凍らせる人物が一名、本村弘美だ。
「ごごごっごごごめんス！」
「な、何」
悪役ヤヒロはジャンプしてすぐさま土下座した。悪徳スーツに似合わない恰好だ。
「実はヴァンさんから貰ったんスけど、奪われちゃったス」てへ。
「本当にバカで、バカで、申し訳ないです」
追随するようにハルカがぐりぐりとヤヒロの頭を押しつぶす。
痛いスよ～、なんて言っているが、オレの時はそんな謝罪はなかったけどな。
「大丈夫だよ。ちゃんとヴァンがモルモットになってくれたから」
おい、そこで言うのかよ。
「エマノンってスクリプトキディがオレに使わせたんだよ。どういう動きをしているのかってデータもばっちり採取済みだ。オレ自身そのデータは持ってないが」
「ルネが持ってる。奪った。だけど、それも無意味なデータだった」
チッと幼女に似つかわしくない舌打ち。本性が出てるぞ。それにしてもエマノン、ハッキングされたのか？　ざまあみろ。

「ああ、二宮正が多々良涼を探しているらしいことについてですが」

思い出したように切り出したのはハルカだ。
「ヴァンさんがここにくる前、ドラッグプログラムの使用者に襲われました。どうやら使用者に何らかの指示をしているみたいです」
「これ、か」
ルネは手を振ってスクリーンを出す。浮かび上がったのは例のメールと写真だった。
「多分このギアの所為だよ。多々良涼が使ってたギアって、ヴァンと同じ型なんだよね。昨日ニオさんからもらったリストからドラッグプログラム使用者をピックアップして監視してたんだ。そうしたら、今日の午前0時、このメールが届いた」
「いよいよ限界ってことスか」
「限界？」
「前は根気よくＩＰアドレス指定でタタラリョウを探してたでしょ？　それが一週間前、多分セインちゃんのことがバレた時からなんだけど、途絶えた。娘のために何かしてた可能性もあるよね。それでも成果でなくて焦りに焦って、今日のようにジャンキーに多々良涼を捜索させた。そう考えるとすっきりしないかな？」
なんたって、ドラッグプログラムで死人まで出てるんだから。
「いずれにせよ、これ以上細々と多々良涼探しをひっそりとやる気はないってことだけはわかる」
どうしようか？
ルネはぽん、と拳を叩いた。
「幸い、明日は土曜日、大学は休みだよね。学生は少ない。吉日」
そして、ピンク色の目をキラキラと輝かせてハルカに詰め寄る。
「せっかく犯人わかったんだし。サイバー課も証拠あるわけだし、裁判所から許可書なんてすぐに出るよね。ルネはルネでソースコードとか真相とか知りたいし」
ええ、うん。ハルカが曖昧に頷く。くるり、とルネはセインに振り向いた。
二宮正はいつも研究室にいるんだよね。明日もいるよね。ルネの

言葉にセインもガクガクと頭を動かす。
うんうん、とルネもご機嫌に返した。
「じゃあ、のりこもっか」
そう、高らかにのたまった。

2088年9月25日（土）　その1

「ほら、こうやってギアを捻るんだよ」
ギアを付けたオレに向かって、苦笑しながら兄は軽く腕を捻る動作を見せた。
「うん」
胸の高まりがどうしようもなくて必死に頷いた。大きなサーバがヴィィィン、と唸る。小難しい本や資料が部屋一面に散らばっていた。オレは辛うじて場所が確保できたちゃぶ台の前の座敷、兄はベッドに腰かけている。
「じゃあ、やってみようか」
「うん」
震える手で、ゆっくりとギアを捻った。逆るパルス、目を開けると大きな公園にいた。
『どうだい？』兄の声が聞こえた。回線だけは開いているからこうして会話ができる。
「すごい！」
普通の人間がオレの身体を通り過ぎた。自分は透明になっているのだ。ＡＲになっている。オレは興奮してあちこち触りたい気分だった。肉体から開放された自由な魂だ。ＡＲはなんでもできる。
だけど、何故か違和感が拭えない。一歩踏み出そうとして、足元が崩れた。
『誠？』
踏みとどまって、やっと何がおかしいのか気づいた。
「兄さん、なんだか背が高くてぐらぐらする」
視点に慣れなかった。普段のオレよりもアバターの背が高い。一瞬で数十センチ背が伸びた気分だ。バランスが難しくて歩き辛い。
『一回こっちに帰っておいでよ。誠のアバターを作ろう』
「うん」

ギアを捻ると、また兄の部屋だった。兄は眉をハの時に曲げてスクリーンを出す。
「ごめん」
しょんぼりするオレに兄は頭を撫でた。
「いや、気が利かなかったよ。やっぱり誠専用のアバターもあったほうがいいよな」
そう言ってスクリーンをオレによこした。アバターの設定画面が表示されていて、丸坊主素っ裸の男のアバターがゆっくり回転している。
「これ、オレ専用のアバター？　好きに変更していい？」
答えは確認しなかった。オレはもう好き勝手にアバターをいじる。オレの今の身長は１６１ｃｍだからそれに合わせる。もっさりとした黒髪じゃなくて、色素の薄い茶色で。慎吾みたいな恰好いい感じがいい。散々顔を弄くった。流行りのボトムにお気に入りのパーカーを着せる。
「うーん」
だけど、できあがったのは凡庸という表現が一番似合う少年姿だった。首を傾げるオレに兄が苦笑する。
「誠らしくていいんじゃないかな」
それ、褒めてないだろ。平凡だっていいたいんだろ。
「結構アバターを作るのはむずかしいんだよ。特に今までヘルメット型のギアしかなかっただろ？　作り込む部分がまだうまくできていないんだ」
「そうなんだ」
「そのギアが普及すれば、技術も改善されると思うよ」
当分の我慢かぁ。でも、オレがはじめて作ったアバターだ。オレの分身だ。どこまでも凡庸な顔立ち、だけど少し鼻が低いところとか、猫っ毛の髪とか、うん、いいかもしれない。
「お兄ちゃん、じゃあこいつでもう一回行ってみる！」
さっきよりも胸が高鳴った。

ふと、初めてＤＲになった時のことを思い出した。あの頃はただＤＲになることが純粋に楽しくて新鮮でおもしろかった。兄がいて、甘えて、笑いあって。今はもう特別な感慨を抱くことはないが、妙に懐かしい気分にさせられる。実体のオレよりも一回り小さい手のひらをぎゅっと握った。

奈良の空気は郷愁を呼び起こす。

奈良研究学園都市は第二の筑波を目的として作られた研究学園都市で、かつての藤原京上にあった。奈良研究学園都市には、企業の研究施設や様々な学校が集まる。その核をなすものが奈良国際大学だった。奈良国際大学は日本でも有数の学府で、創立５０年に満たないにも関わらず、すでにノーベル賞学者を５名輩出している。日本でも東京、京都、筑波に肩を並べるほど、いや、それ以上に人気も学力も高い。他の大学と違い、奈良国際大学は専門に特化していた。つまり、一般企業向けの社会人になるためのステップとして通うところではなく、研究者・専門職育成に注力した場所なのだった。

奈良県橿原市、ここは山に囲まれているだけあって、空気が清廉としている。道路は綺麗に舗装されていて、夕日で黄金に輝いていた。何棟もの建物が円を描くように建っている。その中心が一際高い塔で、奈良国際大学の象徴だ。

ここも久しぶりだな、と思う。最後に来たのはいつだっただろうか。校門へと続く道を一歩一歩踏み出して雰囲気を楽しんだ。

小さい影がぶんぶんと大きく腕を振る。

「ヴァン、遅いよ」

「そうか？」

既にルネは校門前に来ていた。

「はしゃぎすぎだろ」

「だって、だって」

抱きつこうとするのを頭を抑えて防いだ。
「で、やっぱり構内はバリア張られてるのか？」
「建物の中がね」
昨日のルネの宣言どおり、今日これから大学に侵入する。事前に調べた限り、大学の敷地内でも外なら自由にＤＲが出入りできるようになっているが、建物の中はＡＲバリアが張られていた。講義の盗み聞きや研究のスパイ対策、大学の治安維持等色々理由はあるのだろう。
「だけど、建物でもバリアのない場所はあったよ。どこだと思う？」
「ＤＲを研究しているところか？」
ルネはにっこりと笑った。
「うん。西３－Ｂ棟、ここが工学部の研究室が集まっているところなの。ここだけはＤＲの研究が主体なだけあって、バリアが張られていない。二宮正の教授部屋もこの建物にあるよ。９１１号室。セインちゃんには今日もここにいることを確認してもらった。サイバー課が来る前に行こう」
ぎゅっとルネはオレの手を握り締める。興奮しているのか、頬が上気していた。
一歩、敷地に入る。確かにバリアはなかった。
「こっちこっち」
手を引かれるまま駆け足になる。どれだけ燥いでいるんだろう。
敷地内は近未来を思わせる作りをしていた。地面はアスファルトでもコンクリートでもない。土はどこにもなくて、白い地面からにょきっと木が生えている。説明らしきものがＡＲでテロップが流れていた。『当大学では、高吸水性ポリマーを使用しています。これは水を浸透する機能を持った化合物で、主に道路の排水に……』また、講堂の屋上からは何本ものケーブルが空へ伸びている。上空１０ｋｍまで達するこのケーブルの先には、風車がつけられている。ジェット気流を利用した風力発電で、奈良国際大学が実験的に行っている発電方法だ。凧の原理で風車が落下することはない。

こうして歩くだけでも、様々な奈良国際大学の先進的技術を見ることができた。

ルネの足はぴたりと止まった。バームクーヘンを切り取ったような、歪曲した建物だ。見上げると１０階はありそうな高さで、ガラスが茜色の空を写し出している。

「ここが工学部の棟だよ」

「へぇ」

休日だからか、夕方だからか、オレたち以外に人の姿はない。

中を覗き込むと、正面入り口をすぎたあたりにエレベータ、隣に簡単な案内板があった。さすがにここのエレベータはＤＲ対応なんてしていないだろう。９階まで跳ぶか。

まずオレたちが二宮正の部屋に乗り込んで、ドラッグプログラムチップの証拠を取る。同時にデータが削除されないようにそれを抑え込む。一通り情報をいただいた上でオレたちは退散、その後でサイバー課が正式に訪問という手筈になっていた。

よしっ、とルネはかわいらしい気合を入れる。

「たのもー！」

「……」

「……」

建物に踏み入れた。

先ほどまであったごく当たり前の正面入り口、中のエレベータや案内板は見事に消え去る。目の前に広がっているのは無限にも思える螺旋階段だ。暗闇で、ところどころに蝋燭が灯っている。

「ルネ、これ……」

幼女は人差し指を口元に当てて、こてこてと左右に首を傾ける。そして小さく「あっ」と叫んだ。

「そうだった。二宮正、セインのお父さんは今ドラッグプログラムに目が眩んでいるけどさ、本来はＤＲと仮想現実の融合が研究テーマなんだよ。ＤＲは現実世界の座標を使ってアクセスしている。一方、仮想空間には座標がない。二つの世界は直接行き来ができない。

その二つを結びつけるにはどうしたらいいか。ＭＩＴ時代の二宮正は座標を仮想化して拡張現実と仮想現実、言うなればＡＲとＶＲを融合させようとしたんだ。多分、その成果がこれ」

「この扉の先は仮想空間ってことか？」

「うん」

座標はしきい外の値を出していた。

「どうする？」

「単なる実験なのかな、それとも、初めから罠なのかな」

ルネは唇を舐めた。

「行くしかないでしょ」

2088年9月25日（土）　その2

こつん、こつんとオレたちの足音が響く。螺旋階段は上ではなくて下に伸びていた。だから、ひたすら降っているのだけれど地味に足が怠くなる。ルネはあいかわらずの元気さで階段を二段飛ばしするものだからたまったものじゃない。

「何かのダンジョンみたいだよね」

「ああ」

こういう古典ゲームがあったよな、ひたすら地下に潜ってモンスターを倒すやつ。昔慎吾の家で骨董品のゲーム機とテレビという古典作品によく見られる機械を繋いでゲームをしたっけ。コントローラという操作端末が独特で、やりこみすぎると指が痛くなる。あの時は唐突なモンスターの出現によく大騒ぎしてた。ほら、こんな風に……。

「え？」

巨大な鎌がオレの頭上を切り裂いた。髪の毛の切れ端が光る。冷や汗が一気に吹き出す。

「おい、ルネ」

鎌はトラップ、だが、ルネの正面に沸いて出た化物はオレたちを捉えて動いた。

「プログラムを連動させてるってわけ！」

あいつはギアがないからＡＲだ。丸い肉塊にカニの脚のような鈎爪が何本も伸びた醜悪な姿だった。いくつもの目玉が飛び出ていて、キキキキキという異音を発している。

一段ずつ階段を上り、ルネに近づく。目玉は一斉にルネへと向いていた。カシャ、と脚が伸ばされる。

「ルネを相手にしようってとんだ身の程知らず」

掴もうとした幾多の脚を躱し、軽快にルネはジャンプした。化物の目を蹴って潰す。パンツは見えそうで見えなかった。白い液体が

ドバッと流れるが、彼女は気にせず肉塊に手を当てた。
中心に光が生まれて、化物が熔ける。この幼女、強い。
「あのＡＲにウィルスを入れたんだ。オーバーフローを起こさせるやつ」
「一体だけか？」
「少なくともこいつはね」
ルネは髪が邪魔くさいのか、リボンを取り出して頭上で結った。
首を振るとポニーテールが揺れる。
「この先も今みたいなのがある？」
「おそらくは。久々に燃えるじゃない」
怖気づいているオレとは対照的に、ルネはにやりと笑った。オレは自然と一歩後退する。
「じゃ、ヴァン、手を出して」
「？」
言われたとおりに右手を差し出すと、ギュッと握られた。
「これでヴァンだけ逃げるってのもできなくなったね。ほら、行こう」
「ヲイ」
幼女、手強い。
しぶしぶオレもルネの後に続く。
「大丈夫だよ、ヴァンはルネが守るから」
いくら中身がおっさんとはいえ、こんなかわいらしい女の子姿に言われるのはな、と思う。照れ隠しに、繋いだ手を握り返した。

蝋燭の光だけでは心許ない。先ほどの襲撃があってから、慎重に足を進めた。トラップは今のところ大人を想定したもののようで、一撃で致命傷を与えて退場させようという意図なのだろうが、頭上を矢が飛んできたり、弾丸が掠った程度だ。ルネは不満なのか「ぬるいなぁ」なんてつぶやいたりする。
「あまり滅多なことというなよ」

出した声は慄えていた。ＡＲは言ってしまえば何でもありだ。戦車でもドラゴンでも、出そうと思えばいくらでもだせる。もっとも、ＡＲの動作はプログラムの造り込みによるが。先ほどのＡＲを見た感じだとかなり作りは甘い。ただし、生き物のような細かい動作や処理判断を削ってしまえば、目的対象を攻撃という処理自体は簡単に作れてしまう。

「そろそろ来るんじゃないかな」

「え？」

「ここに入ってそろそろ１０分だよ。ヴァンは気づいていないかもしれないけど、トラップやさっきの化物は経過時間で出現するみたい」

それを早く言ってほしい。ひとまずオレたちは足を止めた。

ルネはやる気なのか、スクリーンを複数出す。オレも武器、と考えて『ぷんすかプリンセス』のやえちゃんが使うミラクルみらくる☆スティックを取り出した。以前アニメのイベント用に依頼されて作ったものだ。ＤＲの活劇で使用後、アニメファンにデータをプレゼントしたらしい。当然コアなファン向けに、アニメのミラクルみらくる☆スティックに搭載されている機能をちゃんと実装している。すなわち、薙刀、バズーカへの変形だ。さらに、クライアントに渡したものはほとんどおもちゃ程度の攻撃力だが、オレのものはオリジナルなだけあって威力もアニメそのものだった。さすがにステッキのまま使用する魔法ぷんすかぷんは処理が複雑なので実装する気はなく、ただステッキから閃光が放たれるだけだが。

武器の選択に触手も頭に浮かんだが、今回は人を相手としないので使えないだろう。触手で拘束した場合でも、本気で暴れられると縛りを解くように作っているからだ。

暗闇からカサカサと音が聞こえた。虫系だろうか。早速オレはステッキを振るって魔法ぷんすかぷんを使う。一瞬だけ照らされた光だが、迫り来るものの姿がはっきりとわかった。

「うわぁ、最悪。最悪！」

閃光でありえないほどの黒光り。世界でもっとも嫌われているあの虫が蠢いていた。それもサイズは３０ｃｍ強。

ルネはすぐさま何かのプログラムを実行させた。文字がスクリーンを走っていることから、分析をやっているのだろう。虫は夥しい量だ。先ほどのように一つずつ対応していたのでは間に合わない。ピンク色の瞳はめまぐるしくコードを追っていた。

スティックを薙刀へ変形させえて、ルネの前に出る。

「い、いくぞ」

怯むな。跳んで襲いかかる虫を薙ぎ払う。一振り、二振り、ピギャッと虫どもを叩きつけるが、そいつを飲み込むかのようにゾロゾロと虫が這い上がる。物理というよりは精神にくる攻撃だ。

動きは現実のものとは程遠く、緩慢だったのには助かった。パターン化もしていて、こいつらはオレの頭を狙っている。冷静に虫を追い払えば対応は可能だ。腕が疲れるだけだ。ただ、キリがない。

ブンブンとひたすら薙刀を振るった。しかしながら、運動不足のオレにとって、こうやって三分も腕を振っていれば十分疲労は溜まるわけで。

一瞬対応が遅れた。狙いが逸れて、一匹がオレの顔にダイブしそうになる。慌てて腕を被った。

「うえええ」

ズキリと痛みが走った。腕を払って噛みついた虫を払う。痛みだけでダメージはそれほどでもない。

それよりもあの虫に噛まれてしまったことが非常にショックだった。いくら菌はないと知っているとはいえ、植え付けられた嫌悪感が吐き気を催すほどだ。

「ルネ、まだかよ」

「いまやる！」

シューッという音とともに、足元から白い煙が発生した。虫は煙に触れた途端藻掻き消える。先ほどまで虫に溢れていたとも思えない、静まり返った階段が残った。

「はぁ、しんどい」
データを修復して傷つけられた腕を元に戻す。これを消毒代わりとしたい。
「なんか、ルネ、久々にキたよ」
「うん……」
最初の勢いはどこへやら、あるのは疲労感だけだ。
「休憩する？」
「そうだね」
階段に腰かけようとした時、それは起こった。

「姉ちゃん、危ないっ！」
「な」
ルネが先ほどまでいた場所には、キメラのような怪物がいた。様々は動物を融合したような奇っ怪な姿を晒している。蛇頭の尻尾がゆらゆらと揺れていた。ライオン顔が大きく口を開き牙を見せる。
オレはすぐに階段を駆け登った。オレのいた場所には、怪物の鋭い爪が食い込んでいる。
「嘘だろ」
ルネは？　怪物から距離を取ってすぐに薙刀をステッキに換え、魔法ぷんすかぷんを放った。
「ルネ！」
光る。階下で幼女が誰かに抱きかかえられている。あの姿は、まさにオレ自身だった。
「エマノン！」
叫んだところで怪物が肉薄した。爪がオレの頬を掠める。
「チッ」
避けたところで、背中を尻尾に殴られる。衝撃で階段を転げ落ちた。
「おい、ヴァン」
身体中が痛い。気がつけば誰かに捕まれていた。永遠に降る螺旋

階段、助けられなければ、このままずっと落ちていくところだった。ぞっと恐怖が走るが、生唾を飲み込んで抑える。

オレはステッキを握り締めて、オレを抱える人物に怒鳴った。

「エマノン、どういうことだよ！」

「うるさい！　今はそれどころじゃないだろ」

エマノンが顎を杓った先はあのＡＲがいる。

「油断するなよ。あいつ、綿密に動きがプログラムされている。アメリカで流行っているバケモノハント用の獲物ＡＲだよ。設定は強さマックスになっている」

「ハント用ってことは、どこかに弱点があるってことか！」

ＡＲはいわば無機物のようなものだ。攻撃しても本質的には壊れない。中身がないから、痛がらないし、ＤＲのように意識を失って消えたりはしない。だから、最初の化物やあの気色悪い虫のようなＡＲの場合は無理矢理プログラムを壊して終了させる。しかし、こいつはハントの獲物だ。

架空の動物をＡＲで造ってＤＲで狩りをする遊びがあるのは知っていた。オレも何体か手がけたことがある。そういう動物にはわざと弱点を付けておいて、そこを攻撃すると死ぬプログラムが組まれている。

「弱点はルネが今探る」

「必要ない」

オレはゆらりと立ち上がった。怪物がオレを凝視する。爛々と輝く眼は、獲物を見定めて確実に殺すためだ。あいつは本当に動作が細かい。わざわざ前足で地面を掻いて挑発している。

背中がさ、痛いんだよ。階段を転げ落ちた時に肘と膝を擦り剥いた。頬を流れる血が気持ち悪い。オレはインドア人間で、ＤＲでも今まで平和に過ごしてきた人間なんだよ。こういう仕打ちには慣れていないんだよ。

オレはステッキをバズーカに変えた。肩に構える。幸い、少女が使う用だから重さはほとんどない。

『ぷんすかプリンセス』のやえちゃん最終奥義ドハツテンヲツキマシタを披露してやるよ。

怪物が地を蹴った。一気にオレへの距離を詰める。ライオン顔が大きく口を開き、オレを咥えようとしたところで引き金を引いた。至近距離だから外しようがない。オレは本村弘美ではないから技名を叫ばない。青い光が迸って、白い炎に怪物が灼かれる。ぎゃあああああと、耳の劈くような叫び。掠れゆく断末魔までがリアルだった。

「とりあえず全部攻撃しておけば、弱点も確実に突くだろ」

オレはバズーカを消して二人へと振り向いた。

「で、ルネ、エマノン。説明してもらおうか？」

階段の上で一服、いや、ダベるといった方がいいか。

ルネがオレに抱きつこうとするのを、エマノンは阻止する。どうでもいいよ。オレの機嫌は急降下だ。

「ヴァン、姉ちゃんから離れろ」

「ヴァン、格好良かったよ」

「……」

オレはエマノンとルネを睨む。姉ちゃん、だって？

「なぁ、ルネ。お前さ、おっさんじゃなかったのか？」

「バカ！」

何故かエマノンに頭を叩かれた。

「姉ちゃんがそんなわけないだろ。ヴァン、このかわいらしい子がどうやったらそう見えるんだよ」

「お前に聞いてない。第一なんだ？　お前ら顔見知りかよ。姉弟？　どうでもいいがな。裏でつながってたってことか。オレにドラッグプログラム使って密かに嘲ってたってことか？」

普通、友達をハッキングしたりなんてしない。ましてや、死ぬ可能性のあるプログラムを使わせるなんてもっての外だ。結局こいつ

らはオレをただのバカな道具としか見てなかったってことか？
ここ一番の裏切りだ、そう思うのも無理はない。『ルネのお守りヴァン』なんて二つ名は間抜けで嫌だったが、少しだけ懐かれているという自負があった。ルネが友達って言ってくれたことが嬉しかったんだ。それが嘘か？
「通りで知っているはずだよ。オレがドラッグプログラム使わされたことも、トレースされた情報も何もかも。なんだよ……」
やばい。目が潤んでくる。泣いて溜まるものか。目に力を入れて耐えた。
「エマノン」
呼んだルネの声は冷え冷えとしている。
「あ……あ」
オレと瓜二つの姿が消えた。次に、ルネと同じような年頃の男の子が現れる。左肩にギアをつけていて、ＤＲなのだと知れる。
「ヴァン、ごめん」
下げられた頭の旋毛が見える。ルネと同じくカールのかかったプラチナブロンドだった。
「何に対して謝ってるんだよ」
「えっと、ヴァンに嫉妬したこと」
「はぁ？」
「だって！　姉ちゃんいつも遊んでくれないんだもん。いっつも勉強とか言ってるくせに、ヴァンが来ると駆けつけるしさ。すんごいムカツクし。ちょっと懲らしめようって思うのも無理ないって」
全然反省してない。ルネもそう思ったようで、エマノンを背後から羽交い締めにした。
「ヴァン、こいつ、殴っていいよ」
「ね、姉ちゃん？」
力一杯拳骨を入れた。
エマノンが「痛ってー」なんて叫びながら頭を抑える。オレの拳

も地味に痛いわ。
　オレはルネに視線を移した。
「で、ルネは言い訳はあるか？」
「ないよ。ルネ悪いことしてないもん」
　あっけらかんとした声だ。
「今更信じられないかもしれないけど、ルネ、ヴァンがこいつにドラッグプログラム使われたの、ヴァンから聞いてはじめて知ったし。一応お仕置きしてデータも巻き上げたけど、それだけだよ」
「ハッキングは」
「するわけない。友達だもん。ルネ、ヴァンのメールアドレスさえ知らないよ。セインやカインは連絡とりあって羨ましいとか、知らないと連絡とりたいのに煩わしいなぁって思ってた。でも知らないからルネのところに頻繁に来てくれるのかなぁって」
　数日前、ドラッグプログラムについて尋ねるためにルネの元を訪れたことを思い出した。あの時、確かにルネは怒っていた。
「まぁ、エマノンが弟だって黙ってたのは、悪かったかな。身内に犯罪者なんて、恥ずかしいし」
「姉ちゃん、犯罪者とかショック……」
「ドラッグプログラムについて言えば、最初は競争だったよ。どちらが早くソースコードを入手するか。ルネには情報屋として、こいつはハッカーとしての誇りがあるし。共闘はここに乗り込む時に決めた。うん、それは秘密でやってたね、ごめん。今日だけ外からサポートしてくれるように頼んでた」
「そうか」
　だんだんと気分が落ち着いてきた。なんというか、この妹弟は……。
「エマノン、お前本当にキディだったんだな」
「ムカツク！　もう１２だよ！」
「十分ガキじゃないか」
　本当に、反応が子供だ。サイバー課、お前たち小学生に踊らされ

てるぞ。
エマノンを見ていたら、なんだかバカバカしくなった。
「はあぁぁあああ。もういいよ」
わざと盛大にため息をついて子供たちを見やる。うん、疲れたんだ。
「先に進もうか」
オレの言葉に、ルネとエマノンは勢いよく頷いた。

「で、だ」
やっぱり目の前にあるのは永遠にも思えるほどの長い階段なわけだ。
「なぁ、これって終着点があるのか？」
時間がくると敵、倒すとひたすら降る。非常にしんどいシステムである。
何となくＡＲのガラス窓を作った。それを虚空に放る。ヒューと落下音が聞こえて消えた。
「……」静寂。
「ないんじゃないのか」
「エマノン、どう？」
ルネがエマノンに向き直る。
「うん、たった今解決」
エマノンは橙の目を細めて、意地悪く唇を釣り上げる。オレのアバター姿よりも断然様になっている。
「まぁ、終着点とかそんなこと関係ないよ」
偉そうに胸を張ってスクリーンを出した。
「実はさ、姉ちゃんたちがここに入る時に、この空間を造るサーバへのハッキングも開始したんだ。そんでもって、やっと分析も終わったし、ｒｏｏｔも取った」
ルネが笑った。エマノンが笑った。
「つまり、ここをクラックするってこと」

2088年9月25日（土）　その3

空間が割れる。ガラスみたいに亀裂が入り、欠片が零れては消えていく。階段は遠くからだんだん弾けて、煌めいて、足場を残してなくなった。

出てきたのはどこかの部屋だ。窓から覗く空はすっかり宵闇で、薄暗い部屋だった。タワー型のサーバが二台可動している。その隣に壮年の男が椅子に座って呻いていた。オレたちには気づいていない。白髪まじりの頭、それが後ろ姿であっても誰であるかがすぐにわかった。

「二宮正」

ルネの声に肩が跳ねる。驚きに振り返った顔は憔悴しきっていた。写真よりも目尻の皺が深く、数歳老けたように見える。隈も酷い。

「DRだな。どうやってここまで……」

「あの無限階段システム？　壊したよ。下らないものつくりやがって」

エマノンがつまらなそうに吐き捨てる。子供姿だから不貞不貞しいという印象だ。

「で、ドラッグプログラムはどこなんだい」

「くっ……。お、お前たち、ドラッグプログラムを奪いに来たのか！」

二宮正は机にあったチップを庇うように立ち上がる。

ああ、やっぱりあの量産型の安物チップだ。ルネと目配せした。現物がここにある。

「ま、まて。お前もしかして」

非常に素早い動きだな。パッとオレの前に躍り出た。男が目を瞠って凝視しているのはオレのギアだ。掴もうと手を伸ばすが、当然透ける。

「違うよ」

男は困惑の表情を浮かべて、やっとオレに視線を合わせた。
「オレは多々良涼じゃない。多々良涼は13年前に死んでいる」
「嘘だ。つい二週間前新宿で見たって……」
「それはきっとオレのことだよ。珍しいギアを持っているとあの辺では有名らしい」
「『ルネのお守りヴァン』で調べてみたらいいよ」
エマノン、余計なことは言うな。
「嘘だ！」
頑なに首を振る二宮正に、ルネはため息を吐いた。スクリーンを出して二宮正に差し出す。
「死んでるよ。だから探すのは無駄」
男は崩れるように床へ座り込んだ。
「嘘だ。希望が。嘘だ。じゃあ誰が、誰があれを？」
滑稽だ。
「娘が……」
気持ちはすっかり冷めていた。自分から始めたくせに、散々煽っておいて、被害が出たら悲劇に見舞われたみたいな態度をとって、さらには娘を救うためのヒーロー気取りか？　自己欺瞞が。
ルネが二宮正に歩み寄ってその姿を見下ろした。
「二宮正、ルネだよ。二宮聖から話を聞いたはず。ヴァンとルネでずっとドラッグプログラムを追っかけてたんだ。ソースコードがあれば、何とかできるかもしれないよ」
「ソースコード？」
ははははは、口の端から笑い声が漏れる。
「そんなの無い。私にあるのはこのバイナリだけだ。何のために私が多々良涼を求めていたと思うんだ？　全部、全部！　この革新的技術の理論を知るためだ」
ルネを見上げる二宮正の目は血走っていた。
「これは学会で革命を起こす技術だ。偽装現実の常識が変わる技術だ。これさえ明らかになれば、地位も名誉も思いのままま、後世に

名を残す研究者になれる！　そう思って始めたんだ。」
「でも二宮正じゃ、わかんなかったんだよね？」
ルネが首を傾げると、男の目から涙が流れ出た。
「わかんないから多々良涼を探し始めたんだよね？」
「ああ。そうだ。多々良涼に届かなくとも、話題になれば彼が出てきてくれると思った。ある程度は成功していたんだ。噂になりはじめた。なのにどうしてだ。人が死ぬだなんて。そんなつもりじゃなかったのに」
エマノンはルネの隣に立つ。橙の瞳は恐ろしいほどに冷やかだ。
「姉ちゃん、確かにこいつのサーバにはソースコードなんてないよ。多々良涼の論文も。あるのはドラッグプログラムを分析しようとした跡」
「論文、そう論文だよ！　『偽装現実の精神作用』、これさえあれば私も娘も……」
「それも、お前じゃもう手に入らない」
エマノンの冷静な声。
「いや、まだ、可能性は……」
随分と頑なだな。ルネもそう感じたのだろう。二宮正の耳元に顔を寄せて囁く。
「お前には無理だよ。何の情報もない。多々良涼も闇雲にしか探せなかった。多々良涼が死んでたことすら知らない。出来ないよ。お前の娘は救えない。お前は救われない」
娘はお前が殺すんだ。お前は自分を殺す。じわじわとルネの毒が染み込んでいくようだ。決壊するように、男の目は虚ろになる。
限界がきた、その言葉が脳裏に浮かぶ。それほど二宮正は脆かった。
「あ……あ……」
「話してみなよ。最初から。どうやってこのドラッグプログラムを手に入れたのか。どうやって多々良涼まで辿り着いたのか」
二宮正は半ば正気を手放したように感じる。止めどなく涙を流す

目は焦点がぐらぐらと揺らいでいる。ルネの巧みな誘導で、ぽつぽつと語り始めた。

「山本一樹、知ってるだろう。偽装現実研究の先駆者、そして私の大学時代の先輩だった」

「ああ、ＭＩＴね」ルネのつぶやき。

「すべてのきっかけは山本一樹の死だった。山本先輩にはよくお世話になっていたから、私はわざわざ帰国してまで葬式に参列した。氷雨が降っていたのをよく覚えている。そこで、今の妻と出会ったんだ」

オレは昨日のデータを思い出していた。菅野絵里、ｔｏｄｏｒｏ社の創立者で元ＣＥＯ。彼女もアメリカから一時帰国していたのか。彼女と山本一樹は知り合いだった？

「妻は気落ちしている私に話しかけてくれたんだ。葬式の後、雑談を交わすうちに、お互いが近くに住んでいることがわかった。私はマサチューセッツのアパートメント、妻はボストン。アメリカに戻ってからも、交流は続いた。二人の間に恋の炎が灯るのにそう時間はかからなかったよ。私には当時すでに結婚していて不倫関係だったが、私たちの愛はその障害さえ燃え上がる材料にすぎなかった」

エマノンが吹き出した。二宮正は淡々と続けた。

「ちょうど今から二年前、奈良国際大学から教授にならないかとのお誘いがきた。いわば、山本先輩と後を継ぐようなものだ。あの偉大な偽装現実の先駆者の。私は受けることにした。いい機会だからと、同時に元妻とも別れて、絵里と聖三人で新生活を開始したんだ」

ところがどうだ。

「妻と再婚して、あんなに仲の良かった娘とも疎遠になってしまった。どうすればまた話をしてもらえるだろうか。不倫関係から発展した仲だったから、娘は心底私を軽蔑していた。もう娘の心を取り戻すには、もう一回尊敬の眼差しで見てもらえるには私が名誉ある研究者になるしかなかった」

『私はそんな名誉よりもほしいものがあったんだけどな』僕言葉に混じってポツンとつぶやかれたセインの言葉が蘇る。

つくづくこいつはバカだ。

「そんな時、妻が山本先輩の遺品を見ながら言ったんだよ。『これ、何かしら』って」

「遺品？」

ルネの問いに、二宮正は頷いた。

「あ、ああ。遺品だ。山本先輩は自分が亡くなった場合は私に研究の後を引き継いでもらいたかったみたいだ。葬儀に参加したのは遺品を引き取るためでもあった。その遺品の中にアレがあったんだよ」

ドラッグプログラム。

「謎のチップが何枚もあった。他のチップはちゃんとフォルダに分類して整理されていたのに、あのチップだけは無造作にクッキーの缶に入れられていたよ。しかもデータは今の状態ではなくて、完全に壊れてしまっていたが」

かつて、ギアとサーバ間のデータのやりとりはチップを介して行われた。ヘルメット型のギアなら尚更チップは不可欠だっただろう。

ルネの瞳が煌めく。

「流石に日本は狭くてね。アメリカから大量の荷物を持ってかえったが、置く場所に困った。そこで荷物整理をしていたときに偶然妻が見つけたんだよ。それで、ふいに山本先輩が死の前日に来たメールを思い出した。『常識を覆す技術を発見した』ってね。予感がして、私はそのチップのデータを復元することからはじめた」

それがおそらく今年の7月7日までかかったってことだ。

「ドラッグプログラムを使ってみて、その効果に驚いたよ。そして、山本先輩が死んだのは使いすぎて中毒者になって錯乱状態か何かでの自死だ。薬も扱い次第では毒薬になる。これはそれほどに強い薬だと思った」

山本一樹の死はドラッグプログラムに寄るものとは思わなかったらしい。確かに、一度使ったぐらいじゃ想定しないだろう。

「だけど、どうして多々良涼なんだ。今の話だと、山本一樹が造ったことになるだろ」

オレの当然の質問に、二宮正は壊れた笑いで返した。ふらりと立ち上がり、チップが無造作に置かれた机へ向かう。机の抽出しから、古びた封筒をだした。

どこにでも売っている直径3号だ。茶色で、年月のためか染みがある。そこから二宮正は便箋を取り出した。無地のＡ４で、文字が印刷されている。

『オマエガ否定シタ論文ノ証拠ハココニアル』

クツクツとした嗤いが漏れ出る。

「これ一通じゃない。何通も何通も来ている。２０７７年1月１５日から、２月２６日の消印まで」

ルネが封筒の裏を覗き込んで凍りついた。

「多々良涼！」

「そう、多々良涼が送ってきたんだ。彼が自殺したという噂は知っていたよ。だけど、消印は山本先輩が死ぬ直前の日付が最後だ。どうして彼が死んだなんて思うんだ？　でも死んでいた。じゃあ、この多々良涼は誰なんだ？」

「そんな」

「そうだよ。私にもまだ論文を手に入れるチャンスがある。この、差出人を見つけさえすれば！　確かに私には無理かもしれない。だけど、ここまで辿り着いた君たちだ。出来るだろう」

協力してくれ！

顔面は涙に濡れ、薄っぺらい笑いを浮かべながらも、男はオレたちに頭を下げた。パラリ、と髪の毛が何本か落ちる。

ルネは厳しい表情で二宮正を睨んだ。

エマノンは胡散臭いものでも見るかのようにひょいっと封筒を掬う。ＡＲ化してジロジロと眺めた。

「姉ちゃん、これ見てよ」

光に封筒を透かして、エマノンが指差した。
「ん？」
「ここ、宛名の一番下の」
「ふーん」
「何だよ」
気になって、オレも屈んで二人の間に割り込んだ。
「なんだ、代行屋使ってるじゃないか」
封筒には代行屋のサインが透かしになって残っていた。紙を二枚重ねにし、一枚目に文字を書いた時、二枚目にうっすらと文字が残る、あの状態だ。
「何でも屋だな。自分の死後処理を弁護士に任せるのはお金がかかるが、何でも屋を使えば安く収まるし」
「そうだね。家族にも知られたくないこと死後に処理してもらうために代行屋使う人は結構いるね」
「は？」
二宮正も阿呆みたいに口を開けて封筒を透かした。「代行屋○」最後の文字はかかれている途中で封筒からはみ出してしまい、店名までは読み取れない。
「まさかまさか」
二宮正は金魚のように口をパクパク開けては閉じる。
エマノンは興味失せたようにＡＲを消した。
「もしかして、多々良涼は代行屋に頼んで、自分の死後封筒を送りつけてもらってたってことなのかな」
「多々良涼、論拠はあったのに自殺して二年越しで復讐か？　やるねぇ」
あーあ、とエマノンは踵を返した。が、それも途中で止まる。
二宮正が強く机を叩いた。
「そんな。それじゃ……。娘は？　娘？　そんなことはどうだっていい。私はどうなるんだ！　私も！　使ったんだ。ドラッグプログラム」

「ちょっと！」
ルネが止めようとするが、当然触れることなどできない。二宮正は何度も何度も机を、チップを殴った。
「私はどうなるんだ。死んでしまうのか？　何度も何度も、昨日も、発作があった。早く、早く論文を手に入れないと！」
「やめろよ！」
エマノンが叫ぶが、二宮正は止まらない。彼の拳は擦り切れて血が滲みはじめた。どんどんチップが割れてゆく。まるで二宮正の心のように、粉々に砕ける。破片が手に突き刺さっても、二宮正は叫び、チップを、ドラッグプログラムを壊した。
「あああああああ

2088年9月26日（日）

ルネの部屋は彼女の心をダイレクトに反映していると思う。というのは、今日は家具すらない白い空間だったからだ。やる気のなさがひしひしと伝わる。ルネは大の字でうつ伏せになっていた。服もジャージだ。

「何やってるんだ？」

「死体ごっこ」

確かに目が死んでる。

「部屋が白いからチョークで型が書けないぞ」

「いいもん。サイバー課が何かやってくれるもん。ＫＥＥＰ　ＯＵＴのロープ張りとか」

オレは隣に座り込んでルネの髪を撫でた。

「よしよし」

少しは機嫌がよくなったようで、くすぐったそうに目を細める。

「みんなは何時来る？」

「そろそろだよ」

ちょうど日付が変わった時刻だ。

「よし。充電した」

元気良くルネは立ち上がった。ぽんぽんぽんと家具が飛び出る。

思わず顔が引き攣った。

「ルネ、なんだこれ」

「ん～、癒しだよ」

見事に『アリスの国』を彷彿とさせるインテリアだ。たくさんのぬいぐるみ、くまさん型のテーブル、ソファはパンダさんの一人掛け用二つとぶたさんの二人掛け用二つ。天井からぶら下がるオブジェは小鳥のモービルでぐるぐると回っている。

ルネもくるんと回って服を変えた。

「じゃーん。かわいいでしょ。今日は甘えたい気持ちなんだ」

被っている黒のフードにはネコミミがついていた。
「おー。よくがんばったな」
いつものごとく抱きつこうとしたので、さりげなくパンダさんソファへ避難する。
「むぅ」
唇を尖らせながらも、同じく隣のパンダさんソファへダイブするルネ。おっさんじゃなかったんだよなぁ、と愛らしい姿に生温かい目を向ける。何歳なんだろうか。少なくとも12歳以上なのは間違いないが。
「何？」
「いや、子供っぽいなぁって」
「子供だもん」
大きなペンギンのぬいぐるみをどこからか取り出して、ルネはぎゅっと抱きしめた。
「ルネさ。小さいころから何だか大人びてるっていわれてて、あんまり甘えたりなんてことできなかったんだよね。弟が出来てからは尚更お姉ちゃんで。この姿でも何でかみんなから怖がられてるし。だからさ、ルネ、何だかんだ言っても結局甘えさせてくれるヴァンが好きだよ。多分セインちゃんやカインちゃんもそう思ってるはずだよ」
「ルネ……」
照れ隠しにぬいぐるみに顔を埋める仕草は本当にかわいらしいと思う。胸が熱くなった。オレ、ルネと友達になれてよかった。
「まぁ。最初はヴァンのギア珍しさで近づいてみたんだけどね」
その感動もすぐにふっとんだが。いや、その素直さがオレも好きだぜ。

最初に現れたのはカインとセインで、その数分後にサイバー課が到着した。今日はことの顛末の情報交換と反省会みたいなものだ。

慎吾には事前にオレから連絡した。結局あいつはリカちゃんの仇がとれたら良かったようで、結果にはご満悦だ。
「ドラッグプログラムのソースを手に入れて快楽を追求するんじゃなかったのかよ」
そんな軽口の返しが「結局愛欲から得られるものには勝てんよ」だからな。全く気にしていないのは確かだ。
一堂に会して、改めてルネが奈良国際大学であったことを語った。セインは肩を小さくして震えている。カインはセインの手を握り締めて聞いていた。
「それで、論文もソースコードもなかった。ドラッグプログラムも壊しちゃったけど大丈夫だった？」
壊したのは二宮正も、だが。
「ルネさんとは行き違いだったみたいですね。教授部屋へ向かう最中に叫び声が聞こえましたが、そうですか」
ハルカがスクリーンに調書を映し出した。もう完全に機密なんて守る気がないのがありありとわかる。開き直りは恐ろしい。二宮正の口述は、「ドラッグプログラムと繰り返すのみ」とだけ書かれてあった。
「ドラッグプログラムは無くなってしまいましたが、彼の生徒でドラッグプログラム送付を手伝っていた証人もいますし、ニオさんからいただいた情報で十分に書類送検が可能でしょうね。もっとも、今のままだと精神鑑定コースでしょうが」
「そうか」
二宮正は逮捕された。わずか数時間前のことなのに、一部ではもう話題になっている。それがドラッグプログラムに関連しているからだ。
「でも、騒ぎは直に収まるスよ。しばらくは二宮正の動向が注目されるでしょうが、あれは快復しようがないっスね。妄言繰り返して真相は闇の中っス」
「うん。あの時、ドラッグプログラムのマスターも一緒に壊れちゃ

ったみたいだし、強力なコピーガード、リバースエンジニアリング対策込み、たとえまだドラッグプログラムを誰かが持っていたとしても、使っちゃえば終わり。後は消えて伝説、だ」

エマノンですら解析不可能だったのだ。この先誰もその仕組みを知る者はいないだろう。

悔しそうにルネが唇を噛み締めた。

「ルネが甘かった。まさかあそこであなっちゃうとは思わなかった。娘のためっていうのは口実だってことは気づいてた。だって、ドラッグプログラムを最初に使ったのって間違いなく二宮正だもん。セインは言ってた。ものすごく上機嫌だったって。それ聞いて、ああ試したんだってわかったよ」

セインは弱く首を振った。

「ルネの所為じゃないよ。父親ながら、矮小な人間だったから。本当に、迷惑ばかりかけてさ」

短髪の少年は自嘲気味に笑った。

「セインは今後どうなるんだ？」

父親は逮捕、このままだと継母と暮らすことになるのだろうが。

「それが、秋山先輩の両親が僕を引き取りたいって申し出てくれたんだ。あそこは一人っ子だったみたいで。僕は継母が嫌いだし、僕もそのつもりなんだけど……」

オレがドラッグプログラムと関わる発端になった人物、秋山このみだ。カインの肩が揺れて、手が離された。

「カイン？」

セインは不思議そうにカインを見る。

まぁ、セインは知らないからな。

オレは頭を掻いて、そっとカインに囁いた。

「聖はそんな子じゃないって知ってるだろ。大丈夫だよ」

「ああ」

弱く頷いた。カインにとって『秋山』はかなりのトラウマとなっているようだ。それでも、また彼女はセインの手を握った。

「残ったのはドラッグプログラムの後遺症、か」
「それなんだけど」
カインが一斉に視線を集める。
「昨日病院に戻って脳波の検査を受けたんだ。その時にやっぱりフラッシュバックも起こったんだけど、どうやら脳波のパターンが統合失調症と似ているらしい。経過次第だが、今は薬で抑えられている状態だ。時間はかかるかもしれないが、治るみこみもある」
セインはほっとしたように微笑んだ。
「僕も明日病院に行ってくるよ。ヴァンも、行っておくんだよ」
渋々と頷いた。

一通り話は終わった。カインの病状など、まだ不安要素があるが事件は解決、という方向になりそうだ。
ハルカと本村弘美も、すっきりした顔でソファから立ち上がる。
「それでは私たちはまだ仕事が残っているので抜けますね」
「ヴァンさん、今度一緒に『密林少女』見ましょう！　じゃ、またっス」
なんだよその挨拶は。唖然としているうちにサイバー課は消える。
「それじゃ、私たちも落ちるよ」
「ヴァン、ルネ、ありがとう」
セインは憑き物がとれたような表情だ。カインは相変わらず無表情だが、なんとなく口元が緩く笑っている。
「またな」
片手を挙げたところで二人はいなくなった。
あんなに賑やかだった部屋が急に静まり返って、寂寥を覚える。
「ヴァン」
ルネはスクリーンを出した。
「まだ何か気になっていることがあるのか？」
「わかんないけど」

オレはルネの隣に立った。

ピンク色の瞳はスクリーンの女性を映す。二宮絵里、二宮正の妻でセインの継母だ。

「今回、この女は直接関わってはいなかった。だけどね、どうしても腑に落ちないものがあるの。多々良涼のＩＰアドレス、そして写真。あれらは二宮正だけでは知りようがない。それにこの女は元ｔｏｄｏｒｏ社のＣＥＯ、当然多々良涼と顔見知りだよ」

「そうだな」

「この女は不気味だ。多々良涼と関わりのありながら、そんでもって二宮正があそこまで狂っていきながら、この女は本当に『何もしていない』。まるで遠くから傍観しているみたいだ。そのくせ、多々良涼のＩＰアドレスは二宮正に教えてるって？　写真は？」

「二宮絵里はこの一ヶ月間、いや7月からどこで何をしているんだ」

スクリーンが変わる。煉瓦の壁に石畳の道、白人が多いことから外国だと知れる。街につけられた監視カメラだろうか。道行く人の中に東洋人の女が一人だけいた。

「この女、ニオさんの先輩だけあって医師免許も持ってるでしょ。ＣＥＯをやめてからフリーの医者をやってるんだ。脳外科では有名らしいよ。二宮正と結婚した後も数ヶ月単位でこうやって海外で働いてるの。今はマルセイユだっけ」

「なるほどね」

オレはその姿をしっかりと目に焼き付けた。今のオレはきっと睨んでいるようような表情をしているはずだ。だが口について出たのは対照的にのんきな声だ。

「でもルネ、難しく考えすぎなんじゃないか。そんなに遠くだと二宮正の状態なんてわからないだろうし、ましてやあの男なら自分がジャンキーなことは隠匿するだろ。それにこの女は何せ元ｔｏｄｏｒｏ社のＣＥＯだ。二宮正が当時の話を聞いたことがあったのかもしれないし、菅野絵里と多々良涼は知人同士だってことを知っていてもなんら不思議じゃない。写真も集合写真のものだったみたいだ

し、二宮正が目にしていた可能性もあるよ。二宮正が知っていたことだって、単純に訊かれたから答えたんじゃないのか、ＩＰアドレスとか」

「そうかな」

ルネの目は揺らいでいる。

「どんなに疑問が出てきても、謎は謎のままだよ。いつまでも追求していくのはキリがない。なら、ここらですっきり終わりたいな」

「そっか。そうだよね」

ルネはスクリーンを消した。

こうして、ドラッグプログラム騒動はひとまず幕を閉じた。

2088年9月30日（木）

ｖｏｉｄ、それが何を意味するのか、当時の自分には何も理解ができなかった。それを教えてくれたのもやっぱり兄だった。

作りたいプログラムの仕様を入力すれば、勝手にコーディングしてくれるシステムが主流の今、手で一々プログラムを組むなんて非生産的なことはよっぽどのｇｅｅｋでない限りしない。兄はその一部のｇｅｅｋに属する人間で、とにかくプログラミングが好きだった。当然オレに教え込もうとするのは当然で、オレはこうして悪戦苦闘しながらコードを作る。

「ねぇ、お兄ちゃん。ｖｏｉｄとＮＵＬＬって何が違うの？　意味同じでしょ？」

使い方の違いはわかる。ｖｏｉｄとＮＵＬＬは明確に使い分けされているから、混同なんてしない。だけど何でだ？

ｖｏｉｄ、空虚、虚無、何もない。
ＮＵＬＬ、存在しない、ゼロ。

「誠、ほら、よくみてごらん」

兄の指した先は「ｉｆ（ｐ　＝＝　ＮＵＬＬ）　」の式だ。「もし、変数ｐがＮＵＬＬならば真」という意味。

「このＮＵＬＬはどういう意味？」

「えっと、ポインタ……、値が存在しないってこと」

「そう。存在しないってことを示してるんだよ。何かに似てるって思わないかい？」

「んと」

オレの頭はぐるぐると回る。何もないことを教えてくれるもの。

「０？」

正解、と兄はオレの頭を撫でた。インド哲学は偉大だ、なんてつ

ぶやきながら。
「数字の0は数がないってことを示してるだろ。ＮＵＬＬも0の親戚で、何も値が入ってないってことを教えてくれるものなんだよ」
「そうか！」
お兄ちゃん、解りやすい。
「じゃあ、ｖｏｉｄは？」
「プログラムで重要なのは値の受け渡しだって理解しているね」
オレは頷く。プログラムは値の受け渡しリレーをしながら処理をするんだ。
「じゃあ、ｖｏｉｄはどういう時に使うんだ？」
「値がいらない時！」
「そうだよ、誠」
例えば「ｉｎｔ　ｍａｉｎ（ｉｎｔ　ｎ）」という処理の塊があった場合、ｎという匣に値を入れるんだ。「ｍａｉｎ（1）」でｍａｉｎ処理を呼び出す。ｎには1が格納される。1という数字がｍａｉｎ処理の中で調理される。だけど、値の不要な場合はｖｏｉｄって書く。「ｉｎｔ　ｍａｉｎ（ｖｏｉｄ）」だ。決して「ｉｎｔ　ｍａｉｎ（ｎｕｌｌ）」じゃない。
オレは「ｖｏｉｄ」を眺めた。

「ｖｏｉｄは虚無。ＮＵＬＬさえ存在できない場所、完全な無」

心が震えた。

早いもので9月も今日で最後、明日から10月だとは俄に信じがたい現実だ。9月はドラッグプログラムに振り回されてばかりだったが、それももう終わる。

オレは上機嫌で触手クラブから出てきた。そう、あのおぞましい内容の仕事が片付いたのだ。七緒さんもいたく満足してくれた。今までの最高傑作とまで言ってくれたのだ。内心はかなり複雑だが、ジャンキー相手に反応を見れたことが功を奏したのだろう。あの後微調整したしな。報酬は上乗せしてくれた。「次は粘菌ね！」なんて叫びは聞こえないふりをしておく。

今日はビジネスのため、アバターは青年を使用していた。少年と同じ程度の凡庸さ。オレがはじめてＤＲになったときのアバターだ。少年のアバターも思い入れがあるが、こいつはこいつで特別だ。

頭の中で鈴木エーナの『トワイライト』を流しながら、オレは座標を指定した。

マルセイユへ。

時刻なんて知ったこっちゃない。ただ、フランスはもう夜だった。オレがぶらぶらと歩くのは人通りの少ない裏路地だ。街灯カメラなんて迷惑なものに映りたくはなかった。到着したのはホテルの角、ＡＲバリアは目的の場所だけ割らせてもらう。そのまま移動。

ベッドに眠るのは３０代後半の女、と金髪で筋肉のほどよくついた男だ。

裸だから、身体の子細まで判る。この女、男の胸毛が好きなのか。細い指を男のカールした胸毛にしっかり絡めている。

オレは女に視点を移した。

やっぱりな。女はチューナーをつけたままだった。シンプルなネックレスが信号を出している。そこに直接オレは座標を叩き込んだ。オンナの瞼がひくひくと動く。

オレはまた目的地へ飛んだ。

懐かしい場所だ。先日訪れたばかりだが、そう思った。部屋は完全封鎖されていて、この一室だけＡＲバリアが張られてあった。申し訳程度に天井に穴を開けてそこから入った。部屋を見渡すと、サ

ーバは押収されたようだ。昨日はあんなに散乱していたチップの破片も、今は綺麗になくなっている。机には茶色に染まった血がこびりついていた。

三分といったところか。

気配を感じてオレはＡＲバリアを修復した。ＤＲ版完全密室の出来上がり。そして振り向く。

息を切らせた女のアバターが切なそうな表情でオレを見ていた。実体と違って髪は長いし若い。お金を出して作ってもらったのかもしれない。容姿もそれなりに綺麗だ。

「多々良君！」

悲鳴にも似た叫びだ。

「多々良君、わたし、ずっと信じてたの。多々良君が生きてるって。新宿で見かけて、叫びだしそうになったわ。あの時は多々良君が急にいなくなって焦ったけど、もう一回わたしの前に出てきてくれてよかった。ねぇ、わたしのサインに気づいてくれたのね。だから、こうしてわたしを呼んだんでしょ」

「……」

ついさっきまで同衾していた男はどうしたんだろうか。それほどまでに女はオレしか見ていない。

「わたし、やっと多々良君の理論が正しいって気づいたの。あの時はどうかしていた。大切な多々良君を信用せず、あまつさえ会社も辞めさせようだなんて。山本先生が死んで、多々良君がわたしにそれを証明したんだってわかったわ。今からでも遅くない。一緒に論文を発表しましょう！」

何も言わないオレに女は焦れたようだった。

「もうっ、多々良君、何か言ってよ。あの時はわたしが悪かったって。謝るから」

「残念だけど、オレは多々良涼じゃないよ」

女は怪訝な顔をする。

「だって、それ、多々良君のアバターよ。冗談は好きじゃないわ」

オレは女に歩み寄った。顔が触れるギリギリまで近づける。
「菅野絵里、いや、二宮絵里。オレは多々良涼の弟だよ」
瞳孔がぎゅっと縮んだ。
「おとうと？　だって、多々良君は身寄りがいないのよ。戸籍も、弟なんて存在しない。確かに昔弟がいるって、アパートに来てるって言ってたけど……。だから誘いを断る口実に嘘吐いたんだって思ってたけど」
「うん。血は繋がっているけど、オレは私生児だからね」
多々良涼の父親の愛人がオレの母だった。父は認知するつもりだったらしいが、オレが生まれる前に死んでしまった。今この事実を第三者が辿るのはかなり難しいだろう。関係者はオレ以外みんなもうこの世にはいないから。
「そ、そう。分かったわ。弟の、確かマコト君だったね。いいわ。それで、わたしを呼び出して目的は何？」
「目的？　オレをおびき出したのは自分なのに？」
二宮絵里はゴクリと喉を鳴らす。
「ええ。そうよ。全部わたしがしくんだ。あんな下らない男とまで結婚して。十一年、十一年もかかったのよ！」

オレは椅子に腰かけた。皮張りのいいものを使っている。手摺りはオークの木だろうか、ひんやりとして滑らかだった。
悠然としたオレの様子に苛立ったのか、二宮絵里は落ち着き無く足をならして、声を荒げた。
「マコト君は全部の真相が知りたいのね。いいわよ。教えてあげるわ。でも、交換条件よ。わたしだって知りたいもの。多々良君の理論が。あの『偽装現実の精神作用』が。山本先生のことも。それでいいなら喋るわよ」
「うん、まぁそうだね。オレも二宮絵里に話すつもりで来たわけだし。条件を飲むよ。
女の顔がとたんに明るくなった。

「ええ、そうね。どこから言おうかしら。最初から？」
「山本一樹が何をやったか、菅野絵里が兄を解雇しようとしたところまでは知ってるよ」
兄が論文を山本一樹に提出し、一蹴された。それを知った菅野絵里は兄を無能扱いして切ろうとした。あの時の兄の苦痛、絶望が日記に綿密に綴られている。しかもこの女は当時の山本一樹の愛人で、ｔｏｄｏｒｏ社のＣＥＯでありながらｔｕｚ社に売ろうとした人間だ。結果的にこの女はＣＥＯを下ろされたが、ｔｏｄｏｒｏ社はなくなってしまった。とんだ女狐ってわけだ。
「そ、そう。じゃあ山本先生が死んだところからかしら」
女は忙しなかった。オレの前をぐるぐると歩き回る。
「山本先生が死んで死因を聞いて、わたし気づいたの。これ、多々良君がやったんだって。論文を全否定した復讐に山本先生を殺したんだって。だってそうでしょ。山本先生は持病一つない健康体で、死因も不明だもの。殺人でも自殺でも、ましてや病死でもない。血栓もないのに急に心臓が止まるなんてありえないのよ。それで、わたし、すぐさま山本先生のギアを確認しようとした。だけど、触らせてもらえなかった」
忌々しそうに歪む顔。
「研究に関する遺品は全部二宮正行きって、そんなことないでしょ！」
本当にそうだよな、と思う。あの男無能そうだし。
「でも、どうしても多々良君の革新的な技術が知りたかった。あれを発表すれば、まさに世界が変わるもの。どうにかしてあの男に近づいて愛人になった。それでも、遺品にはなかなか手が出せなかった。本当にあの男わたしに溺れているくせして、世間体だかなんだかで離婚しないんだもの。やっと結婚したのが二年前、そこからわたしは二宮正にドラッグプログラムの存在を教えた」
二宮正の話と全てが繋がってゆく。元より予想していた内容だった。

「あの男に扱いきれないから、と多々良涼探しを勧めたのもお前か」
「そうよ。わたしが付き合った中で一番使えない男だったわ。頭にお花畑が咲いていて、その上で蜂が八の字ダンスを踊っているようなおめでたい人間だった。結婚してからは操縦がしやすくてよかったけれど」
「そうか」
女は紅い唇を舐めた。ルネがするようなかわいらしいものではなく、女の色気を全面に押し出したような動作だ。
「次はマコト君の番よ」
オレは笑った。

オレの部屋にはもうどこにもつながなくなったサーバが一台ある。兄の遺品で、当時からしても若干旧い型だが、性能は十分にあった。そのサーバの中には、兄の遺したもの全てが入っている。日記、論文『偽装現実の精神作用』、そしてドラッグプログラムのソースコード。

オレたちは頗る仲の良い兄弟だった。兄がオレの存在を知ったのは父の葬式だったらしい。本妻の子、愛人の子、間の父親は死亡という奇妙な家族だったが、兄が東京にいる間はよく一緒に遊んだ。兄が奈良に引っ越してしまった後も、夏休みになると遊びにいったりと、関係が崩れることはなかった。

季節外れ、奈良を滅多に離れることのなかった兄が急にオレの家を訪れたのには驚いた。後ろのカートには兄の命ともいえるサーバとギア。
「あげるよ」
オレはバカだった。差し出された憧れの品々に後先考えなく飛びついた。兄が近所の公園で首を吊ったと知ったのは、その次の日だった。荻窪、そこにオレの家がある。

スクリーンを出した。情報はオレのギアについたチップから引き出している。女はそれを食い入るように見つめた。
「確か、菅野絵里は医学部神経科出身だよな」
「そうよ」
不思議そうに返す。
「快楽はどうやって生まれるか知ってるか？」
「え？」
「快楽物質の出し方」
「麻薬とか？」
その程度か。
「快楽物質は、長時間運動したり、音楽を聴いたり、絵を見たり、例外的なのだとひどい睡眠不足でも放出されることが知られている。その快楽物質を放出するための条件を極端に切り詰めたのが、ドラッグプログラムなんだよ」
「意味が……」わからないか？
「例えば、音楽は聴覚だ。良い音だと、音楽に浸る。その時快楽物質が出るのは、『快い』聴覚の刺激があるからだ。その刺激を抽象化する。絵画は視覚だ。絵を見て綺麗だと思う。『快い』視覚の刺激を抽象化する」
二宮絵里は息を飲んだ。
「そうやって、五感全ての『快い』刺激を集めたものがドラッグプログラムだ」
「二宮絵里がそう言うならそうなんだろうな」
オレに医学のことはわかりようがない。電子ドラッグも根本は同じ仕組みだが、ドラッグプログラムはもっとコアだ。飽きのこないように完全にランダムで生成される。まさに純粋な快楽だけを与えるプログラムだった。
「でも、あの男はドラッグプログラムを使うと凶暴になるっていっ

てたわ。あれは何？」
　ドラッグプログラムを使って感じた怒り。兄の『本物の』ドラッグプログラムを使ったことのあるオレだからこそ解る。
「あれは、歪み、だよ」
「歪み？」
「そう。元々二宮正がばら撒いていたプログラムは、兄の作ったドラッグプログラムの残骸だ。修復したようにみえて、実は完全じゃなかったってことだ」
「あなたはそれを理解しているというの？」
　信じれないといわんばかりだ。まぁそうだろうな。オレは頭を指さした。
「島皮質だよ」
　脳が専門なら判るだろ。
「ここの視覚野の受容体は、怒りを感じる神経群と隣接している。不要な視覚の刺激を何度も受け取ったら、怒りを感じる神経までが刺激されるんだよ。だから、怒りが湧く。二宮正のドラッグプログラムは、不要な刺激が多すぎたんだ。快楽だけじゃない、余分なものまで混じってしまう」
「なるほど」
　本当はそれだけではない。刺激のパターンを分析しただけでは、快楽は生まれない。エマノンのトレースは無駄だった理由だ。ギアを使うのは、流す回路を指定するためだ。どこの場所からどういう刺激を与えるか。刺激のルートはどうか。強弱。そしてこれは今の自動でコーディングしてくれるシステムでは行えないほど複雑で、難解だ。ドラッグプログラムを作れるのはプログラミングに精通している兄だったからこそと言える。
「素晴らしい技術ね！　想像以上！　なんで山本先生はこんな論文を否定したのかしら」
「単純に読んでないだけだろ」
　それとも、読んでも理解できなかったか。机上の空論で終わらせ

たか。
何も快楽が論文の主旨ではない。兄は、刺激によってある程度感情を動かすことができると証明したかっただけだ。それがＤＲだと容易なんだって。別に快楽でも怒りでもなんでも良かった。たまたま作ったのが快楽だった。だが、そんなことをこの女に言っても無駄だろう。
二宮絵里は何か思い出したように手を叩いた。
「そうよ。でも、死ぬんだわ。ドラッグプログラムを使うと人が死ぬ」
オレはこの女と話をするのがバカバカしくなってきた。
「当たり前だろ。快楽っていうのはストレスだ。お前も医者なら解るだろ。短時間で何度も強いストレスを受けたら死ぬって。島皮質は刺激を覚える。ドラッグプログラムを使いたくなる。使う。ストレス。快楽に耐性ができる。使えなくてもストレス、使ってもストレス。その永遠ループだ。いわゆる中毒症状だな。それが限界に達して、ある日プッツンするんだよ」
あれほどの強烈な快楽だ。ストレスは並じゃない。情緒も不安定になる。カインが統合失調症と似たような症状だと言っていたが、当たり前だ。まさにドラッグプログラムのフラッシュバックは統合失調症をなぞるようになっているんだから。自傷行為に走ることもある。
ドラッグプログラム使用者がＤＲで死ぬ傾向にあるのは、ギアがフラッシュバックのキーになりやすいからだろう。サイバー課は拾えてないが、ギアを付けていない状態での死亡者もいるはずだ。
「理解できた。ネックは死ぬってことだけね」
うんうん、と上機嫌で二宮絵里は頷く。
「それで、山本先生を殺したのは、君？」
十一年前、まさにここが山本一樹の教授部屋だった。

兄が死んで、泣きながらサーバを調べた。日記はすぐに見つかった。

オレは中学に入学したばかりだったが勉強どころではなかった。引きこもりになっても、母はオレの気持ちが解るのか、何もいわなかった。舐めるように何度も何度も日記を読む。研究が認められない苦悩、悲しみ。オレからすればかなり意外なことに、兄は菅野絵里に淡い恋心を抱いていた。兄は女狐の本性を知らなかっただけなのだろうが。そんな憧れの人からの会社解雇計画、オレの兄が精神を病むのもさしておかしくない話だ。

だが、兄の自殺の直接的要因ではない。

「なぁ。多々良涼がドラッグプログラムの中毒者だったってのは知ってるか？」

「え？」

不意を突かれたような素っ頓狂な声。

「兄も論拠が弱いって知ってたから、ドラッグプログラムを作った。だけど、それを使っているうちにおかしくなったんだ」

「……」

「主に山本一樹の重圧で」そして、好きな人からの否定で。「短期間のうちにドラッグプログラムを作って試しているうちにジャンキーの出来上がりだよ。そして死んだ」

兄がオレにサーバとギアを託したのは最後の理性からだった。

「日記を読んで、オレは山本一樹を憎んだよ。だってそうだろ。あいつが、兄の論文を受け入れてさえいれば！　修士過程なんてな。よっぽど理論破綻してなかったら修了できるものだろ。兄にはもう後がないってわかってるのに。あいつは！」

奈良国際大学は研究者育成に特化した大学だ。中途半端な論じゃ駄目か。

でも！

「兄は正しかったんだ。オレはそれを証明したかった！」

必死で兄の論文の理解、ソースコードの解析をした。奈良国際大

学修士課程の人間が書くだけあって、到底中学一年生に理解できるものではない。把握するまでに一年半もかかった。

「オレが兄の理論をものにして、行ったのは山本一樹にドラッグプログラムを送ることだった。決して内容が外からわからないように何十もバイナリを保護して、コピーガードもつけた。山本一樹はすぐに試したよ」

封筒を送りつけたのはオレだ。代行屋にも用事を頼むことがあったが、ドラッグプログラムは自分の手で送っていた。封筒についた透かしは偶然だった。ルネとエマノンは都合よく勘違いしてくれたが。

「山本一樹を中毒者にしようとしたが、別に死ななくてもいいと思ってたんだ」

西日が差し込んでくる。昨日と同じだな。目を細めて空を見た。

「区切りがつくまでは、と兄のＩＰアドレスやメールはそのままにしてたんだ。ある日、山本一樹から兄宛に一通のメールが送られてきた。嗤っちゃうような内容だよ。『共著で論文を発表しよう』とだと。どこぞの誰かと同じことをあの男は吐いた」

女の口がひくっと動く。

「『論文を認めてやってもいいから共著』が条件だ。図々しい。さすがにオレも切れたね。殺そうと思った」

兄の論文を精読しながら、同時に考えていたことがある。

「ｖｏｉｄだよ」

「ｖｏｉｄ……。虚無、隙間、深淵、空虚な、動詞は『無効にする』」

この時だけはオレも二宮絵里を認めた。

「オレは、兄が中毒で苦しんでいたのもやるせなかったんだ。実際に自分自身でドラッグプログラムを試すこともあったからっていうのもある。だから、ドラッグプログラムの中毒症状をなくすプログ

ラムを作った。まさに、ドラッグプログラムを無効にするための、ね」

「マコト君！」

女の顔は喜色でいっぱいになった。オレを抱きしめんばかりに詰め寄る。

「素敵よ！　そんなことができるのね。完璧じゃない。ドラッグプログラムとそのプログラム、併せて発表したら、もう世界が変わっちゃうわ」

「そうだな。結局、そのプログラムを使って山本一樹を殺したんだ」

「え……」

女の動きが止まった。みるみる顔を強張らせる。

「これがそれだ」

オレは二宮絵里にｖｏｉｄプログラムを送った。白い光が彼女の腸に突き刺さって消える。女は緩慢に斃れた。目はもはや何も写しはしない。痙攣さえない。

「ｖｏｉｄプログラムは、ドラッグプログラムの反対を行う。すなわち、刺激をまったく受け取らない状態を一定時間作る。それで島皮質をリセットする」

人が刺激を一つも受け取らないという状況は普通考えられない。耳を塞いでいても、聴覚は働いている。目を瞑っても、視覚は動いている。味覚、嗅覚、触覚もいわずがもがなだ。島皮質の記憶を全否定し、受け取る刺激を再認識させるのが、このプログラムの目的だ。通常は数分。

だが、オレはこの女に対して時間の設定を行わなかった。小さい白の部屋に人を閉じ込めて数日で発狂してしまうように、人間は刺激の少なさに対して想像以上のストレスを脳に与える。通常あるはずの刺激、五感が完全に途絶えた場合、脳に負荷が掛かり最悪死亡することになる。山本一樹は二三時間で逝った。

ＤＲになっている間は、実体も動きやしない。二宮絵里の同衾男

が現状を把握する前にこの女は死ぬだろう。
「どうだ。刺激が全部ｖｏｉｄに送られる感覚は」
なんて言ってももう聞こえやしないけど。

最初はルネのいうドラッグプログラムがオレに関わるものだとは思わなかった。あの頃の日々はもう捨て去ってしまった過去にすぎない。だが、エマノンにドラッグプログラムを使わされて、やっとわかった。

これは、十一年前の後始末のようなものだった。オレが復讐心にかられて行ってしまった過去の清算だ。だから最後まで付き合った。知らないふりをして立ち回るのは、演義の下手なオレには骨の折れるものだったが。

おかげで、もう内情を知る者はいない。

山本一樹が死んで、改めてオレはドラッグプログラムを公開せず、オレに兄の研究成果を預けた意味を考えた。何も言わないまま消し去ることもできたんだ。それはきっと、オレに全てを委ねるってことだろう。

オレは今の世界が楽しい。改革だの、常識をひっくり返すだのは御免だ。プログラムなんかに感情を操作される世界などいらない。ましてや、ドラッグプログラムの蔓延した世界など、クソクラエ。

だから、兄の成果は眠らせることを選んだ。

さて、これからセインとカインに、バレないようにこいつを流して治さないといけない。それで、帰ったらこのギアにつけたチップを処分する。今使っている回線は追跡できないようプロキシを多重でさしているからそれも戻す。それで終わり。

もうすぐ１０月だ。

ギアを捻る。カチ、と音がしてパルスが走った。

２０８８年９月３０日（木）（後書き）

読了ありがとうございました。

＊ネタバレ有り　資料

ｖｏｉｄ執筆にあたって使っていたメモです。

２０１０頃　ＡＲ技術誕生
２０７０頃　ＤＲ技術発達

２０７４年　　ｔｏｄｏｒｏ社起業
２０７５年１月　ＧＲ００１Ｂ発売
２０７５年３月　多々良涼死亡（ドラッグプログラムによるもの）
２０７５年５月　ｔｏｄｏｒｏ社買収
２０７７年２月２８日　教授死亡（ｖｏｉｄプログラムによるもの）

２０８６年９月　セイン転校
２０８７年２月　セインカインＤＲデビュー
　　鈴木エーナブーム

２０８８年
８月　カイン、ドラッグプログラム入手
８月　秋山このみギア入手

８月２０日前後　ドラッグプログラムの噂
８月２５日　ドラッグプログラムの体験談
９月０２日　初の死亡者確認　中野祐介１８歳

９月０６日（月）　セインドラッグプログラム試す

９月０７日（火）　セイン、梅田で発狂する人目撃
９月０８日（水）
９月０９日（木）　ドラッグプログラムとの遭遇
９月１０日（金）
９月１１日（土）　秋山このみ死亡
９月１２日（日）　セインからの依頼
９月１３日（月）　ルネ、タチバナから情報収集
９月１４日（火）　セインと秋山このみの家に突入、情報ハッキング
９月１５日（水）　サイバー課と契約、ルネに見つかる
９月１６日（木）　ヴァンの気づき
９月１７日（金）　カインとの話、カイン倒れる、サイバー課　エマノンとの邂逅
９月１８日（土）
９月１９日（日）　サーバお掃除。ドラッグプログラム入手。サイバー課にドラッグプログラムわたす。そして使用。リカちゃん事件のあらまし
９月２０日（月）　ルネから情報を得る。仕事の話。セインのこと。におさん。
９月２１日（火）
９月２２日（水）　お仕事のお話。サイバー課＋ルネ
９月２３日（木）　におさんとサイバー課　エマノン
９月２４日（金）　新宿フィーバー、カインとセイン
９月２５日（土）　決行！
９月２６日（日）　エピローグ１
９月３０日（木）　エピローグ２

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2026j/

void

2012年1月4日09時48分発行